流域圏 VI-II
担い手づくり事例集

流域圏大学の構築に向けて

流域の視点から見た治水・環境と総合水管理



矢作川流域圏懇談会　2026年6月

矢作川流域圏懇談会　とは…

長野、岐阜、愛知の３県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもと、住民がさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009（平成21）年7月、河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取組を行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

流域圏懇談会のメンバーは学識者・行政・関係団体・市民団体などで構成され、地域部会（山・川・海）や市民部会に所属し、各々が設定した課題の解決策に向けて情報を共有するため、ワーキンググループやフィールドワークを行っています。

流域圏担い手づくり事例集　とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、2013（平成25）年度からの４年間、矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体（一部川や海の活動団体も含む）の取材記録をまとめ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を４冊発行しました。2017年からは、取材先として川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改め、2018年までに２冊を発行しました。

これらの事例集づくりを通じ、流域内のネットワークが更に広がり、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことをめざしています。

・・・

はじめに

洲崎燈子
（豊田市矢作川研究所
主任研究員）



流域圏担い手づくり事例集は、流域圏懇談会山部会のテーマ「矢作川の恵みで生きる」に基づき、持続可能な流域づくりにつながる活動をしている団体に取材をして、年に1冊、昨年度まで10冊を発行してきた。前号と11冊目になる本号では、少し方向性を変えて「流域総合水管理」をテーマとしている。

前号のⅥ-Ⅰでは、2024年に国の方針として打ち出されたこの理念を紹介した。これは全ての流域住民に関わる大事な考え方だが、まだ全然周知されていない。そこで、流域総合水管理についてみんなが理解し、その実現のために何ができるかを考えられる冊子を作ることをめざした。その作成に向けて行った公開講座の中で、流域総合水管理の達成に向けては、「流域圏大学」の存在がどうしても必要であるという話が出てきた。そのため本号はⅥ-Ⅱとして、「流域圏大学の構築に向けて」をテーマに作成した。流域圏大学がどのような形になるか、改めて座談会を行って考え、また、既に流域圏大学の構成要素ともいえるような活動を行っている団体に取材し、その記録をまとめる形で本号の作成を行なった。

事例集の作成にあたっては、隔月程度の頻度で行っている流域圏懇談会ミライ会議という部会間連携調整会議の中で、編集作業や取りまとめをしている。その中で、これまでの人口増加時代は各人ができることをやる分業化、専門化、縦割り、たこつぼ化が進んだが、これからの人口減少時代は、1人の人がいろいろなことができる百姓化と、人々がネットワークを作って結び付き合うことが必要だという話が出てきた。また、前号の事例集では、多摩川と矢作川と球磨川がおおよそ同程度の規模の流域でありながら、人口密度が全く違うことが紹介されている。多摩川流域圏ではまだ人口が増え続けており、人口減少を実感として受け止め、対応を考えることは難しい。球磨川流域圏の人口は既に著しく少ない。人口は減少に転じているものの、その規模は多摩川と球磨川の中間程度である矢作川から、今後の人口減少時代にどう楽しく暮らしていける流域をつくるのか考え、発信していければと考えている。

本事例集の構成について

矢作川流域圏懇談会 公開講座「流域の視点から見た治水・環境と総合水管理」（2024年12月）で提唱された「流域圏大学」については、そこにいた多くの者が、とりわけ懇談会に参加しているメンバーは、これに共感し、実現できる、あるいはもう存在しているのではないかとさえ思った。

これを踏まえての本事例集であるが、まず大学研究機能としての「豊田市矢作川研究所」、教育機能としての「未来創造プログラム」を二つの柱として、流域圏全体「山から海まで」を視野に入れ、また未来創造プログラムが矢作川流域のみならず伊勢湾流域全体、あるいは天竜川流域までフィールドとしていることから対象を広く選定した。何より流域圏担い手づくり事例集Ⅴのテーマが「伊勢湾・三河湾の豊かさを考える」であったことからも、繋がりがとても良い。今回、流域圏と言いながら都市が抜け落ちているのではないかという指摘に対しては、同じく事例集Ⅲ「学童保育木造化プロジェクト」、同Ⅳ「錦二丁目都市の木質化プロジェクト」が補完しており、懇談会10年誌発刊以降のⅢ～Ⅵ-2までが、ある意味一連のものである。もっと言えば、そもそも過去10冊発刊している事例集全ての取組みが「流域圏大学」を構成するファクターなのではないかと、山から海まで流域全てのテーマが「矢作川の恵みで生きる」の共有なのだと、妄想を膨らませている。

以下、序章で「流域圏大学とは何か どうあるべきか」座談会の記録、第１章「川・海（水系）から繋ぐ」、第２章「森の大学 ～山から繋ぐ～」、第Ⅲ章「流域圏の担い手たち ～新時代の人育て～」という括りでまとめてみたのが、今回事例集の主な構成である。

第３章では、矢作川、（矢作川水系）乙川、鈴鹿川、庄内川を取り上げており、流域ごとの大きな違いについても感じながら、未来を創造していただけたらと思う。第Ⅱ章「森の大学」で扱っているのは、主に懇談会・山部会の舞台であるが、同時に第Ⅲ章「担い手たち」の重要なフィールドとなっており、その繋がりも意識いただけたら、より理解いただけるのではないだろうか。

（ミライ会議一同）



＊過去の事例集で取材した団体・個人は本文中では**緑色のフォント**で表示しています。

目　次

はじめに・本事例集の構成について

序章
　対談「流域圏大学の構築に向けて」・・・・・・・1

第１章　川・海から繋ぐ
　豊田市矢作川研究所・・・・・・・・・・・・・23
　One River・・・・・・・・・・・・・・・・・40
　魚と子どものネットワーク　・・・・・・・・・54
　藤前干潟を守る会　・・・・・・・・・・・・・57

第２章　森の大学　～山から繋ぐ～
　根羽村から／森とまちの流域学　・・・・・・・62
　平谷村から／少ない人口を強みに　・・・・・・67
　三河山間地から／三河の山里サポートデスク　・・　75

第３章　流域圏の担い手たち　～新時代の人育て～
　ニワケンという生き方　・・・・・・・・・・・78
　女子よ　森へ行こうプロジェクト.・・・・・・・82
　未来創造プログラム　・・・・・・・・・・・・87

まとめ・おわりに・・・・・・・・・・・・・・・119



序章 対談
流域圏大学の構築に向けて



対談 「流域圏大学の構築に向けて」

蔵治光一郎氏 × 萱場祐一氏



蔵治光一郎氏：東京大学大学院農学生命科学研究科教授、矢作川流域圏懇談会 山部会座長
萱場祐一氏：名古屋工業大学社会工学科教授
＜コーディネーター＞
洲崎燈子氏：矢作川流域圏懇談会、豊田市矢作川研究所主任研究員（2026 年 3 月退職）
近藤 朗氏：矢作川流域圏懇談会、愛知・川の会事務局長、元愛知県職員
（2026 年 1 月 7 日実施）

●はじめに「本事例集のねらい」

洲崎：

この流域圏担い手づくり事例集Ⅵ-Ⅱは「流域圏大学の構築に向けて」をテーマにしていますので、今日はこのことに関して、蔵治先生と萱場先生のお二人に自由にお話をしていただきたいと思います。

流域圏担い手づくり事例集は、流域圏懇談会山部会のテーマ「矢作川の恵みで生きる」に基づき、持続可能な流域づくりにつながる活動をしている団体に取材をして、年に 1 冊、昨年度まで 10 冊を発行しました。ここしばらくは都市と農山村の交流を中心に、流域の様々な人々を巻き込んだ活動を紹介してきました。

前号は少し方向性を変えて、今打ち出されている流域総合水管理という考え方を取り上げました。これは全ての流域住民に関わる大事な考え方ですが、まだ全然知られていない、共有されていない。そこで流域総合水管理についてみんなが理解し、その実現のために何ができるか考えられる冊子にしたいということで作成しました。その作成に向け、ちょうど 1 年前に行った公開講座の中で、**流域総合水管理の達成に向けて流域圏大学の存在がどうしても必要である**という話が出てきました。そこで、**流域圏大学がどのような形になるかを考える、また、既に流域圏大学の構成要素ともいえるような活動を行っている団体がたくさんありますので、そうした団体に取材を行い、その取材記録をまとめる**という格好で、この事例集を作成していきます。近藤さん、何か補足があったらお願いします。

近藤：

1 年前の公開講座で流域圏大学という提案をお二人からしていただき、すごくインスパイアされて、これだと思いました。流域圏大学のテーマは「矢作川の恵みで生きる」の共有ということにしようかなと。これは実は山部会のテーマなんですけど、山部会だけじゃなくて、川も海も全部の共有にするという話を落とし込みたいということも含めまして。

洲崎：

それでは、蔵治さんと萱場さんの方から、このテーマについてご自由に発言していただければと思います。

●精神的支柱になる流域圏大学

萱場：

今、前年度の鼎談の記録（流域圏担い手づくり事例集Ⅵ-Ⅰ）を読んでるんですけど、最後の流域圏大学の章ですよね。私は、**確固たる拠点が必要だと思います**と話しました。今、球磨川で流域治水の研究とか実証をやっていますけど、やっぱり熊本県立大学があって、島谷幸宏先生がリーダーシップを取ってみんなを引っ張っている。そこが我々の精神的支柱にもなってるんですよね。

技術の交流だとか知識の交流という意味もあるんですけど、総合水管理も含めて、いわゆるハードエンジニアリングだけじゃない、グリーンインフラだとかハイブリッドインフラみたいなものを考えた時に、やっぱり世間全般で見ると非常にマイナーなグループだと思ってます。

ちょっと話はずれますけど、昨日、建設業界団体の賀詞交歓会があったんですよ。名古屋のホテルで毎年やるんですけど、知事や市長、男性ばかりが 300 人ぐらい集まる。愛知県の幹部の皆さんも出ておられました。環境との調和とか、そういう言葉は一切出てこない。出てくる言葉は国土強靭化一択みたいな、ハードエンジニアリングで国土を改変しましょうみたいな感じの発言が非常に多い。大学にいても、うちは工業大学なので、どっちかというとそういう色が強いんですよ。やっぱり最先端の AI とか、産業界にどれだけ貢献できるかが大学の価値、そういうスタンス。

利権のある集団に対して、我々がやろうとしていることっていうのはマイナーです。ほんとにこっちの方向でいいのかなって不安になることすらあるわけじゃないですか。

その時に、いろんな人が集まってお互いに元気をもらうようなことっていうのは、すごく大事かなと思います。この流域圏大学の一つ大事なところというのは、やっぱり**みんなが元気を与え、元気をもらうみたいな、そういう精神的支柱になること**かなと。

昨日、そういう場に出席していて、自分の居場所がちょっと違うんじゃないかとか、また我々が普通にやっていることと向こうとのパワーバランスがだいぶ違うよなと感じながら帰ってきました。でも、県立大に行ったり、球磨川に行ったりすると、自分を取り戻せるような感じもあるし、**自分を取り戻せる場所、居場所みたいなもの**がちゃんとあったら、すごくいいなっていう気はしますよね。精神論で申し訳ないんですけど、蔵治先生はそういうことを感じませんか。

●既存の学びの場をネットワーク化

蔵治：

そうですね。流域圏大学についていうと、既に先行事例というか、同じことを考えてる人が世の中にはだいぶ前からいて。先日、私は「**女子よ森へ行こうプロジェクト（女子森）**」というグループの人たちのイベントで渋澤寿一さんとご一緒することがあって、そこでいろいろ聞いたら、渋澤さんは 2015 年に、岡山県の高梁川で流域大学を立ち上げている。多摩川では東京農業大学が小菅村に源流大学を 2010 年に設立しています。

そういう先行事例があるんですけど、渋澤さんがおっしゃるには、なかなかうまくいってない。当初の設立時の熱意とか関係者の盛り上がりみたいなのはあっても、そこから 10 年以上経ってくるとそれも冷めてきたり、あるいは世代交代問題という NPO 等によくありがちな課題が出てきたりするというお話でしたね。

萱場先生がおっしゃった通り、メインストリームではないところ、メインストリームは明治政府が作り上げた近代の法制度であるわけで、そのメインストリームの縦割りの中から外れたところで何かをやるとい

うことの難しさを突き付けられてると思うんですよね。

矢作川には矢作川研究所があるけれど、矢作川研究所も結局は市役所という枠があり、河川課という枠があり、その中に縛られてるというのが、どうしてもなかなか解決できない。そうなるとやっぱり大学ぐらいしかそこを裏支えできる組織はないのかな。熊本の場合、県立大も決して球磨川流域の中にキャンパスがあるわけじゃないという点で課題はあるんですけど、矢作川の場合は、核となってくれそうな大学が今のところ見つかっていないと思います。

だから、私のイメージは、核となる組織をつくるというのは、それをメインストリーム化、主流化したいということはあるけれど、**その前の段階として、既存の縦割りの中で既にある学びの場みたいなものをネットワーク化する段階はあり得る**のかなと。

今、私はとよた森林学校に関わっていて、豊田市役所の森林課という枠の中でやってるだけですけど、その中にも意図的に、森林と流域の海や川とのつながりみたいなものも織り込んでいくことはできる。そういう形で雨後のたけのこのように、流域の中にいろんな学ぶ場があって、そういうものをつないでいったものを、バーチャルかもしれないですけれども、何らかの学校みたいに位置付けて、学生だけじゃなくて、社会人もそこで新しい学びを得られるとか、あるいは楽しみも得られるとか、そういうステップを考えざるを得ないかなと思いますね。



●経済も含めた総合大学に

蔵治：

あと、今日、特にお話ししたいと思っているのは、結局、萱場先生がおっしゃっているように、何かいいことをやろうとしても現実的なオプションがない、選びようがないよねっていうことがすごくあります。「矢作川流域の恵みで生きる」という言葉自体は、すごく多くの人の共感が得られると思うんですよ。だけど、じゃあ具体的に何をすればいいの、どうやって私たちは矢作川の恵みで生きればいいのっていう質問になる。日々の暮らしの中で何かを買うとかいうときに、矢作川の恵みで生きる買い物とか、そういうレベルの話だと思うんですよね。**オルタナティブがつくり出せる仕組みがどうしても必要で、それはやっぱり食料なり、物なり、なにがしか経済とのつながりが不可欠**だろうと。

経済とか実体としての物なしに理念だけ語ってても限界があるので、第1次産業でも、第2次でもいいんですけど、**産業ベースの人たちともう少しちゃんと話していく必要がある**。だから、新年会で集まった男性たちの中に、そういう観点で興味を持ってくれる人を増やすみたいなこともあり得るんじゃないか。やっぱり**流域圏大学に経済学部**は絶対必要ではないかと思うんですよね。

萱場：

法整備と経済も大事ですもんね。

蔵治：

渋澤さんの話を聞いていると、彼はやっぱり歴史文化に傾倒されていて、なかなか法制度とか経済というところまでつながってないところもあるので、そういう**総合大学みたいなものが必要**ではないかという気はしますよね。あと当然、理科系分野も必要だと思うんですけど。

萱場：

私も大学に来てつくづく思いましたけど、自由人であるといいつつ、自分の人脈が国土交通省系で、大学来てもやっぱり縦割りじゃないかっていうのがあって。

プロジェクトの中で蔵治先生とかいろんな方と付き合うことによって、ようやく自分の横断方向の幅が広がっていく。流域圏大学って、**教員同士の連携だとか、同じ思いを持ってる人が気持ちだとか知識とか技術を共有する**っていうことでも、意味があるんだなと思いましたね。

それから、日々の暮らしや経済もとっても大事なんですけど、**産業界の人にどういうふうにコミットしていくかってすごく大事**だと思うんですよね。最近、愛知県でも雨庭に少し興味を持って頂いたり、グリーンインフラも、分かるとやっぱり興味を示してくれることがあるので、情報発信力がまだちょっと弱いのかな。あと、そこが自分の暮らしとどういうふうに結び付くかっていう考え方の整理だとか、**住民に分かりやすく伝える**みたいな、そういう取り組みもまだまだ足りてないなっていう感じがあるんですよね。

特に流域になると、上流で起こったことが下流にどういうふうに伝播していくかみたいなことは、とっても難しい問題じゃないですか。川の問題でも流量が増えるって一体なぜとか、雨が増えれば単に流量が増えるんですかとか、そういうこともちゃんと伝わっていない部分がある。だからやっぱりベースとなる部分は、**大学としていろんな方にちゃんと伝えていくという役割はある**のかなっていう気はしますよね。



●様々な人が集まり議論をする場

萱場：

あと、こないだのシンポジウムでも思いましたけど、皆さん、いろんないい質問をしてくれて、やっぱりそれぞれの分野で先生なんですよね。もの凄い技術だとか知識を持っていて、自分の身の回りのことはいろいろ考えられる。けれどそれを、ちょっと違う境界領域のことでやろうと思った時に、つなげる人がいない。あとつなげる時にどういう思想でつなげるかという、さっきの精神的支柱という部分にもつながるんですけど、そういう哲学がないと非常に場当たり的なことに終始してしまう。その辺は**ちゃんと理論付けて体系的に物事を見て人と人とをつなげていく、技術と技術を交流させる、それで何か融合して現場で実践していくということは、やっぱり大学の役割**だと思うんですよね。

皆さんそれぞれ技術を持っているので、そういうことを見極めながら、どうやって世の中を再構築していくかというあたりが流域圏大学の役割で。それは教員がイニシアチブを取るというわけじゃなくて、やっぱり**いろんな人に参加してもらって議論の中で生まれていく。そういう議論をする場というような役割**も当然あるだろうなっていう気はしますよね。

ないんですよ、意外と議論する場って。みんな忙しいじゃないですか。だから、定期的にでもいろいろ議論をしながらものを見いだしていく、そういう場をどういうふうにつくっていくかというところは一つ大事ですよね。それが拠点っていう一つの私のイメージ。

洲崎：

古代ギリシャのアゴラみたいな感じで、**いろんな立場の人がみんなフラットに意見を出し合って**。矢作川流域圏の山の関係者の中では、市民参加型の人工林調査、森の健康診断の実行委員会がそういう場だったと思います。その流れが流域圏懇談会の山部会の中に引き継がれていて、それを具現するのが流域圏大学になるかもしれません。

●次世代への継承

萱場：

あと、蔵治先生から話がありました**世代交代**問題があって、球磨川でもちょっと危惧している。今は島谷先生がリーダーシップを取ってやっていただいているんですけど、みんなだんだん年を取っていて、どこか

で世代交代をしないといけない。そうすると、やっぱり後進を指導教育して、新しいリーダーシップを取れる人をつくっていくことを継続的にやっていかなければならないですよね。母数が少ない団体だとなかなか難しいので、いろんな人が集まる場でそういう**リーダーシップを取ってくれるような方を見いだして育成していくことも大事**なのかなと思いますよね。

大学は学生が入ってきていろいろ教育はするんですけど、みんな卒業すると産業界に入っていって、全くコネクションがなくなるみたいなことが多いんですよね。だから、近藤さんのような方が県にずっといらっしゃって、就職後の職員の皆さんを教育していくほうが意外と効果は大きいかもしれないですね。

近藤：

それはそうです。今一番大事だなと思ってるのが、**記憶の継承**。30 年ぐらい前から多自然川づくりをやってきて、いろんなことをしたものが今残ってないんです。記憶の消失というか、経験の消失というか、人がいなくて。その記録は多分職員もいない行政だけでは無理なのかもしれない。うちらみたいな OB が手助けしないと無理かなと。30 年前の記憶は外に出ちゃっていて、マニュアルとかはあるにしても、精神的にそれぞれの川でどうやってきたかみたいな個別の話は残ってないということがこないだ分かりました。矢作川支流の籠川というところでエクスカーションをやった時に、県の建設事務所の人に「昔、県がこういうことをやったんだけど知ってる？」って言ったら、誰も知らないって。

●市民・地域でやれることを増やす

萱場：

やっぱり行政も放置しとくと、先祖返りじゃないんですけど、非常にシンプルな仕事に戻っていってしまう。複雑というか、多自然みたいに頭を使うような、そういう仕事から乖離していく感じはありますよね。そこを（市民や専門家が）側方支援とか、行政と連携しながらやっていくというところが大事ですね。昔だったらどっちかというと環境左派系の人が叱りながら行政が頑張るみたいな感じだったんですけど、今の世の中だったらもうちょっとインスパイアするとか、エンカレッジして一緒にやりましょうよという形で。

行政の方も単独で新しいことをやるのはすごく抵抗があるじゃないですか。失敗したらどうしようとか、やっぱりマニュアル通りやった方がいいっていう。なので、そういう**技術的な支援を行うっていうのも流域圏大学の一つの役割**なんじゃないですかね。

近藤：

すごく印象に残っている言葉があります。国交省に宮本博司さんという方がいて、開発課を辞めて淀川水系流域委員会の委員長になった人ですけど、球磨川かどこかに行った時に、「**流域治水は河川管理者にはできない、市民にしかできない**」と言いました。確かに「流域」って言ってるから河川管理の外だよね。それをやるのは市民だ、市民しかできないと断言されていて、これ、流域圏大学を進める時にすごく大事な話かなと。流域治水も難しい、伝わりづらい言葉じゃないですか。ましてや流域総合水管理って何という話をどうやって伝えるか。最初にお二人の言われた、伝えるっていうことがすごく大事だなと思うんですけど。

萱場：

市民が主役といいつつ、だけど、主役として演じる気持ちがあるか。この間（昨年度の市民講座）も地域の自治みたいな話が出たじゃないですか。昔、土木学会の 100 周年記念で市民普請大賞という、要は地域の公共インフラを自分たちで守る取り組みを顕彰しましょうっていう制度を作ってやってたんです。だけど、地域が自分のものだと思って取り組んでるグループって少数派ですよね。どっちかっていうと、行政が何かしてくれるだろうというふうに思うし。

だから、地域のコミュニティーのインフラを我々が担っていくんだっていう気持ちだとか、そうはいっても高齢化する、人口縮小する中でなかなか自分たちの手だけではインフラを維持できない。非常に問題が複雑化している中で、流域圏大学がどういう役割を担うかっていうことは、一気にはできないとしても、少し議論をしながら頭の整理はしていく必要があるのかなという。

近藤：

だから、市民普請大賞があった頃と比べても、実は今すごく大事になってきてると思ってて。多分大がかりな維持管理とかその辺を含めて、人口が減ってきて税金もなくなってくるとできないじゃないですか。それを**地域でやっていくということにシフト**していかないと結構しんどいなと。

洲崎：



昨年度の講座で蔵治さんに紹介してもらったこの本（『自分で地域で 手づくり防災術』）に、地域による防災力強化の好事例がいっぱい載っていました。ミライ会議で、江戸時代の農業技術や知識を記録した百姓伝記の現代版がつくれないかという話も出ました。**自分たちの手でやれることを増やすようなことも多分、流域圏大学のテーマ**になってくるかなと思います。

萱場：

あと、さっき蔵治先生がおっしゃったように、経済的にどう回していくかとか、あと法制度の問題ですよね。その辺にどう切り込んでいくかっていうこととも関連する。治水の自治権なんて今ないじゃないですか、河川法の世界でやっているわけなんで。だから、そういう法制度の問題なんて、やりたいけど、できないみたいなものとか、そういう部分も切り開いていくっていうところが大事かもしれないですね。

●若者が集う地域と消滅する地域

洲崎：

球磨川の「若者が集い幸せに暮らす地域」っていうキャッチフレーズについて、こないだ思ったことがありました。豊田市も若者に選ばれる地域づくりを目指すということをうたってるんですけども、そのフレーズを聞いた時にちょっと違和感があって。少子高齢化というのはすぐにはどうしようもならない全体的な趨勢で、東京ももうしばらくしたら人口減少に転じることは確実です。若者に選んでもらうっていうことは、限られたパイを奪い合うという話になるんじゃないかなと。

もちろん若者が住みやすくて、仕事ができて、結婚して子どもをつくって育てられる地域づくりは大事なんだけど、それと相反しない形で、高齢化しても、人口が減ってもみんなでできることをやって、幸せな地域を維持するっていうこともすごく大事なんじゃないかなと最近、思いました。



蔵治：

今存在している地域全てを維持しようってことはもう不可能ではあるので、やっぱりそこは暗黙の了解として、残る所は残り、残らない所は残らないっていうのは仕方がないことなんだろうと思うんですよね。ヨーロッパはとっくの昔に先行していて、そういう状況はもう 50 年前から始まっている。その中で残っている所は若者も残るし、周りから人もやって来る。その一方でもう人が住まなくなってしまった地域というのはたくさんある。これはある程度前提にせざるを得ない気はしますね。

だから、正直、流域圏大学にしても、要するに未来を見て今何を先駆けてやるかという話であって、そこで競争してるところはあると思うんですよね。そこでやっぱり全国津々浦々みんな同じことを考えていて、それぞれの方向性でやってるという段階なんだろうと思うんですよね。

矢作川流域は、東海豪雨があったから、こういう議

論がスタートしてるってところはあって、だからそういう洪水、災害っていうのは議論が盛り上がる一つの契機になるわけです。球磨川もそうです。でも、それがなければ、なかなか議論の取っかかりもない。一方で正直、矢作川流域って経済的にメインプレーヤーが豊か過ぎて、それによって思考停止に陥りやすいっていうところもあるんですよね。

これが球磨川流域だったら、それこそ何かやらなければまずいという切羽詰まった状態まで追い込まれるわけなので、そういうことが矢作川流域では今、全然感じられない。ある意味、メインストリームの人たちがエイエイオーってやってれば、お金が降ってくるっていう構造をすぐに変えるっていうのは無理なわけですよね。その中で、今たまたま余裕があるから、余裕の部分で先行投資的にやってる取り組みなのかなっていう気はしますよね。だから、切羽詰まってる場所の方が、もしかしたら真剣味という意味ではだいぶ違うかもしれないとは思います。

近藤：

だから、矢作川流域圏懇談会の中で、山部会が一番元気なんですね。

蔵治：

そうかもしれないですね。要するに流域の住民たちから見捨てられつつあるという思いがモチベーションになっているので、このままでは座して死を待つのみ、そうはさせない、という瀬戸際でやっていると思いますね。

近藤：

流域内の南北問題って結構あるじゃないですか。一つ思ってるのが、うちら、高度成長期を知ってる今の50代以上の世代って、多分なかなか過去の考え方から抜けられないんじゃないかなと。だから、人口が減ってるのに、いまだにまだ成長期の幻想で生きてる。もう一つ思ってるのは、さっき若者に選ばれるって話がありました。若者、今の大学生とかは過去の幻想がないんです、いい時代を知らないから。だから、奈佐の浜プロジェクトで何十年と学生と付き合ってて、彼らの方が僕たちの考え方が伝わりやすいんです。**これからこうだと、こういうことをしなきゃいけないっていう話が、大人と比べて今の若者の方がずっと伝わりやすい**。だから、10年以上前から**若者に選ばれる地域って、山村とかなんですよ**。つまり、**自分が生きがいを感じられるみたいなところに行く**。だから、流域圏大学という意味で若者には、私は実はすごい希望が持てるなと思ってて。



萱場：

右肩上がりのところって、いまだに無駄な投資をするっていうふうな話が多いですから。

近藤：

今の役所の幹部は幻想時代を抜けられない人たちなので、いまだにお金で国土強靭化をやってれば何とかなると思っている。それはもう破綻してるはずなんだけど。だから、それを変えていくという作業が、流域圏大学の話で、やっぱり**危機感を持った地域から伝えなきゃいけない**んじゃないかなと思ってるところがあって。

萱場：

さっき蔵治先生から話がありましたけど、欧州ではイタリアとか廃村がすごく増えてますよね。もう村ごと捨ててしまうというのがあって。

蔵治：



その一方で、世界中から人が集まってくる村みたいなのがいっぱいあるんですよね。今日、これを持ってきましたけど、イタリアの場合は「テリトーリオ」、フランスの場合は「テロワール」っていうんですけど、イタリアもフランスもほぼ同じ概念で、キャッチフレーズは「グローバル化に対抗し、地域の生産者たちの思いと活動を強化する」。要するに、美しく強靭な農村自給圏へ、みたいなことです。こういう研究っていうのは世界中で行われてるし、日本にも紹介されてるんですよ。『農村消滅論からの大転換』ですけど。だから、ある程度選択と集中が済んじゃってるっていうのがヨーロッパの状況ですよね。日本もその段階を通らざるを得ないのかもしれない。

●インフラのしまい方

蔵治：

あとはさっき近藤さんがおっしゃったように、要するに今、**インフラをむしろしまわなきゃいけない時代に入りつつある**。水ジャーナリストの橋本淳司さんが「**インフラじまい**」って言葉を言い始めました。「インフラじまい」にどこかでシフトしなきゃいけないんだけど、そのシフトに入る直前の段階でもがいている。どうやって「インフラじまい」していいのか分からない。

近藤：

びっくりしたのは、土木学会誌の先月号がインフラのしまい方みたいなテーマで。いや、土木学会がこういうことを言い出すんだと思って、だからそれは言わなきゃいけない時代になったっていうことで。多分東京が一番気付くのが遅いだろうと思うけど、もうちょっと早く矢作川が気付かなきゃいけない。

蔵治：

実は私、今月末に土木学会誌で対談をやってくれって言われて、それは森林について語ってくれってことだと思うんですけど、土木学会もそういうふうな視線は持ちつつあるんですよね。

萱場：

そういう流域治水に関係あるようなことは結構興味あるんだと思います。やっぱり**撤退の仕方みたいなところってすごく大事**じゃないですか。

僕、関市によく行くんですけど、津保川流域ってものすごく谷戸が多いんですよ。谷戸って生産性が低いので、ほとんど放棄されていて、地元の方は農地が森になるっておっしゃってて、ほとんどサクラバハンノキが迫ってきて、農地がなくなるんですよ。そういう所だけど、どう撤退させるか。それは別に放置するっていうことではなく、**多様性と、例えば流域治水の双方に寄与するような、いわゆる最低限の管理の仕方みたいなのって結構大事**なんですけど、そこって誰も研究してないので、地元任せになっちゃうんですよね。

なので、いろんな土地利用があると思うんですけど、人がいなくなった時に、国土全体で見たらどういう維持管理の仕方がベストなのかっていうあたりは、これからの非常に大事なテーマです。そういうところに**都市の人がうまくコミットして**国土を管理するとかっていうこともあるだろうし、そういうやり方も含めていろいろ議論していかないといけないなと思います。

さっきの繰り返しになっちゃうんですけど、こういうのを議論しようと思ってもあんまり議論する場がない。学会に行ってもやっぱりもうテーマは決まっているし、**フラットな形で自由に議論して、みんながいろんなことを持ち帰るところっていうのはほんとに少ない**なっていう気がしますよね。



●コンサル的役割を持つ

近藤：

だから、流域圏大学の一つのイメージとして私が持ってるのは、やっぱり矢作川流域圏懇談会なんですよ。なぜかというと、豊橋河川事務所が事務局をやってる流域圏懇談会が流域圏大学を運営することはないだろう。ただし、この流域圏懇談会という枠組みは誰でも参加できる。そこに来て誰でも課題を共有できて議論ができる、山部会が一番そうなんですけど。**実際に課題解決は流域圏懇談会でやるわけではなくて、そこに参加した人たちが自分たちでやる**ということをしてるわけです。

だから、河川管理者が事務局をやっている懇談会が、一つの核になることはないし、豊田市が持っている矢作川研究所が流域圏の研究所になることもない。そこは、具体的な形っていうのはなかなか難しいんですけど、さっき言ったように市民にしかできない。市民が中心で、ここ（流域圏担い手づくり事例集Ⅵ-1）にも書いてありますけど、市民が研究者を選ぶ時代だと。若者が地域を選ぶ時代っていうようなことをどうやって発信して伝えていくかということに尽きる。それの一番理想的な場所としては、今のところ、**懇談会のような場所を経由して、多分市民がつくっていくしかない**のかなというイメージを持っています。

蔵治さん、いかがです？

蔵治：

そうだと思いますね。大学っていうのはいろんな機能があって、講義もするけど、研究もするし、行政からいろいろ頼まれたりすることもあると思うんですけど、それゆえに大学が総合的な機能を発揮して、流域圏懇談会の運営とかも最終的には流域圏大学が担えばいいと思うんですよね。

流域圏大学には建設コンサルなどの民間企業も入っていただいて、そこのJV（共同企業体）をつくって担っていただければいい。これを行政から請け負うことがステータスとして評価されるのが、具体的な目標かなってイメージはありますね。

岡山の高梁川の流域大学は一般社団法人っていう形を取っていて、そこには民間企業とか地方銀行とかも出資されて設立されてるようでした。そういう**民間からの投資を受け入れる仕組みも備えて、それからシンクタンク機能も備えて、それこそ東京のコンサルと競争して勝ち取るみたいな、そういうイメージが持てればいい**と思うんですよね。だから、これからのコンサルというのも、地元にいかに根差しているか、地元にいかに貢献できるかっていう点で選ばれるみたいな世界ができればいいと思いますね。

近藤：

そう。だから、それが一番近いのかなと思ってて。蔵治さんに聞いたら、不知火海・流域圏学会も河川管理者がいないらしいじゃないですか。そこに一応、河川管理者も入って情報共有して、結局、そこで議論することとかやることっていうのは、実は事務局が決めてるわけじゃなくて、参加者が決めてる。そういうような形をしながら、これは非常にぼーっとした組織なので、もう少しできればいいなという。

蔵治：

そうなんですよね。だから矢作川に関していえば、**矢作川流域圏大学みたいな組織を立ち上げる機運は高まってきた**かもしれないので、それを法人化するなりして、社会的な信用を得て、行政から仕事も受託できるみたいな仕組みになってくるとだいぶ違ってくるとは思うんですよね。

例えばとよた森林学校の運営だって、全部お任せしてもいいぐらいの組織になるかもしれないですよね。でも、これはメインストリームにはなかなかすぐにはならないので、当面は傍流でありながら、細々としぶとくやっていくっていうことしかないことは確かなん

ですけど。

いずれ劇的な社会変革っていうのは必ずどこかで発生するでしょうから、あんまりハードランディングしても困りますけど、何らかのソフトランディングでシフトする時代に今備えておくってことだと思います。

●生きるという根源的な問いが流域に向かわせる

近藤：

懇談会が流域圏大学のベースになるなっていうのは、15 年やってきて今やっと思うところです。すったもんだいろいろあって、15 年やってきた中で、その可能性がすごく出てきた。簡単に、じゃそれでつくろうっていう話ではないんですけれども、こういう形の枠組みって実は全国でもあんまり見たことがなくて。だから、それに資するようないろんな動きを取材したいなと今回思っています。一番期待してるのは女子森ですけど。

蔵治：

あと、やっぱり都市生活者が大半になりつつある中で、**都市生活者は流域圏のそれぞれの現場に、生まれてから全く 1 回も足を踏み入れないまま大人になっていくという世の中なので、やはり現場体験を提供するっていうのは決定的に重要なんですよね。**

洲崎：

女子森を立ち上げた宇角佳笑さんは、元々、環境と平和のことを考えるラディカルな、豊田の街中のお母さんたちのグループをやっていて、その中で自分たちの食べるものぐらい自分たちで作りたいっていうことで、無肥料・無農薬の自然栽培のお米作りを学び始めた。それで、お米を育てる水を生む山というところから山に興味を持って、一昨年かな、「女子よ森へ行こうプロジェクト」を立ち上げて、6 回ぐらい、映画の上映会だとか、さっきの蔵治さんと渋澤さんの対談だとか、現場に入ったりとか、目覚ましい活躍をしている。

近藤：

都市のお母さん、女子がということは十分掘り下げたくて。なぜそれが必要だと思ったのか。しかも Facebook を見てると、最近、流域ということを言い出した。この女子たちが何をもって**流域が大事**って言い出したのか。

洲崎：

それは多分蔵治さんの影響なんだと思いますよ。

蔵治：

いや、彼女たちの方から流域についてしゃべってほしいと言われたので、彼女たちが初めから流域を考えてるんですけど、話してて思うのは、やっぱり**自分たちはなぜ生かされてるのかとか、そういう非常に根源的なところからくるわけです。**自分たちの体は何でできていて、その大半は水だよねみたいな発想から始まってて、その水がどこから来た水なのかってことを知ってますかみたいなところからきてる感じがある。自分たちはどこで生まれ、どこで生きて、どうやって死ぬのかみたいな、そういう生命の根源的な議論になるんですよね。

学生も含めて、若い世代ほど最近どんどんそういう方向性に敏感になってるという印象があって、それはヨーロッパの大学の先生と話してもそういう話になるので、若者の感性が全然違う方向に向かっている。どれだけ立派なインフラがあるとか、どれだけ利便性が高い、経済的に合理的な社会があるかってこととは全然違うベクトルで生きてる人たちが増えている。そういうところを反映してると思うんですよね。生きてるというのは、そもそも何なのかみたいな。

近藤：

そこなんですよ。今回の取材先にもなっている**未来創造プログラム**は、地域の未来志援センターの支援で奈佐の浜プロジェクトの学生たちがやってる企画なんですけど、元々は海のことをやっていた。でも流域を知らなきゃいけないということで、学生たちを森に連れていきたい。そのための取っかかりとして、矢作川流域圏懇談会に学生たちが来るようになって、そこでいろんなネットワークを使って、根羽とか足助とか旭とか天龍村で合宿をするようになった。

だから、若い子たちの感性の方が実は鋭くて、そこに懇談会っていう場が一つの役に立つ。多分事務局側

はそんなこと何も考えてないでしょうけど、そういう使い方ができるんですよ、それはみんなが考えればいい話なんで。だから、こういう場が**誰でも参加できるっていう入り口を持っていること、そこに 400 人だかの人がいてネットワークがあるっていうこと自体はとても素晴らしい**。流域委員会とか流域治水の協議会と違って、限られた人じゃなくて誰でも参加できる。これが一番大きい。

萱場：

根源的に物事を考えようとしてる人って、やっぱり一定数いますよね。**そういう人を掘り起こすっていうのは、非常に大事な流域圏大学の役割**かなって思うんですよね。あんまりそういう情報に触れてなくて、まだ気付きに至ってない人ってたくさんいると思うんですけど。

洲崎：

渋澤さんが言っておられましたが、昔はパイロットになりたいとか、学者になりたいっていうのが将来の夢だったけど、今はどういう人でいたい、家族と幸せに生きたいとか、地域の人とつながって楽しくやりたいとか、人の希望がDoからBeになっているっていう、そういう時代に移行しつつあると。



●技術の後ろにある理念が大事

萱場：

だけど、近藤さんがまだお元気でこうやっていろいろと引っ張ってってくださっているからいいですけど、あと 10 年後を想像した時にどうなるかというのは心配ではありますよね。

近藤：

いや、いつまでも自分がやっちゃいけないなというのがあって、あと 7 年で、若い子を含めて新しい体制にして、私は完全に支援に回るっていうことにしなきゃいけないなと思ってます。

洲崎：

組織がなくなるというのは、それはそれで意味があるんじゃないかなと思うんです。これ、たまたまなんですけども、バイオフィット研究会という、豊田で近自然工法をずっと伝えてきたグループがあって、私が会長をやってたんだけれど、(矢作川研究所を) 退職することになり、どうしますかって言ったら、前会長がもうなくしますと。バイオフィット研が立ち上がった頃には、まだ近自然工法、多自然型川づくりが広がり始めた頃で、全然環境問題っていう認識もなかったんだけども、一応、それが世界的に、ちゃんと正しい形で伝わってるか分からないけれど、広まってきた。一種の時代的な役割を終えたんじゃないかという話だったんです。

近藤：

福留脩文さんがつくった会です。

洲崎：

そうそう。バイオフィット研は高知で福留さんがつくられて、それの豊田支部だったんです。

組織というのは、それ自体が目的なんじゃなくて、その流域でみんなが楽しく生きるための手段の一つであるので、それを支えるものは変わってってもいいのかなと思うんですよね。カリスマ的な人がいなくなれば、やっぱりそこは 1 回少ししゅんとするけれども、必要であれば、またそれを伝える人、教える人とか組織が出てくるのかなっていうのは最近思いますね。

とよた森林学校は、元々は豊田市役所の森林課が主宰していたのが、今、森林課、森林組合、市民が実行委員会形式で運営するようになった。こないだ初めて忘年会をやったんですけど、その時に女子森の宇角さんが、土木を学べる場所が欲しい、森林学校でそんな講座がつくれないかと言ってたんです。**どこかがなく**

なれば、やっぱりそれをしたい、知りたいっていう人が新しい仕組みをつくるってことにもなるのかな。

近藤：

バイオフィット研がなくなるっていう話は面白いなと思ってて。福留さんは違うんだけど、その流れをくんでやってきた人は、近自然工法の工法技術にどちらかというと特化していた。本当はそれだけじゃ駄目。福留さんが元々言ってたのは、昨年度の公開講座で萱場さんも言ってたと思いますけど、要は流域の維持管理として、いわゆる市民普請じゃないですけど、そういうシステムとして多自然川づくりがあるんじゃないかということ。そういったところで準備をしていく。だから、いわゆるまちづくりの中の河川改修の一つとして多自然川づくりを位置付ければ、市民が自分たちでできる。これは 30 年前の近自然から入った人には無理です。

洲崎：

どっちかっていうと職人技でしたね。素人はすっこんでろという雰囲気があったと思います。本当はやっぱり**みんながができるという思想と理念、やり方を共有できる近自然工法が、これから人が減っても活用できる技術になるのかな**。さっきおっしゃったみたいに、**技術の後ろにある理念だとか、そういうものがこれからますます必要**ですよね。

萱場：

そういったところを議論し、共有するという役割はすごく大きいですよね。



●共有した価値を基盤として

蔵治：

さっき萱場先生がおっしゃっていた哲学はどういう形で生まれてくるんですか。議論の中から哲学をつくり上げるみたいな。

萱場：

哲学とか議論と、あとやっぱりエビデンスがなければいけない。

机上の空論だけ言っていても、結局、誰も付いてこなくなるし、あとは行政からも無視されるわけじゃないですか。また夢物語を言ってるなという話になるので。だから、哲学っていうのはやっぱり国土をどういう形にしていくかっていうことなんだけど、それを考える上では技術も必要だし、あと技術のベースになってる部分っていうのが、例えば河川でいったら、上流下流問題をどう解決するかとか、そういう非常に根源的な、技術とはちょっと違うようなレベルの価値観をどうみんなで共有して国土をつくるかっていう部分もあるわけですよね。

なので、そこの二つがやっぱりうまくかみ合うように議論を進めていかないと、バランスの悪い考え方だとか、現場への支障が出てきてしまうので、そこは深く議論するということは大事だし、そこは学識者っていうか、大学がリーダーシップを取れるところなのかなと思うんですよね。

蔵治：

そこを分けて考えるっていうか、やっぱり価値の話とエビデンスの話っていうのは一応、別ではあるわけですよね。

萱場：

別ではあるんだけど、**その価値を実現するためにはやっぱり事実がないといけないわけで、だからそこは行ったり来たりしながら**っていうことだと思うんですよね。100 年後にはできるかもしれないけど、現況ではできないと。じゃあ、そこに近づくためにどんな技術を我々は担うべきなのかとか、あとはそれをどう組み合わせていくのかとか、どんな人と一緒に仕事を

していくかみたいなことを考えながら、やっぱりスパイラル的に物事が実現していく。遠い将来は一つ理想として持つべきとしても、5年後、10年後どういうふうにしていくかっていうことは、もう少し現実味のある話をしていかないといけない。

そこは私も一技術者としてやっぱり責任を持った議論をしたいと思うので、大事にしたいところだなと思うし、流域圏大学でもそういったことはちゃんとしたベースにして議論をしていく、実践していくというところが大事かなと思うんですね。

蔵治：

でも、やっぱりまず先に価値が定まらないと、どういう技術が必要なのかって議論になかなか踏み出しにくいところもありますよね。価値っていうのはなかなかサイエンスではないので、**価値の共有みたいなことが議論の到達点**っていうんですかね。**例えば、流域圏大学のビジョンみたいなものを作るみたいなイメージですか。**

萱場：

そうですね。

蔵治：

それは、かなり遠い未来、俯瞰したような未来というのを議論していくと。

萱場：

矢作川流域圏で我々がどういう生き方をほんとにしたいのかっていうことがまずある。それを実現するためには国土だけではなく、いろんな要素がある。それを支える上での土地利用の在り方だとか、我々の住まい方だとか、インフラの整備の仕方だとか撤退の仕方だとか、そういったことをより具体化して、**みんなで議論しながら少しずつ実現していく**っていうことじゃないかなと思います。

●「成長」から「撤退」へ価値観の転換を

近藤：

僕は個人的には未来はすごく明るいと思ってて。なぜかというと、今って明治維新以来の大転換期なのではないかと。要は、今まではお金もあるし、力業が何でもできたので、例えば治水の問題にしてもお金をかければというところでやってきたけど、多分それはもう成り立たない。そうなった時に、どういうインフラのつくり方と維持の仕方みたいなやつが将来的にできるんだと。それって悪い話、無機質な話じゃなくて、私らが有機的にやらなきゃいけない話。そこが私は哲学的な意味では、「新しい日本の夜明けぜよ」みたいな感じに近いような気がする。

萱場：

そうですね。さっき近藤さんがおっしゃったように、今 50～60 代の人はバブル期を経験していて、右肩上がりの世界をずっと見てきてる人たちじゃないですか。また昨日の交歓会の話に戻っちゃうんですけど、例えば愛知県の生産力が昔は何十兆だったのが1.5倍になりましたみたいな話をされていて。やっぱり産業界は経済成長っていうことが価値観としてすごく大事じゃないですか。そういう人たちとうまく連携しながら、さっきの川仕舞いとか地域仕舞いみたいな話をどう折り合いをつけていくかっていうことが非常に大きな課題ですよね。

価値観の転換っていう意味でいいんで、いわゆる**産業界も巻き込んでどういう国土をつくっていくかみたいなところって結構難しい議論です。今までは賛成か、反対かみたいな二項対立の議論になりがちだったんだけど、うまく流域圏大学が主導しながら、徐々にいろんな領域にこういう考え方を浸透させていくみたいなことがとっても大事**です。じゃないとまた右肩上がりですよ。

近藤：

ちょっとびっくりしたのが、こないだ、2030年までの新しい愛知県の計画を紹介してもらったんですけど、一応人口減少って書いてあるけど、いや、いつまでもお金が続くわけないじゃんとか思って。やっぱり幻想ですよね。**特に行政が幻想から抜けられない**、何だかんだ理由付けて。でも、ほとんど借金だからあり得ないよね、これから。

そういった意味では、企業の方がまだ…。今、奈佐の浜でごみの関係で化学系の企業とコラボしてるんですけど、企業の方々が、自分たちが生き残るためにプラスチックをどうしたらいいかみたいなことを一緒に話している。だからやっぱり企業の方がまだ危機感はあって。

萱場：

やっぱり「成長」っていうのが政治的アピールになっちゃってるので、**撤退とか、うまく撤退するみたいなことが政治的アピールになるような、選挙権を持ってる人たちがそういう思想に少し転換していくみたいなことって大事**ですよね。

近藤：

だから、成長の意味をほんとに考えなきゃいけないなと思ってて。

萱場：

持続可能かどうかっていうところがやっぱり大事じゃないですか。持続可能な中でどう成長していくかっていうところですよね。そこを**我々市民がやっぱりちゃんと理解して**、例えば行政でも政治でもいいんですけど、何か発言があったり、政策が出てきたりした時に、それを我々がどういうふうに判断するかっていう、非常に**高度な判断力**を我々がどう持っていくかっていうところだなと。

洲崎：

リテラシーを育てるみたいな部分が。

萱場：

そうですね。そこもとっても大事ですよね。だけど、岐阜県とか行くと地元の方は、撤退するしか手がないんじゃないかっていうことは何となく分かってらっしゃる方が多いんですよね。このままだったらもうどうにもならないと。

近藤：

だから、**価値観を変えて、撤退が生き残るため、豊かに生きるためにいいことだ**というふうにしていかないと。

萱場：

そこを包み隠さずみんなで議論できればいいんですけど、公の場ではなかなかまだ言いにくい。やっぱり予算がどれだけ付いたかとか、どれだけ生産力が上がったかっていうことが非常に大きな価値観として捉えられる発言をされているので、もうちょっとかもしれないですね。



●境界を突破して連携する

近藤：

多分もう変わんなきゃ。明治 29 年、30 年に治水三法ができて、私はあれが分業化の始まりだと思ってるけど、そこからどんどん分業化、縦割りになって。ほんとは森林法も砂防法も何が違うんだというようなとこですけど、そこからどんどん分かれていくと何が起こるかというと、縄張り争いと予算取りが起こると。その文化から脱却しないといけないと思うんですけど。

蔵治：

これからは連続性っていうことだと思うんですよね。**いろんなものに対して境界をつくってきた歴史というのがあって、その境界のこちら側とあちら側で勝手にやるみたいな、コミュニケーションを断絶させてきてる**わけだから、その境界をいかに溶かすか。でもそれがすごくみんな苦手なんですよね。その境界の内部だけで個別最適化しちゃってるから。

だから、**流域総合水管理っていうのは、まさに境界を溶かせるかっていうチャレンジを提案してる**わけ

だけど。

萱場：
　みんな放っておくと、必ず自分の居場所のいい位置に戻っていく気はしますよね。

蔵治：
　大学なんかもそういうところだとは思うんだけど。

洲崎：
　事例集の取材で名大の山崎真理子先生が、研究者はみんな大学でたこつぼに入っていて、隣の研究室の先生が何やってるかも知らないっておっしゃってました。

萱場：
　その通りですね。多分**境界を突破していろいろ連携するって力が要る**じゃないですか。頭使うし、面倒くさいし、そういうところをエンカレッジしたりとか、無理に引っ張り出してくれるような人がいたりだとか、力があったりするっていうのはとっても大事ですよね。

蔵治：
　だから、JST（科学技術振興機構）もそういうことは分かってて、ああいうプロジェクトにファンディングするわけですよね。

萱場：
　そうですよね。あれ、放っておいたら、たこつぼ的な研究しかしなくなるんで、やっぱりそういう境界を突破するところに資金配分してくれたりだとか、あとそういうようなことを積極的に引っ張ってくれるような人を育てるっていうのはとっても大事ですよね。
　やっぱり横断方向にものを見るって大変じゃないですか。知らない分野の人とやりとりするって、ある時は「そんなこともおまえ知らないのか」と、ばかにされたりとか。

●長い時間スケールで考える

蔵治：
　あと境界っていうのは、空間的じゃなくて、**時間的な境界**っていうのも多分あって、**非常に短期的な時間軸でしか見てない**っていうことでやってると思うんですけど、**実は過去に何千年も歴史があって、未来にも何千年も先の時間があるという全体の時間軸で見なきゃいけないっていうところができてない**わけですよね、全ての計画が 5 年とか 10 年とかっていう話になっちゃってて。
　だから、河川整備計画も 30 年でここまでやりますっていう話で、いや、それはそんな短時間でしか設定しないんだったら、右肩上がりの計画になっちゃうでしょっていう。**本来の計画っていうのは、やっぱりもっともっと長い時間スケールを考えるのが基本**だと思いますけど。

近藤：
　退職してから気付いたんですけども、私が関わってきた**土木、河川も含めたあらゆる計画って、前提として人口増加しか想定してない**じゃんと。維持管理も含めて。だから、ダムの話にしても、フルプランもずっと需要増。あれは違うって分かった瞬間、何なんだと思ったのが最初ですよね。そこからそれを真摯に受け止めて、違う未来を見ましょうよというのが、これからの時代。これはショックで、自己否定ですよ。自分が 38 年、県職員でやってきたことをある意味、全て自己否定してるような。でも、自己否定したら楽になりましたね。

洲崎：
　でも、やっぱり行政でも民間でもトップにいる人は、まだその世代の幻想から抜け切れていないので。

近藤：
　あれは構造が良くないんですよ。大体トップの意思決定を持つ人は、退職まで数年ぐらいの人しかいなくて、あと数年考えればいいだけの人ばっかりなんで、長期的に考えないじゃないですか。



萱場：

そういえば、島谷先生と一緒に土木研究所にいた頃に多自然川づくりの取材やってたんですよ。『フロント』っていう雑誌あったじゃないですか。毎月1回、取材しに行って記事にしてたんですけど。

それを見た新聞記者の方だったか現場を見たいと。場所を教えて、行ってもらったんですよ。そしたら、見つからなかったって言うんですよね。それはそうですよね、多自然なんで。自然に近い状態なんで。

蔵治：

そうか、そうか。見つからないことほど美しいっていう話だ。

萱場：

そう。行ったんですけど、どこか分かりませんでしたと。だから、それがいい仕事なんだけど、そういう認識になっていないところが、やっぱりまだ境界が溶けていないっていうところなのかなっていう気がしますよね。

言葉では自然との調和とか、持続可能とかっていう話になるんですけど、じゃあそれを具体的な形にしようと思った時にどんなものになるかとか、そういうことも**まだちゃんと共有されていない**感じがありますよね。

●若者が目指す生き方

近藤：

多分持続可能なことを考えた時に、今言われ出してる**ウェルビーイングってすごく大事**だなと思ってて。個人個人がいろんな意味で幸せに生きるっていうのがウェルビーイングじゃないですか。それ、若い子はすんなりいくんですよ。昔はウェルビーイングではなくて、とりあえずどんどん偉くなってお金を稼いで。

洲崎：

いい学校を出て、いい会社に入って。

蔵治：

そうですよ。今の若者は、ブラック企業なんて絶対選ばないわけですから。行政なんてブラック企業の最たるものだという評価をされてるわけで。

近藤：

ウェルビーイングって、残業しないとか、そんなもんじゃなくて、今自分が生き生きとしてモチベーションを持って働けるか、健康でいられるかみたいなことを全てひっくるめて、そこに価値がある。実は今までの人たちってそこに価値を置いてないわけじゃないですか、どちらかというと。

蔵治：

東大の学生と話すと、彼らはどういう質問してくるかっていうと、「この世の中はどうすれば変わりますか、革命以外の手段はありますか」って聞かれるんですよ。「革命やるぐらいの手段が必要だね」って、私が答えると、「そうですか、分かりました、じゃあ生き方、考えます」みたいな、そういう会話してますから。大学1年生とですよ。

近藤：

だから、最近の学生ってやっぱり経済的にはいい思いをしてないからなのか、すごく分かりがいいですよ。

蔵治：

今度、学生が主催する大きなイベントで、私、登壇してくれって言われたんですけど、そのテーマが**アナログ**なんですよね。そのアナログとは何かって定義もちゃんと書いてあって。それは、さっき話しましたけど、**連続性**だっていうんですよね。**分断から連続に転**

換することがアナログなんだという問題設定なんですよ。学生ってそういう発想でイベントを計画したりしてるので。

萱場：
いいですね。名工大とは違うな。うちの学生はもっと現実的。

蔵治：
だから、私はアナログについて語らなきゃいけなくなった。**デジタルが良いという価値観とは全く違うベクトルが、世の中にちゃんとあるんですよね。**

近藤：
基本的にウェルビーイングをベースとした価値観を見つけた上で、それを達成するのに IT が必要なら使うという、私なんかは思うんだけど、IT で別に幸せが得られるわけではないんで。

●小さな議論の積み重ねが大事

洲崎：
前の事例集の取材の時でも、日本人はどうすればできるかっていう技術の方にばっかりいきがちなんだけれど、なぜそれが必要か、なぜ流域材を使うことが大事なのか、それを使って楽しいとか幸せになることがわからないと人は動かない。だから、そういう研究が必要なんだという話がありました。

近藤：
学生は真面目ですよ。根羽村に合宿に行った時に自分たちでテーマ決めろって言ったら、なぜ流域産材を使うことがいいことなのかだけを議論したいと言う。意外とシンプルな問題、問いかけって難しいじゃないですか。

洲崎：
議論の場についてなんですが、昔、豊田で名大の高野雅夫先生が千年ゼミっていう会をやっていたんです。月に 1 回、公民館みたいなところに集まって、大体 20～30 人来るんですけども、5 つか、6 つその場でテーマを挙げて、みんなで分かれてそれを議論する。2 時間ぐらい話してその結果を紙に書き出して、順番に発表するというだけの会でした。幾つか決まりがあって、**結論を導かないこと、誰の言うことも否定しないこと、みんなでそうやって語り合うだけの会**だったんですけども、それがとてもいい会だったんですよね。

萱場：
国の政策でもそうなんですけど、10 年に一度ぐらいしか出てこないのって、弾切れっていうかね、現場がすぐ忘れちゃうんですよね。だから、高頻度で会を開催したりとか、議論したりとか、打ち出していくっていうのはとっても大事ですよね。

洲崎：
あんまり多いと多分息切れしてしまうので、その辺の兼ね合いも難しいですよね。

近藤：
だけど、この十数年、懇談会に出た経験ってめちゃくちゃ私にとっては大きくて、特に山部会がほとんどなんですけど、そこで議論した話が川の話じゃないじゃないですか。だけど、流域を考える時に、いや、随分変わりましたね。ああいうような情報提供っていうか、**情報共有みたいなのってやっぱり必要なんじゃないかな、定期的に。**

洲崎：
山部会の夜の会が、そういう自由に話し合う会の最たるものかなと思って。

近藤：
いや、だから、昼も夜も含めて、ウェルビーイングでは私は最高ですよね。

萱場：
結論出そうとか思うと大変なので、小さい議論を積み重ねていくって大事ですよね。シンポジウムみたいに大仕掛けでやるのは大変じゃないですか。もっとこぢんまりとやれる範囲内で、高頻度でやっていくって

いうことの方がいいんじゃないかなと。

近藤：
　シンポジウムって、その場限りになっちゃうじゃないですか。そうじゃなくて、さっき言ったように**ずっと続けていくことが大事**。



●水循環の議論へ

近藤：
　今回の取材先で矢作川研究所があるんですけど、矢作川研究所は、洲崎さんも辞めるし、多分所長の宮田昌和さんもいなくなるんですね。
　矢作川の中には実をいうと大学がないんです。全然ないわけじゃないけど、懇談会に来てくれるような先生がいるわけでもないし、そういった中で研究的な意味合いでいうと、矢作川研究所が重要な役割を 30 年果たしてきた。特に合併して以降、すごく意義は大きいんだけど、30 年で役割終わったのかなとかいろいろ思ったり。

蔵治：
　洲崎さんがいてくださったから、流域にそれを拡張できてた部分はあると思うんだけど、それが継承されなくなると、川の研究所だから、河川区域だけしかやらない研究所になってしまうと残念だなと思いますね。流域治水の時代なんだから、矢作川流域研究所って名前にしてもらえれば、ありがたいですけど。

近藤：
　ただ、洲崎さんは辞めて岐阜に引っ込むらしいんですけど、そこでは流域研究所を立ち上げてほしいなと思ってて。懇談会もそうじゃないですか。基本的には事務局、事務局補佐がいて、参加者がいるけど、やっぱり動かしてるのは参加者。だから、研究所に対してものが言える NPO 研究所として、洲崎さんに頑張っていただければいいんじゃないかと。

蔵治：
　そうですね。だから、矢作川研究所が流域のことをやる際には、洲崎さんの会社と契約して外注する仕組みになればいい。でも、そうはいっても、市役所はやっぱり行政なので、行政は既存の枠組みにどうしても縛られる。

近藤：
　30 年間関わってきましたけど、研究所は、最初は第三セクターだったのが豊田市営になって、その後、外部の評価は高いんですよ。市の評価の低さは、うまく生かそうという気がないというか…じゃない？

洲崎：
　そうですね。発信はそれなりにはしてるんだけど、全然変わらないまま 31 年間過ぎた感じがあります。

萱場：
　やっぱりマネジメントをするのが、結構難しいかなっていう感じは受けますよね。所長も森林から海まで全部知ってるかっていったら、そこも分からないし、これからの世の中、矢作川流域をどういうふうな絵姿にしていくかっていうブループリントがどれほど議論されてるかっていうのが分かんないし、そういう中でほんとに研究所をマネージするって大変ですよね、個性豊かな研究員ばかりで。

近藤：
　だから、宮田さんがかなりリードして。なぜかというと、つくった当初から議論があった。なんで矢作川の管理者でもない豊田市が、こんな研究所をつくらなければいけないのかと言われ続けて 30 年。

萱場：
　でも、30 年も経つと、やっぱり 1 回衣替えしてもい

いかもしれないですよね。

近藤：

恥ずかしいと思ったんですよ。ほんとは矢作川を管理している愛知県がこれを持つべきだろうなと。

蔵治：

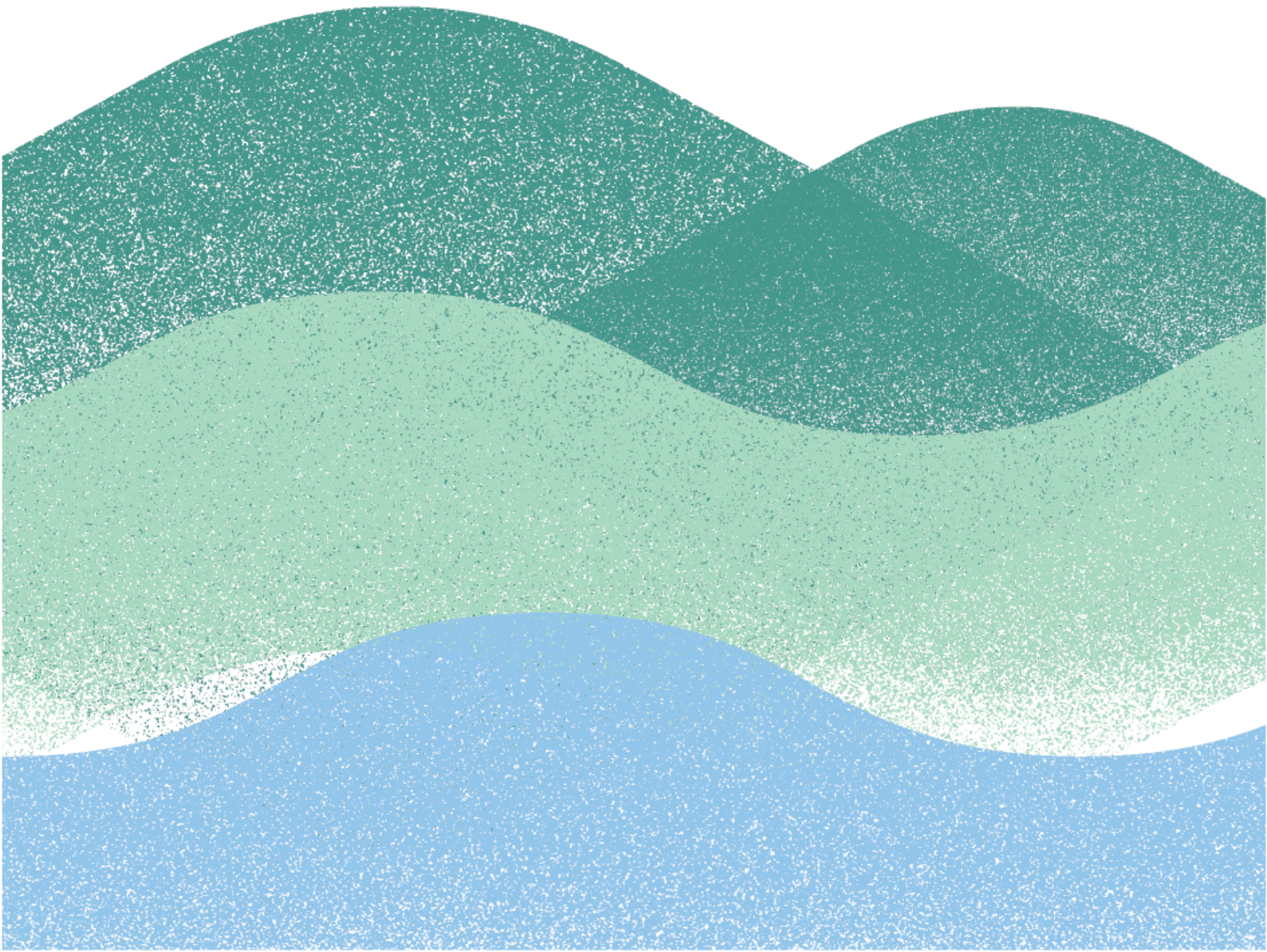
それと同様に、この矢作川流域圏懇談会の事務局をやっている豊橋河川、中部地整が、やっぱり国からきちんと評価されることが必要と思うんですよね。私は内閣官房の水循環政策本部事務局がやっている水循環アドバイザーもしてますけど、**次のステップとしては矢作川流域水循環計画**なんですよね。

流域総合水管理も基本的には水循環基本法に基づく基本計画で提案された概念なので、流域圏懇談会のスピンオフ、副産物として、**山、川、海のつながりっていうのはまさに水循環そのものなんで、どうやって水循環の議論とこれを接続させていくかっていうところも必要なこと**かなと思いますね。

洲崎：

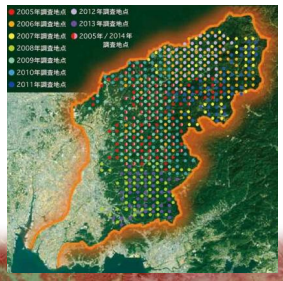
すごくいいキーワードが、また今日もたくさん出てきたと思います。今回の事例集に非常に役に立つお話をどうもありがとうございました。

第１章
川・海から繋ぐ





藤前干潟（57P）



豊田市矢作川研究所（23P）





鈴鹿川（54P）
魚と子どものネットワーク



乙川　One River with（40P）







鳥羽市答志島 奈佐の浜海岸（122P）





2024.1月24日 中部のいい川ワークショップ in 矢作川流域圏（94P）
この場には、魚と子どものネットワーク・新玉拓也さん、One River 岩ケ谷充さん、CWP 瀬川貴之さん、豊田市矢作川研究所（宮田所長、洲崎燈子さん）、未来創造プログラム（三ツ松さん、「海」「森」学生チーム）、矢作川流域圏懇談会（青木伸一・海部会座長始め）、萱場祐一さんなどが集結し、関東から多摩川流域懇談会のみなさんも駆けつけてくれた（会場；豊田市能楽堂）

豊田市矢作川研究所　　宮田昌和所長　洲崎燈子さん　吉橋久美子さん







豊田市矢作川研究所が設立されたのは1994年7月のこと。様々な研究やプロジェクトなど展開し、既に30年の成果と歴史を刻んだところである。私（近藤）は、設立時にたまたま県豊田土木事務所に赴任し、産声を上げるところに立ち会った。河川管理者でもない豊田市が、このような研究所を立ち上げたことについては「素晴らしい！」という賞賛と共に、（矢作川管理者でもあった私は）県がこのような組織を持っておらず「恥ずかしい」というか、嫉妬のような感情も持っていた。以降30年以上に渡って、研究所のあゆみを見守りつつ、あるいはその成果・人的ネットワークを活用させていただきながら、（甚だ勝手ながら）共に歩んだつもりである。

豊田市・矢作川漁業協同組合・枝下用水土地改良区３者による第三セクターとしてスタートした矢作川研究所は、2003年度に豊田市営体制に移行し、現在に至る。30周年に当たる2024年には、第26回「日本水大賞」環境大臣賞も受賞された。これからは、**矢作川「流域圏」研究所**なるものへ昇華出来たらという大いなる妄想も抱きつつ、研究所の方々のお話を伺うこととした。



2024.6/18 第26回 「日本水大賞」表彰式会場にて　筆者と洲崎さん

話をしてくれた方：豊田市矢作川研究所 宮田昌和所長、
洲崎燈子 主任研究員、吉橋久美子 研究員

宮田昌和さん；豊田市に土木系技術者として入庁、建設省の外郭団体である財団法人リバーフロント整備センターへの出向を経て、研究所へは1996年に着任、以降2013年度からは研究所長を務め、2014.3月末まで連続18年に渡って勤務した。2022年市役所定年退職するも、同時に研究所所長再登板（再任用）を果し現在に至る（通算23年目）。

洲崎燈子さん；東京生まれながら、1998年より矢作川研究所で最初の常勤研究員（豊田市正規職員）として赴任。専門は森林・植物。矢作川と人の魅力にとりつかれて現在まで至るも、2026年3月をもって惜しまれつつも離職する（通算28年間）。「矢作川森の健康診断」では大きな役割を果す。（詳細は懇談会10年誌「キーパーソン」59頁を参照）

吉橋久美子さん；福岡生れながら、2015年より研究所へ赴任（2023.4月～2024.8月は離職）。研究所の大きな特徴として自然科学だけでなく社会学研究者を採用しているポリシーがある。彼女は設立時からのその流れを汲み、特にみんなでつくる「ふるさとの川づくり」事業（小さな自然再生事業）での大きな役割を果している。

取材日　：　2026年3月17日
取材場所：　豊田市矢作川研究所（豊田市西町）
取材者　：　近藤 朗、松沢孝晋、
（名古屋大学学生）水谷圭
レポート執筆者：近藤 朗

2026.3/17 矢作川研究所取材風景　右側奥から宮田所長、洲崎、吉橋さん





← 豊田市矢作川研究所のホームページは貴重なアーカイブ宝庫である　検索してみよう

矢作川研究所の原点

「月刊 矢作川」の存在
～ なぜ矢作川研究所は設立されたか ～

矢作川の河川管理者でもない豊田市が、なぜ「矢作川研究所」を設立しようと思ったのか。また市と共に犬猿の（水を取り合う）仲でもある、矢作川漁業協同組合と枝下用水土地改良区がこれに加わったのかは、長らく不思議でもあった。「流域は一つ 運命共同体」と謳う**矢作川沿岸水質保全対策協議会**（**矢水協**）の存在もよく言われるが、そこからの流れだけでは、どうにも説明がつかない。

宮田所長からは、「**月刊 矢作川**」の存在を指摘された。名前だけ聞いたことがあったが、私は読んだことはない。これは1977年4月に創刊され、1985年7月の100号を最後に休刊、研究所では全て所蔵しているという。発刊メンバーには、**新見幾男**氏、枝下用水土地改良区の三浦孝司氏など研究所創設にも関わった方もおり ①流域の生活と文化の歴史を発掘し、紹介する ②流域の自然を守る ③矢作川水系の諸河川にかつての清流を取り戻す ④川を汚さず自然を破壊しない生活のあり方を考える 以上を目標に創刊する、とある。発刊関係者は毎月集まり議論を重ね、流域圏の首長などへのインタビューなども掲載されていた。
そう言えば、かつては矢作川研究所の（社会学）研究員であり（2008.4月～2013.3月／「枝下用水120年誌」担当）、その後**豊田土地改良区**で「**枝下用水史**」を発刊した**逵志保**さんは、事例集取材において、「月刊 矢作川」は矢作川流域圏の貴重なデータベースであり、この第101号を発刊したいと語っていたのが強く印象に残っている。

現在は研究所のアドバイザーに名を連ねる関西学院大学の古川彰氏（環境社会学）は、設立当時の研究所に深く関わっており（2000年度まで中京大学など愛知県在勤）、矢作川流域圏での活動史については、様々な論文・報文で記述している。大きく分けて3つの流れがあり、①1970年～矢水協の時代 ②1970年代半ば以降「月刊 矢作川」グループ（矢作川漁協など）による環境保全運動の時代、そして ③1990～近自然工法での河川再生・矢作川研究所誕生へと連なるという。そうか、これで腑に落ちる。私には②の認識が抜けていた。ちなみに古川さんは社会学者として、**矢作川100年誌資料研究**及び「**環境漁協宣言**」、**枝下用水史**等、研究所プロジェクトの大きな推進役を担った。

豊田市矢作川研究所ホームページより【写真集】
● 矢作川右岸「波岩」付近の今昔 昭和50年代→平成27年



雑魚釣りで賑わう昭和50年代の矢作川波岩付近

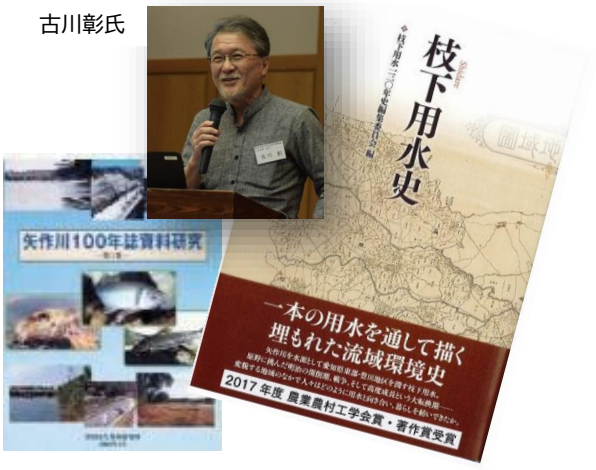


現在の同地点付近（2015年6月23日）



2018事例集・流域圏Ⅱ「豊田土地改良区資料室」
逵志保さん、（取材者）近藤文雄、安井雅彦、（撮影）清水雅子

古川彰氏



さて「月刊　矢作川」に豊田市役所職員は、直接関わっていない。市がどのように結びついていったのかと言えば、やはり1991年2月に豊田市が「**矢作川環境整備計画**」**検討委員会**を設立（1990年4月には市では珍しい「河川課」も設置）、その一連の流れの中で、9月に近自然工法の実情を学ぶため、ドイツ、スイスなどへと欧州視察をしたことが大きい。豊田市・木戸規詞氏、矢作川漁協・新見幾男氏、土地改良区・三浦氏らを始めとする一行に愛知県３名も加えさせていただいた。指南役として同行したのは、日本に近自然工法を導入した西日本科学技術研究所の福留脩文代表（現地通訳；山脇正俊氏）であり、それらメンバーが切磋琢磨しながら、豊田市内あるいは愛知県内で近自然工事（建設省の提唱する多自然型川づくり）を推進する原動力となったのは間違いない。帰国後豊田市が手掛けたのが加納川であり、愛知県（豊田土木事務所）は直ちに矢作川「古鼡」にて、水制工群設置工事に着手した。

新見幾男著
「ヨーロッパ 近自然紀行」より



早春の古鼡水辺公園



公園の管理作業を終え，一息つく人々



新見幾男氏

この記録については、矢作漁協・新見幾男氏が主宰する「矢作新報」に連載され、後に「ヨーロッパ近自然紀行」として発刊される（1994.10月）。豊田市では元々「(仮称)水と緑の科学館」という矢作川博物館構想を持っていたらしいが、紀行ではスイスにてイン川博物館を視察している。「一つの川に一つの博物館を」という提唱が、いつの間にか「一つの川に一つの研究所」に転じたようだ。そして豊田市・矢作川漁協・枝下用水土地改良区による第３セクター方式の「**豊田市矢作川研究所**」が1994年7月に誕生した。私が愛知県豊田土木事務所に赴任したのがまさにこの年であり、1995年3月には河川管理者でもない豊田市策定の「矢作川環境整備計画」が公表される。

現在の矢作川水制工群
～古鼡から百々貯木場まで延伸される～





1994年度というのは豊田市にとって象徴的な年であり、同年4月より水道使用量1tにつき、1円を充当する「**豊田市水道水源保全基金**」も創設され、2000年からはこの基金による間伐事業も始まった。そういった流れの中に放り込まれた私は、カルチャーショックどころではない「矢作川インパクト」の中で、新たな河川管理者としての覚醒を余儀なくされる。仕方ないだろう。

1990年頃の豊田市の動き、新しい流れは、当時の関係者ならだれでも知っている。今さら書くことでもないだろうと言われるかもしれないが、30年以上も経つと、どのセクターでも人が随分と入れ替わり、多くの人が去り行き、組織内の記憶も薄らいでいくことを知っている。研究所の方々の話を聞きながら、改めて書き記しておかなければと感じた。

矢作川研究所のあゆみⅠ

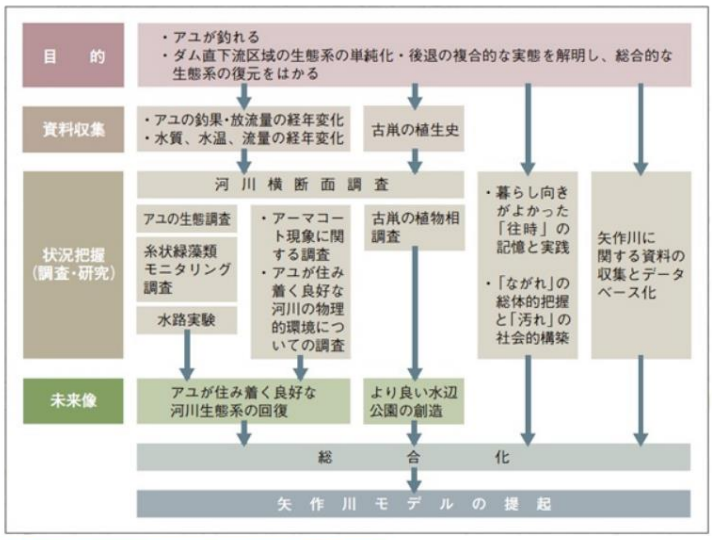
1994.7月設立－2003年頃
～ 礎は第３セクター時代で築かれた ～

豊田市、漁協、土地改良区、それら熱き人たちの思いの下に誕生した「**豊田市矢作川研究所**」は、矢継ぎ早に次々と様々な取組みを展開していった。研究所に常勤研究員を置いたのは実は1998年度からであるが（田中蕃主任研究員、洲崎燈子、白金晶子研究員）、その前から非常勤の田中蕃氏を主体に共同研究者と中心市街地川辺林調査、矢作川での砂利投入実験（県豊田土木事務所共同）、天然アユ調査会も開始され、1996.3月には第１回目の研究所シンポジウムを開催、1997.3月より年報「矢作川研究」を発刊し現在まで続いている。広報誌「Rio」は1998.5月からの発刊だが、当初は何と月刊であった。


田中蕃氏

矢作川研究所の強みは、常勤研究者以外にも共同研究者という形で、他大学や在野の研究者、市民活動家などとも強力なネットワークを構築していったことにあろう。とりわけ中京大学（後に関西学院大学）の古川彰氏の存在は大きく、環境社会学という視点で「**古牧プロジェクト**」や「**矢作川100年誌資料研究**」などのプロジェクトを進められた意義は大きい。

古牧プロジェクトの概要図（研究所HPより）





「豊田市矢作川研究所」のあゆみ
＊研究所の研究成果などについて、ここで細かく内容に触れない詳しくは、研究所季刊誌「Rio」No.232（2024.夏号）、「矢作川研究」No.30（2026.1月）シンポジウム記録、及び豊田市矢作川研究所ホームページ 研究・調査 などを参照

時代 Year	矢作川研究所のあゆみ、概要など
1969 ～1980年代	1969 **矢作川沿岸水質保全対策協議会** 活動開始 1970 矢作ダム建設 1972 **昭和47年災害** 1977～1985「**月刊矢作川**」100号まで発刊
1991 ～1995	豊田市矢作川環境整備計画策定／検討会設置 1991.9月 欧州近自然視察へ 1995.3月 **豊田市矢作川環境整備計画**策定・公表
1994.7月 ～2003	第3セクター方式による**豊田市矢作川研究所設立** 1995～2000 中心市街地川辺林・底生動物調査 1995～1999 県豊田土木と共に**砂利投入実験** 1996～ **矢作川天然アユ調査会** 開始 1996～ 「**矢作川研究所シンポジウム**」開始 1997～ 年報「**矢作川研究**」発刊 1998 **研究員常勤体制に移行** ／ 田中蕃（主任）、洲崎燈子、白金晶子 1998～ 月報「**Rio**」発刊 1999～ ホームページ開設される 1999～2002 矢作川水源林調査 1999～2002 「**古牧プロジェクト**」展開 2000.9月 **東海豪雨による甚大な被害** 2000～ 河口域でのアユ調査（～2013） 2001～ **矢作川「川会議」**開催（～2015） 2001.7月 第４回**「川の日」ワークショップにてグランプリ受賞**、2002年 韓国へ招待 2001～ 東海豪雨後の長引く濁水対策として、**愛知県３部局（建設・水産・環境）と漁協による協議体制**を設置する 2002～「矢作川学校」開始する 2002～2006 矢作川データベース構築 2002「**矢作川100年誌資料研究**」発刊 2002 豊田市と矢作川漁協は「**川のある市民生活回復のための覚書**」をかわす 2002「東海豪雨」（記録誌）発刊 2003 「**環境漁協宣言**」発刊
2003 ～2015	2003 **研究所が豊田市営体制に移行** 2004～ カワヒバリガイ始めとする**外来種研究・対策事業**を展開、他にカワシオグサ、オオカナダモ、アメリカナマズなど 2005.3月～9月 「**愛知万博**」(愛・地球博）開催 2005 **豊田市 平成の大合併** 2005.7月 第８回**「川の日」ワークショップ矢作川大会**の開催／現地実行委員会運営 2005「**矢作川森の健康診断**」開始（～2014） 2006～2009 **矢作川河畔林調査**事業 2007「天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム」開催（矢作漁協へ協力） 2008～2015「**枝下用水120年誌**」編集作業 2011「120年誌資料その１」発行 2013「120年誌資料その２」発行 2010～（国）**矢作川流域圏懇談会** 設立（8月）と懇談会への研究所参画 2010「**生物多様性条約第10回締約国会議**」（CBD/COP10）名古屋でブース展示、シンポ 2013～2016 明治用水頭首工前後水質 生物調査 2015「**枝下用水史**」発行（編集委員会編）
2015 ～2026	2015 豊田市気温測定調査 2015～「**ふるさとの川づくり事業**」展開する 2015～ 岩本川　2020～ 広沢川 2024～ 一の瀬川 2016 (市)「**矢作川河川環境活性化プラン**」策定 2016～2018「アカミミガメ防除プロジェクト」 2017～2020 矢作川大規模野外実験／阿摺ダム 2018～ 水源の人工林調査 2019～「元気回復プロジェクト」展開 2019～ 水辺愛護会「管理・活動計画」作成 2020「アカミミガメ防除マニュアル」発行 2021「川辺づくりガイドブック 草地編」発行 2022「川辺づくりガイドブック 竹林編」発行 2024 第26回「**日本水大賞**」**環境大臣賞** 受賞

この「矢作川100年誌資料研究」は、研究所データ構築に裏付けられた矢作川漁協の「**環境漁協宣言**（2003年）」へと繋がっていく。これは画期的なことではないか。

「月刊 矢作川」が、ある意味1972年の「**昭和47災害**」による河川ダメージを受けた環境回復の流れだったのだとすれば、2000.9月の「**東海豪雨**」は更に大きなインパクトを矢作川に与えることとなった。当時県河川課（河川環境担当）にいた私は、環境漁協宣言を出そうとしていた矢作川漁協と真正面から向き合うこととなる。豪雨後、長期にわたって濁水が流れる矢作川を「何とかせい！責任を果せ」と迫られる。しかも責任を果たすべきは、河川管理者だけではない。水産部局、環境部局もあわせて統合的な河川環境管理を進めるべきだと主張する。これは研究データベースに基づく極めて理にかなった要求でもあり、私は愛知県３部局が同じ土俵に上がり、関係者と共に協議、対策を進めていく場、体制づくりに奔走した。漁協とは対峙するという形での調整ではあったものの、お互い「目的は同じなのだ」という認識の下、決して嫌な作業ではなかったと記憶している。なお、漁協は豊田市とも「**川のある市民生活回復のための覚書**」を2002年に交わし、行政への覚悟を具体的に求める。漁業補償を一切求めず、河川環境復元を最大の目的として、自ら行動すると共に行政などに対しても妥協を許さないという、これが「**環境漁協宣言**」であろうか。表には出てこないものの、そのバックボーンとして矢作川研究所が蓄積してきた研究やデータベースがあることは間違いない。すなわち、極めてパブリック（公的）な運動体となっていることに気づく。

この時漁協と向き合った（対峙した）経験は、私にとってとても大きな意味を持つ。矢作川と同じく東海豪雨対応で藤前干潟横を流れる新川を大規模改修するにあたって、豪雨の１年前まで「ごみ処分場建設による干潟埋立」反対運動を展開されていた「**藤前干潟を守る会**」など野鳥の会の方々（本事例集37頁参照）と協議しながら、保全対策を進めたこと（2000-2005年度「干潟調査会」モニタリング会議による工事影響の監視）。その後、2005年愛知万博・瀬戸会場をあの「**海上の森**」隣接部で開発・造成するにあたって、万博反対運動を展開されていた方々と真摯に向き合うことが出来た（公共建築課　2003-2004年）こと。これらは、矢作川で学んだことの延長線上でもある。

2000.9月 東海豪雨後の矢作川惨状（愛知県HPより）
愛知県砂防ボランティア協会から愛知県に提供された



矢作川水系上村川（岐阜県上矢作町）

流木で覆われた矢作ダム



宮田所長いわく、「矢作川研究所最初の10年間で相当の事をやれたと思う」とのこと。全く同感だが、いや、まだまだそれだけじゃいかんやろう。お互いに。

矢作川研究所のあゆみⅡ

2003－2015年頃 豊田市営時代へ
～ 市民を研究所の応援団に ～

豊田市・漁協・土地改良区による第３セクター方式というのは、外部から見ていて有効に機能していたように見える。とりわけ役所内部の理論のみにとらわれず、閉鎖的な組織にもならず、適度な緊張感が前向きな方向に向かっていた様に思う。ところが2003年度よりこの体制が崩れ、研究所は単純な「**豊田市営**」へと移行する。理由は派遣法による制約によるものらしいのだが、うまく機能していたのだから何とかならなかったのだろうかと部外者の私ではあるが、少々無念な気持ちであった。

ただし全く関係が切れたわけではないので、どのような運営体制で進めていくのか、が問われよう。正にこの年に「環境漁協宣言」が発せられる。

宮田さんは常々「研究所の応援団を作らなければ」と仰っていた。東海豪雨後の2001年5月、関係団体と共に「**矢作川宣言**」を謳い、同時に**矢作川「川会議」**を始めたのもその一環であろう。毎年5月の第2土曜日を「矢作川の日」と定め、流域市民活動の展開を進める象徴とし、特に「**森・川・海一体の流域保全活動と研究の推進**」「**人と自然との共生のあり方**」調査・研究など研究所のスタンスを強く示すものでもあった。この中では、**矢作川流域ネットワークの構築**も目指しており、既に「第3セクター解消前」時点で、矢作川研究所の方向性、連携の姿勢などについては確立されていたと言える。

この当時河川課にいた私は、研究所の応援団となるべく、矢作川「川会議」主要メンバーを東京へと引連れ、第4回全国「川の日」ワークショップ（2001年7月）に参加する。東海豪雨の大きな被害によって、「治水偏重の時代に戻ってはいけない」という思いもあり、矢作川研究所や「川会議」のような取組みを全国にアピールしたかったのである。このワークショップ（WS）がどのようなものかも知らず、何と川会議メンバーとも初対面であ

2001.5月 東海豪雨の翌年、第1回矢作川「川会議」を開催



2001.7月 第4回「川の日」WSで矢作川「川会議」がGP受賞



2002.10月 第1回 韓国「川の大会」に矢作川が招待される



2002.3月 いい川づくり研究会が矢作川へ





2003.5月 第3回「川会議」全国水環境交流会 山道省三中京女子大学 谷岡郁子学長そして「愛知・川の会」が合流このメンバーたちが、「川の日」WS2005矢作川大会の現地実行委員会を構成していく



← 吉橋さんが手に持っているのが、「川の日」WSグランプリの表彰盾（2019.10月撮影）

ったが、われらがチームはグランプリを受賞してしまう。矢作川研究所の名前も全国に知れわたった。さらに翌2002年に私たちは韓国へ、同国初開催される「川の大会」に招待されることに。調子に乗った私と宮田さんは、訪韓団事務局の「全国水環境交流会」山道省三氏に、全国「川の日」WSは毎回東京で実施しているようだが、たまには地方で開催しないか？と豊田市・矢作川での大会を招致してしまうのである。「検討してみます」と言われたが、結果として、2005年7月に第8回ワークショップ・矢作川大会を開催するに至った。

開催までの道のりは、言葉では中々表現することが難しいが、現地での実行委員会を宮田さんを始め、矢作川関係の方々と構成するにあたって、私の方では2003年3月に「**愛知・川の会**」を創設し、全県体制で臨むこととした。決してそのためだけに組織した訳ではないが、私がちょうど河川課を離れるタイミングにあたり、良い機会でもあった。矢作川「川会議」は、2002年の第２回目で「矢作川学校」開校を宣言した。2003年の第３回川会議では、わが愛知・川の会が全面参加、県内の市民団体が集い、またWS事務局を担う「**全国水環境交流会**」の山道省三氏と2005年愛知万博検討会議の議長を担っていた中京女子大学の谷岡郁子学長を巻込み、プレワークショップのようなスタイルを試みる。結果としてこの時の参加メンバーが現地実行委員会の主体ともなった。この時谷岡氏は仲間と共に庄内川で「**エコストック on 水辺**」という市民イベントも展開しており、この取組みは2003年の第６回「川の日」WSで何と、彼らもグランプリを受賞するという快挙をなす。

2005年7月の本大会は、豊田市の能楽堂・コンサートホールも舞台とし、分科会も一部は古鳥水辺公園や児ノ口公園など野外で、交流懇親会は矢作川の川原で行うなど前例のない形に、3日目にはいくつかのエクスカーションも実施した。まあ、とんでもない大会をしたもんだと今でもしみじみ思う。

なお、特筆すべきは、この大会に森の研究者グループとして、「**矢作川 森の健康診断**」がエントリーしており、2005年より始まったプロジェクト。これに矢作川研究所も大きく関わっており、次のステージに向けての希望を感じさせてくれた。

2005.7月 第8回「川の日」ワークショップ矢作川大会を開催





第８回「川の日」ワークショップ矢作川現地委員会

今井 忠良	梅村 錞二	小野 吉朗	河合 良三	倉地 格	小林 禎司	近藤 朗	澤井 延禎
杉浦 静穂	高木 優	柘植 孝之	新見 幾男	硲 さくら	水野 修	南 重則	村山 秀夫
本守 眞人	安田 明弘	渡邉 省吾					
活動部会	石原 紀彦	伊藤 昌明	今枝 久	岩尾 憲治	近藤 朗	玉置 芳幸	中条 義氏
中田 良政	永井 公広	永谷 永一	成瀬 順次	新見 克也	間野 隆裕	三宅 則克	村山 隆之
事務局	宮田 昌和	鷲野 正国	髙橋 聡				

• 協力団体：○ 矢作川「川会議」実行委員会（矢作川を茂で下る会・矢作川漁業協同組合・矢作川天然アユ調査会・古鳥水辺公園愛護会・波岩水辺公園愛護会・石倉水辺公園愛護会・アド清流愛護会・梅坪水辺愛護会・御船せせらぎ広場愛護会・西広瀬町矢作川水辺愛護会・百々水辺愛護会・児ノ口公園管理協会・愛知県豊田加茂建設事務所建設第二課・豊田市役所河川課・豊田市矢作川研究所）
○ 愛知・川の会　○ 名古屋市水辺研究会　○ 矢作川水源の森・森のプレゼント事業実行委員会
○ 木づかい市民ネット

2005.6月 第1回「森の健康診断」を開催





2006.4月「森の健康診断」発刊
著者；蔵治光一郎、洲崎燈子、丹羽健司【編】

さて、一連の流れを終えて、この時点で私と宮田さんは心の底から喜んでいたのであるが、一方で研究所研究職の方々が、このような場、あるいは業務を通して、どのように市民協働を進めていくのか、そしてそのことが研究者としてしっかり評価されていく必要性も痛切に感じた。だが、この心配は杞憂だったのかもしれない。研究所は市民参加型の「森の健康診断」に関わることで、ある意味その方向性をきっちりと示していったのである。

～ 流域圏全体に目を向ける「森の健康診断」～

2005年4月、豊田市は「平成の大合併」を行い、面積は約3倍の918㎢に、人口は約2割ほど増えて40万人都市となった。矢作川の県内上流域をほぼ編入するという、このタイミングで「**矢作川森の健康診断**」が始まったというのは大きな意味があったのかもしれない。多くの市民を巻き込んで「森の現状を知る」という試みは、当初の予定通り2014年まで10年間続けられた。





矢作川研究所の洲崎燈子さんは、森の研究者グループとして、東京大学の蔵治光一郎教授などと共にこれに参加、学術的な立場での役割を担ったのである。

実は、私が抱いていた洲崎さんへの印象は、2005年のこの頃から随分と変ってきた。それまでの（美人ではあるけれども）何か「研究者然」とした冷たいイメージから、明らかに柔らかくなり、市民寄りへと近づいていくのである。恐らく、研究者が市民と共に活動する意義はとても大きいのだろう。行政も然りかな。



矢作川研究所自体も、この上流森林域含む大合併を踏まえて、2006年度より新たに「**矢作川 上中流河畔林調査事業**」に着手した。研究所の調査自体は、2009年度まで続けられ膨大なデータベースが構築されたのであるが、これを受けて豊田市河川課は2007年に「矢作川河畔林整備基本計画」策定、これに基づいたアクションを起こす。

新市域となった上流、旭・足助・小原・藤岡4地区を対象とした住民ワークショップを展開し、この内7つの自治区で「**河畔林整備行動計画**」が策定される。この7地区で2008年より2012年度まで順次整備が進められ、自治区住民自体もこの河畔林管理に関わっていくのである。結果として新たに5つの「**河畔林愛護会**」が発足した。この流れは、1990年代に近自然河川整備が進められると同時に、「**河川愛護会**」が設立されたのと同様なプロセスにも見えるが、「森の健康診断」が広がっていくと共に、単に河川沿いだけではなく矢作川流域全体での連携が進むということになろう。

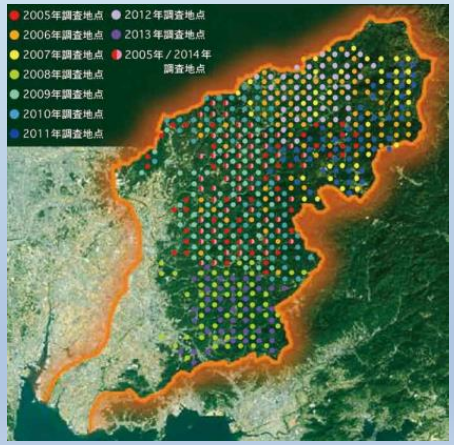


折しも、矢作川の河川管理者である国土交通省(豊橋河川事務所)は、2010年8月に「**矢作川流域圏懇談会**」を設立し、豊田市及び矢作川研究所もこれに参画していく。

矢作川研究所アーカイブ Ⅱ（関連事業分も含む）

矢作川森の健康診断

矢作川森の健康診断 2005～2014年
／ **矢作川水系森林ボランティア協議会(矢森協)**
研究所「森の研究者グループ」として協力・参加
2004.1月 **矢森協**設立（2013事例集 山村Ⅰ）
2006.2月 矢作川研究所シンポジウム
「**矢作川流域の人工林を考える**」開催
2007 矢作川研究No.11 シンポジウム記録掲載
2008 矢作川研究 No.12「**矢作川流域の人工林の健康状態～2005-2007森の健診結果**」
2009.11月 Rio No.136 「**5年間の森健診から**」
2016.2月「**森の健康診断の10年**」実行委 発刊



河川管理と市民
「水辺愛護会」

1995～2000 矢作川都市ブロック水辺林調査
2001.5月 **矢作川宣言**と矢作川「**川会議**」開始
～2015.5月まで15回開催し終了する
／設立時構成団体は11、内「**水辺愛護会**」7団体
＊2026.4月時点で豊田市「水辺愛護会」26団体 へ（河畔林愛護会を含む）

2003.2月 第8回 矢作川研究所シンポジウム
「**流域住民でつくる水源の森**」／ 丹羽健司ら
2004 矢作川研究 No.8 シンポジウム記録掲載

2005.4月1日の豊田市「**平成の大合併**」踏まえ
2006～2009（新市域）**矢作川上中流河畔林調査**

2006～
矢作川上中流域河畔林調査、及び整備事業

2006.2月 シンポジウム「**矢作川流域の人工林**」
／ 蔵治光一郎教授、原田裕保ら
2006.5月 Rio No.96「**矢作川の河畔林**」間野、洲崎
2007 矢作川研究 No.11 新見幾男（連載）
河畔林の「**維持管理区間**」と「**放置管理区間**」

2007 豊田市「**矢作川河畔林整備基本計画**」策定
2007.9月～ 旭・足助・小原・藤岡の4地区で
ワークショップを開催、この地区7自治会にて
「**河畔林整備行動計画**」策定、2008.3月に発表会
2008～2012年度 豊田市による**河畔林整備**順次実施、
自治会住民による自主的な伐採なども展開される
／ 河畔林整備により「**水辺愛護会**」も発足 (以下)
(2008) **小渡セイゴ**、矢作川自治区**水辺愛護会**
(2009) 縄文の里・水辺公園(下川口)愛護会
(2011) **有間竹林**（笹戸）**愛護会**
(2014) 大河原水辺愛護会
＊2016.3月 5自治区・団体による活動発表会 開催
● 上流域水辺愛護会ニュースレター発刊
2007.10月 「**かわせみ**」1号～2017.7月 13号
＊2023.3月 **水辺愛護会・河畔林愛護会交流会** 開催

2008.3月 Rio No.117、2009.3月 Rio No.128
「**河畔林整備基礎調査**」報告／ 間野、洲崎ら
2009 矢作川研究 No.13（間野隆裕、洲崎燈子ら）
「**矢作川上中流域の河畔林**」特集（調査報告）
／ 矢作川上流域の河畔林整備に関する提案
2010～2012 矢作川研究 No.14～16
「**矢作川上中流域の河畔林**」調査報告（続報）

記録・計画

「**東海豪雨** 2000年9月11～12日
矢作川流域 記憶と記録」2002.6月発刊
2010.8月「矢作川流域圏懇談会」設立、研究所参画
「**豊田気温測定調査 2015報告書**」2016.3月
豊田気温測定調査2015実行委員会 発行
「**豊田市矢作川河川環境活性化プラン**」2016.6月

～ 流域環境の担い手としての枝下用水 ～

実は、上中流域での河畔林整備に向けたプロジェクトが始まった2007年に、私はこの1年間のみ豊田加茂建設事務所に出戻っている。ほぼ10年ぶりだろうか。何という巡り合わせか、赴任直後の5月に研究所の礎を築いたとも言える田中蕃さんが逝去されるという訃報が届く。自然科学分野の研究者でありながら、社会学者、哲学者的な広い視点で矢作川流域、あるいは研究所を見ておられた。その年12月には研究所幹事も務められていた今井勝美さん（枝下用水土地改良区）も逝去され、一つの時代の区切りを感じると共に、自分たちの継承者としての立場、役割を痛感することとなる。



さて、研究所に2008年度より（社会学）逵志保研究員が就任し、矢作川漁協100年史資料作成に続く、「枝下用水史」研究に取り組むこととなった。本稿冒頭で述べた様に、彼女は5年間（～2013.3月）勤務を終えた後、今もこの研究を続けており、2015年には「**枝下用水史**」を発刊、さらに「月刊矢作川」101号出版への夢を持ち続けているのだろう。

彼女の地元への聞き取り調査は、矢作川河畔林整備基礎調査の一環としても行われており、自然環境の変化と共に起こる「人々の暮らしの変化」を探るもの。かつての用水の歴史はまさしく、人々が必然的に川と関わらざるを得なかった時代のものであり、それが失われた現代への問いかけから、「流域と関わる私たちの未来のあり方」を改めて提言することになろうか。「枝下用水史」を編むにあたっては、「枝下用水を矢作川流域環境の担い手として捉えなおそう」という編集方針を立てたという（逵志保 2015.1月 Rio No.192参照）。用水と生きた人々の声を聞くというのは、そういうことだ。



また、都市の中の自然林という点では、矢作川沿いとともに、枝下用水沿いの緑地が「まちの中の自然」を支えている（洲崎燈子 2006.3月 Rio No.94）という指摘もあり、そういった観点でも今一度考えてみよう。

これら全てを含めて、矢作川研究所のアーカイブは「宝の山」であり、ある意味私たち全ての市民にとっても大事な共有財産ではないだろうか。市民から寄贈された過去の貴重な写真なども数多く保有されており、その価値を見直してみたい。

矢作川研究所アーカイブ Ⅱ

枝下用水 120年誌 資料集 その１、その２



「**矢作川資料研究 第2集**」2011.3月発刊
「**矢作川資料研究 第3集**」2013.3月発刊
／（編集）古川彰、**逵志保**、他

2008.4月 Rio No.118 「枝下用水／明治用水」
2009.9月 Rio No.134 「枝下用水120年」
2009.10月 第1回 **枝下用水史研究会** 開始
～「**枝下用水日記－120年誌－**」随時発行へ
2011.3月 **枝下用水120年誌資料集その１** 発刊
2011.8月 Rio No.155「三浦孝司さんに聞く」

2012 矢作川研究No.16「**枝下用水と西澤真蔵**」
2012.4月 Rio No.162「枝下用水　点の記」
2013.3月 Rio No.172「枝下用水を生きる」
2013 矢作川研究No.17「**枝下用水史**」特集
2013.3月 **枝下用水120年誌資料集その2** 発刊

●「**枝下用水史**」130年誌編集委員会編
2015.4月発刊

矢作川資料 ・写真データ



2000.3月 第5回矢作川研究所シンポジウム
「森・川・海の営み」哲学者 **内山節**
2001.2月 第6回矢作川研究所シンポジウム
「川は誰のものか？」京都精華大 **嘉田由紀子**教授

2001.4月～2004.3月（社会学）**小川都**研究員就任
2001.秋 中日写真協会（岡崎）**鶴田国次**氏より
約350点の写真提供 ／ 2001.11月 Rio No.43

2001.11月～2002.1月「**矢作川を語る座談会**」
全5回 愛知県豊田土木事務所
過去の在籍者による
／ 2002.6月 Rio No.50
板沢幸夫寄稿





2003.3月 矢作川研究 No.7
「**古川プロジェクト**」特集
―**矢作川と人の暮らし**― ／古川彰、川田牧人、芝村龍太、小川都「**川辺の暮らしと環境利用**」「**写真で見る川辺の変化**」

2003.3月 Rio No.59 ～ 2003.10月 No.66
「**矢作川今むかし**」連載／ 研究所 小川都研究員
2003.4～5月 研究所企画「**川と暮らしの記録展**」
2003.11月 Rio No.67　50数年前の矢作川
「**抹茶の飲めた川**」倉知格（郷土資料館写真）



2004.2月 第9回矢作川研究所シンポジウム
「**矢作川のむかし・いま・そしてこれから**」
「**古川プロジェクト**」報告／**辻本哲郎、古川彰、嘉田由紀子**教授、小川都ら
2004.3月 Rio No.71「**昔の川辺とその使われ方**」
2004.3月 矢作川研究 No.8「**古川の今昔**」
－矢作川の将来像を考えるために－
小川都「**矢作川データベース資料報告**」
矢作川データベース ／
●矢作川資料（写真含む）データベースDB
●矢作川文献DB　●矢作川新聞DB



写真家 **久米守**氏

2014.9月～ **久米守**氏（岡崎市在住）より**写真寄贈**
／1959年(移住)以降撮り続けた矢作川流域写真
約5,000枚を寄贈【研究所所蔵・データ化】
2015.2月 Rio No.193「**矢作川を撮り続けた50年**」









洗濯、川原、野焼き、水車

矢作川研究所
のあゆみⅢ

2015－2025年
より良い矢作川の創造を目指して
～ 河床環境改善実験と外来種対策 ～

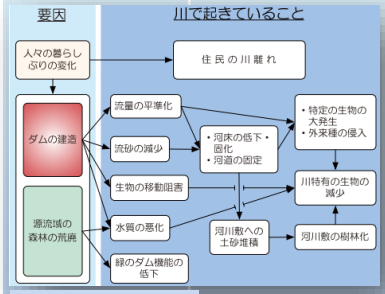
2015年頃より、研究所は第3ステージへと進んでいくこととなる。まずは1990年代、研究所創設時からの大きな課題として矢作川河床のアーマーコート（固定）化が、現在も続いていることを踏まえ、新たな河床環境回復の試みと、固定化などを起因とするカワシオグサ繁茂や外来種対策を中心に展開された。カワシオグサ調査は第1ステージから、次々に出現する外来種対策については、2007年以降の第2ステージから数多く展開してきており（右表参照）、第3ステージがそれらの集大成ともなる。具体的には、カワヒバリガイ、アメリカナマズ、オオカナダモ、陸上植物のアレチウリなどであるが、2016年からは「**アカミミガメ駆除プロジェクト**」が始まり、ドローンなど最新機器も駆使して、マニュアル（2020年）が策定された。

外来種駆除などを進めるとともに、本来河川が有していたはずの自然（空間・流れ）環境機能を復元することが重要であろう。1990年代、愛知県が矢作川古川水制工群を設置したのも河川の「流れ」ダイナミズムを復元しようとしたもので、2期工事にあたっては矢作川を締切り、河床を耕運、すなわち重機で川底を引っ掻き回したのだ。工事後一時的にはアユが良く釣れるようになったとの報告もあるが、河川全体での環境改善には遠い。そこで当時、県は矢作川研究所と共同で砂利投入実験（1995－1999）も行ったが、効果の解明には至っていない。今回2017年から研究所が行った「**矢作川河床環境改善実験**」は、阿摺ダム直下（通称ソジバ)において、矢作ダム湖内の堆積砂礫を投入、時には大きな石を点在させるなどして効果を見守ったもの。結果については、「矢作川大規模野外実験」（2021.3月発刊）にまとめられている。長期的な視点、あるいは（天然アユに限らず）矢作川全体での環境回復に向けては、やはりまだまだ課題は多い。矢作川のダイナミズムそのものを求めるのであれば、河床などの空間は元より、洪水など流況のあり方にも目を向けなければならないというのは、1990年代頃から誰もが気がついていた。ただし、河川管理者に向けての発信意義もあり、チャレンジは続けられるべきだ。

矢作川研究所アーカイブ Ⅲ（関連事業分も含む）

砂利投入実験
及び
河床環境改善実験

矢作川砂利投入実験・調査 1995～1999
／愛知県豊田土木事務所との共同プロジェクト
1997～2000 矢作川研究 No.1～4
2015.10月 Rio No.197 「アユが釣れる河床、釣れない河床」高橋勇夫
「矢作川の豊かな流れを取り戻すために」白金晶子
／ お助け、フラッシュ放流



矢作川が抱える問題

矢作川河床環境改善実験・調査 2017～2020
／阿摺ダム下流（ソジバ）にて試行展開
2018.1月 Rio No.206にて「中間報告」
2021 矢作川研究No.25「実験結果と効果のまとめ」

●「**矢作川大規模野外実験**」（実行委員会編）
～ **ダム下流における河床環境の回復と天然アユの復活をめざした記録集** ～ 2021.3月発刊

河床藻類調査
及び
外来種等対策プロジェクト

カワシオグサ調査・研究 1994～1999
豊田土木事務所（建設１課）調査委託 1994～1995
研究所調査 1997～2000 矢作川研究No.1～4
カワヒバリガイ（2004確認）**調査・研究** 2007～2009～2012 矢作川研究No.13～16
アレチウリ駆除対策プロジェクト 2007～
県豊田加茂建設調査・対策検討業務 2007～2009
逢妻女川での試み
●「**アレチウリ駆除マニュアル**」 2009 愛知県策定


カワヒバリガイ


オオキンケイギク

愛知県豊田加茂建設事務所実施
逢妻女川での試み
（近藤・西村薫）



アメリカナマズ調査 ／**矢作川水族館**調査 2007～
2008.5月 Rio No.119 にて報告（新見克也）
2013.11月 Rio No.180「行動と生態」



オオカナダモ

オオカナダモ駆除プロジェクト
／矢作漁協、矢作川森林塾、矢作川研究所 2010～
「矢作川オオカナダモ駆除対策検討会」発足 2010
2010.12月～ Rio No.148、No.165、No.174
2016 矢作川研究No.20「駆除対策検討会の記録」
2016.4月 Rio No.199 新しい繁茂地
2020.7月 Rio No.216 今までのモニタリング結果



2011.2月 研究所シンポ「**矢作川の外来生物**」開催
／ カワヒバリガイ、オオカナダモ、
アメリカナマズ、アレチウリ　研究No.16掲載
2012.4月「**愛知県移入種対策ハンドブック**」発刊
2012.8月 Rio No.166 外来淡水魚／外来植物
2014.3月 Rio No.183　4つの外来種話題
2014 矢作川研究No.18「3つの外来種論文」
2025.春 Rio No.235「外来生物への対応」



アカミミガメ対策推進プロジェクト 2016～2020
2017. Rio No.202、205「ドローンで探せ」
2018 矢作川研究No.22「市民共働による防除」
2018.10月 Rio No.209「逢妻男川・女川の活動」
2019.2月 研究所シンポ「**防除プロジェクト報告会**」
2020 矢作川研究No.24「UAV活用による調査」
●「**アカミミガメ防除マニュアル**」 2020.3月発行

～ 「ふるさとの川づくり」を市民と共に ～
新時代の矢作川研究所へ －新たな可能性を求めて－

豊田市は1995年策定の「豊田市矢作川環境整備計画」を20年ぶりに更新し、2016年6月「**豊田市矢作川河川環境活性化プラン**」を公表した。これは当然ながら矢作川研究所20年間の成果を十分に踏まえた計画であり、この中で新たに「**ふるさとの川づくり**」事業推進が謳われている。これは全国的には「小さな自然再生事業」として展開されており、河川管理者だけではなく市民とともに、ある意味手づくりでの河川再生、あるいは環境維持を図るプロジェクトである。

活性化プランでは、流域での「**人育て**」をテーマともしており、「ふるさとの川づくり」を広く展開していくことによって、より多くの市民を巻き込むこと、市民が楽しんで関わることが出来るような「仕組み」を構築することを掲げている。以降、研究所では私たちに随分と河畔から森に至る「流域の恵み」を伝えてくれた。



【流域（森・河畔）の恵み】

ふるさとの川づくり開始！

「ふるさとの川づくり」は2015年6月より、岩本川から始められた。河川管理者（豊田市）が行う浚渫など維持管理工事を実施するにあたって、「ついでに、市民や子どもたちも巻き込んでしまおう！」とする新しい発想に至り、子どもたちにも岩本川を体感（探検隊）し学んでもらいながら、「未来はどんな川にしたいのか」描いてもらうワークショップを展開することからスタートする。この未来希望図をみんなで議論し具体化させながら、進めるものだ。

矢作川研究所アーカイブ Ⅲ



新たな市民連携をめざして

2015.4月（社会学）吉橋久美子研究員着任

2015.5月 第15回（最終）矢作川「**川会議**」
／設立時構成団体11、内「**水辺愛護団体**」7団体
最終構成団体は18、内「**水辺愛護団体**」11団体

2007～ **河畔林愛護会の参画**

2015.10月時点 **水辺愛護会**19団体（約660人登録）
／ 旧市水辺愛護会14＋新市域（**河畔林**）5団体
2016.10月 Rio No.201「水辺の守り人」吉橋
＊2016.3月 矢作川上中流 **河畔林愛護会**５団体による活動発表会が開催される

「**豊田市矢作川河川環境活性化プラン**」2016.6月

2015～ **ふるさとの川づくり**

2015～「**ふるさとの川づくり**」事業展開する
／2015～ 岩本川　2017.3月 **岩本川創遊会** 設立
＊岩本川創遊会は水辺愛護会には含まれていない
／2020～ 広沢川（猿投地区籠川支川）
2025.5月 (26番目)**広沢川猿投水辺愛護会** 設立
／2024～ 一の瀬川「ふるさとの川づくり」始まる

2019～ 水辺愛護会「**管理・活動計画図**」作成支援
2019.10月 Rio No.213 初音川始め3地区で開始
～2025年度（お釣り土場）まで8地区で展開

2022.4月時点 豊田市「**水辺愛護会**」22団体
2023.3月 **水辺愛護会・河畔林愛護会交流会** 開催
2025.5月時点 豊田市「**水辺愛護会**」26団体 へ
（河畔林愛護会を含む）

2015～ **矢作川の恵み**



【**矢作川の恵み**】2016.1月 Rio No.198 吉橋久美子
矢作川の言葉「**イモハチポン**」（芋・蜂・魚）
2012.2月 Rio No.160 小渡セイゴ愛護会「**竹灯籠**」
2015.2月 Rio No.193 有間「**夢たけのこ**」内田良平
2015～ **ニホンミツバチ**の採蜜、養蜂を通じた「恵み・楽しみ」の創造へ／古鼡、百々、初音川で
2016.10月 古鼡「採蜜会」 浜崎健児

2017 矢作川研究No.21「**愛護会 成果と課題**」吉橋
2017.3月 **田口美恵子** 退職＊約23年間事務担う

ニホンミツバチ
養蜂とハチミツ



2017.10月 百々、初音川水辺愛護会「採蜜会」
2018.4月 Rio No.207 洲崎、吉橋、浜崎
「**恵みを活かしていい川をつくる**」
「**ニホンミツバチ**」中部日本みつばちの会

2018.2月 第23回矢作川研究所シンポジウム
「**川の新たな恵みを創ろう～川辺の「守り」をつなげるために～**」曽根原宗夫、洲崎、吉橋
／メンマ(天竜川)、ミツバチ、**企業連携**
2018.10月 Rio No.209「**トヨタ自動車堤工場の社会貢献活動**」逢妻男川外来カメ駆除、初音川草刈
2019 矢作川研究 No.23 「シンポジウム報告」
2019.7月 Rio No.212「**水源の人工林間伐によって得られる森の恵み**」山菜、ヘボ ／洲崎燈子
2020.1月 Rio No.214「**ニホンミツバチ養蜂**」百々

ヤブツバキ／椿油
（花と果実）





2021 矢作川研究 No.25 市民活動活性化の仕組み
「二ホンミツバチ養蜂による活性化」吉橋、他
「活性化ツールとして**ヤブツバキ**検討」洲崎、他
／ 2020.2月 百々にて「**椿油**」搾油
＊女性も参加しやすいツールではないか？
2022.春 Rio No.223「**川の恵みを活かす**」メンマ
2026 矢作川研究 No.30 川辺管理の新しい担い手「**企業ボランティアの可能性**」吉橋、洲崎

ガイドブック等



2018.10月 Rio No.209 「**川辺に咲く花を増やしたい！～草の刈り方を変えてみたら？～**」洲崎
2019,20 矢作川研究 No.23,24 初音川ビオトープ「**異なる手法の草刈りが植生に及ぼす影響**」洲崎
2022 矢作川研究 No.26 矢作川河畔において 洲崎「**異なる手法の草刈りが河畔植生に及ぼす影響**」
2022.夏 Rio No.224 「**川辺に多様な植物を育む**」
2025 矢作川研究 No.29 蕪木町トヨタテストコース「**ハチク伐採後3年間のモニタリング結果**」洲崎

- 「**川づくりガイドブック【草地編】**」2021.3月発行
- 「**川づくりガイドブック【竹林編】**」2022.3月発行

パンフレット等

矢作川探訪マップ（旧版 **散策路マップ**）
矢作川探訪マップ（2024.3月改訂版）

ワークショップで重要だったのは、まず住民の方々に過去の岩本川の様子なども語ってもらったこと。そこから現在も踏まえ、子どもたちにも川に入ってもらい、未来への希望を話し合うことで、世代をも超えた場になったのではないか。





岩本川の川づくりは、2016年から始まった。従来であれば、市が発注する単なる浚渫工事であったはずのものが、地元市民・子どもたちをも巻込む手づくりの「川づくり」へと昇華する。工事後の維持管理にも目を向けた「近自然の思想」に近いものではないだろうか。自分たちが描いた未来図が現実になったものであれば、愛着が生まれ、その後も積極的に岩本川に関わっていくはずだ。もはやそれは、河川の維持管理行為などという無機的な言葉では片づけられない。まさに「川づくり」＝「人づくり」を具現化したようだ。





さて、岩本川は古川、百々二つの自治区の間を流れる川。そこでの今後の活動を支援するための応援隊として、2017.3月に「岩本川創遊会」が創設された。そこでの思いは、代表の小野内康伊さんに取材しており、是非とも読んでいただきたい。なお、この創遊会は、豊田市の水辺愛護会には登録されていない。逆にこのことは、地域活動の先進性、画期的な面を象徴してもいようか。メンバーも他と比べて少し若い気がする。

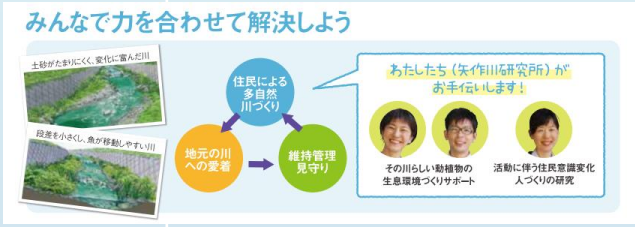


矢作川研究所アーカイブ Ⅲ

ふるさとの川づくり

●岩本川

2015.4月（社会学）吉橋久美子研究員着任
2015～ 「**ふるさとの川づくり／岩本川**」事業展開
2016.4月 Rio No.199 山本大輔、吉橋久美子
「**ふるさとの川づくり始まってます**」 岩本川







2017.3月 **岩本川創遊会** 設立
＊2019.3月 担い手事例集Ⅱ／**小野内康伊** 取材
（2018.12月取材／瀬川貴之、近藤朗）
2017.10月 Rio No.205 山本大輔、吉橋久美子
「**ふるさとの川づくり進んでいます！**」 岩本川



2018.7月 Rio No.208 吉橋久美子 ／矢作川中流域
「目指された「**泳ぎたくなる川**」**川遊び**」
2019 矢作川研究No.23 山本大輔、吉橋久美子
「**地域住民と行政による小川の自然再生**
「（**岩本川**）ふるさとの川づくり」事業の記録」
2021.2月（シンポジウム代替）動画配信
「**みんなでつくるふるさとの川！**」
ふるさとの川づくり事業記録と展望

●広沢川

2020～ **広沢川**（猿投）**ふるさとの川づくり** 展開
2021.秋 Rio No.221 吉橋久美子 川紹介「広沢川」
2022.冬 Rio No.222 吉橋、金田修、白金晶子
「**広沢川でのふるさとの川づくり事業**」
2024.2月 矢作川研究所シンポジウム
「市民主導の川づくりで創出する水辺空間」
／ 金沢大学 坂本貴啓、岩本川創遊会 小野内康伊
2025.春 Rio No.235【30年特集】「**浚渫をきっかけに!? 地域に愛されるふるさとの川づくり**」
2025.5月 (26番目)**広沢川猿投水辺愛護会** 設立
2026 矢作川研究No.30 山本大輔、吉橋久美子
「**地域住民と行政による小川の自然再生 その２**
「（**広沢川**）ふるさとの川づくり」事業の記録」

●一ノ瀬川

2024～ **一の瀬川 ふるさとの川づくり** 展開

パンフレット等

矢作川探訪マップ（旧版 **散策路マップ**）
矢作川探訪マップ（2024.3月改訂版）









「岩本川未来希望図」から作成した整備イメージ図　～ まさしく小川の再生 ～

2020年より広沢川で始めた
Rio No.221、222より





創遊会の小野内会長が仰っていたのは、「義務になると続かない。俺ら自身も楽しんでやらなければ、子どもたちも楽しくなかろう」と、自治区のしがらみに縛られない自由な活動をすることで、新しいメンバーが増えていくことも期待されているようだ。

ふるさとの川づくりは、この後2020年から猿投地区（籠川支川）の広沢川へと継承され、2024年からは３番目の取組として、一の瀬川で始まった。私が事務局長を務める**愛知・川の会**でもこれを非常に興味をもって見守っており、2025年5月には広沢川へのエクスカーションを実施したところである。











写真3. ふるさとの川づくりの対象地
紙面上が上流、猿投山がそびえる



広沢川 ふるさとの川づくり
2020～ 一連の活動内容 →
← 2025.5月 愛知・川の会
広沢川エクスカーション



児ノ口公園の四季 Rio NO.34（2001.2月）

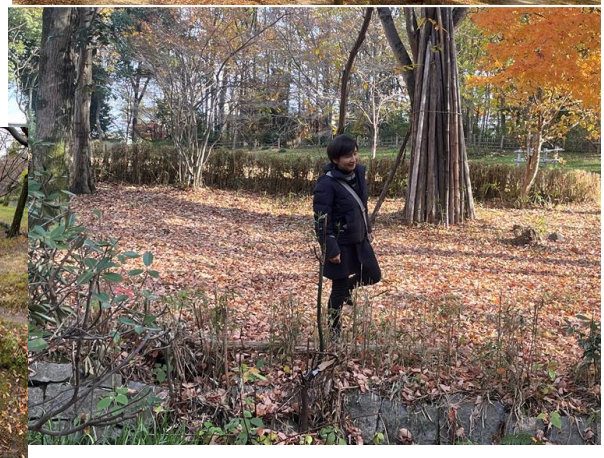


「児ノ口の雪景色」　杉山亘氏　撮影

新･児ノ口公園の四季 2018.春～2024.初冬（12月）







このふるさとの川づくりのような取組みが、これからもっと広がっていくべきだと思うのだが、どうしたらよいのか？ 宮田所長や担当の吉橋さんに答えを求めていた訳ではない。この川づくりは非常に手間暇がかかるプロセスを丹念に進められており、広げようとすれば研究所だけで進められるものでもない。新しい時代にあって重要なことは、おそらく「川づくり」のみならず、あらゆる地域財産を自分たちのものとして「まちづくり」を進めていくという文化熟成にあり、行政全体が住民・市民、あらゆるセクターとともに地域創出するための風土を再構築することにあろうか。成長時代に著しく進んだ「分業化社会」が、今の私たちにはあまりに馴染み過ぎていて多くの分断を生んでいる。これに一石を投じたのが、この「ふるさとの川づくり」なのだと思う。

まちの中にも自然を！

豊田市あるいは愛知県が取組んできた近自然、多自然川づくり、（新市域）河畔林整備やふるさとの川づくりは、どちらかと言えば豊田都心から離れた郊外、農村や山村地方での取組みが主であった。今回の取材で宮田所長が「もっと、まちの中でも自然再生をやりたかった」と仰っていたのが心に残っており、思い起こせば研究所シンポジウムにおいても、2002年 第7回 「**矢作川の自然をまちの中に**」、2008年の第13回「**川に生かされ、川を生かすまちづくり**」では、都心まちなかをテーマとしていた。1990年代に**近自然「児ノ口公園」**という成功事例はあるものの、その後広がってはいない。これは当初目的としていたものの、いまだ達成できていない大きな目標なのではないだろうか。研究所30年間の成果と経験を今こそ、まちなかへと生かす時代になったのかもしれない。これから豊田市中心部においても人口減少が始まっていく。きっと行政のみならず圏域内外の市民、企業などともまちづくり連携を進めていくことになるのだろう。

2025.5月 愛知・川の会　児ノ口公園エクスカーション





多様な川づくりと市民活動

近自然、多自然川づくりから始まり、多様な取組みと共に育まれる地域活動へ

最後に、豊田市の中で展開されてきた市民活動、及び水辺愛護会の展開についてまとめておきたい。1991年からの愛知県による矢作川古川水制工群設置後の水辺公園誕生と愛護会発足が全ての始まりであり、以降様々な地域で市民活動が展開されていった（右表参照）。豊田市においては、近自然工事、あるいは多自然川づくりと市民活動の相性はとても良いようだ。





豊田市及び矢作川研究所は、この流れを踏まえて多様な川づくりと共に水辺愛護会の創設と育成・支援を展開してきたとも言える。これは2005年の大合併以降も続けられており、河畔林愛護会誕生へと繋がっていく。2025年5月時点で水辺愛護会（河畔林含む）は26団体となっているが、いずれも自治区（自治会）組織と繋がる。運営上合理的な面も大きいが、課題もいくつかあろう。高齢男性が主体となってしまうこと、若い世代の巻込み・後継者不足といった持続可能性の問題など。人口減少問題が顕在化していくこれからにおいては、新たな発想で検討していく必要がある。この課題については、都市部、周辺郊外、田園地帯・農村部、山間地域において状況が大きく異なってくるので地域実情に応じた未来像「夢」を描くことになろう。

自治区組織によらない市民活動も今後、重要となってくるだろう。既に「矢作川水族館」「NPO矢作川森林塾」など新たな活動も展開されており、若い世代や女性、行政・企業ＯＢなどが地域に縛られず、かつ楽しく活躍している。

一方、山間地では著しい人口減少問題に晒されており、その地域だけでは維持できないという課題とも直面する。旭地区での「しきしまの家・自給家族」は、「**関係自治・関係人口の創出**」を掲げ、流域市民、都市市民を呼び込み始めた。そのためのツールは、お米や森づくりなど「山・森の恵み」であり、今水辺愛護会が活用しようとする「川の恵み」にも通じる。この自給家族を始めた鈴木辰吉さんは、かつて「おいでん・さんそんセンター」を始めた方。センターはある意味「**中間支援組織**」であり、様々なマッチングを進める上で、これから重要となってくる。

矢作川研究所も中間支援機能を果たしてきたわけであり、川を流域として捉えるのであれば、山や海の市民などともっと繋がると良いのかもしれない。

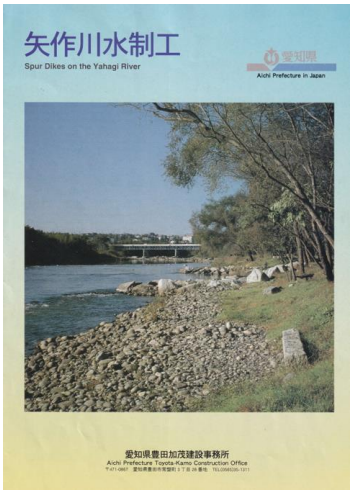


川づくりの経緯と市民活動の広がり

時代　Year	川づくりと人、市民団体のあゆみ
1990年以前	1969～ **矢作川沿岸水質保全対策協議会 内藤連三** 1972.7月 **昭和47年災による甚大な被害** 1977～1985「**月刊矢作川**」100号 枝下用水 **三浦孝司**、矢作漁協 **新見幾男**ら 1987～2006 **矢作川筏下り大会**（全20回）
1990年代～2005	1991. **豊田市矢作川環境整備計画策検討会** 設置 1991.9月 欧州近自然視察へ 豊田市 **木戸規詞** 西日本科学技術研究所 **福留脩文** 1991 豊田市が**加納川近自然改修**を実施 **松本治男** 1991～1995 愛知県が **古牝水制工群**を整備 ❶ 1993 **古牝水辺公園愛護会** 設立 **村山志郎** 1994 **豊田市矢作川研究所**設立 **田中蕃、白金晶子** 1994～継続中 愛知県が **籠川多自然川づくり**実施 1994～1995 豊田市が **近自然・児ノ口公園**を整備 ● 1996 **児ノ口公園愛護会** 設立 **成瀬順次** ● 1996 **天然アユ調査会** 設立発足 **梅村淳二、田中蕃、新見幾男、新見克也、宮田昌和**ら 1998～ 研究所が **お釣土場竹林整備 洲崎燈子** ●1995 **波岩水辺愛護会、石倉水辺愛護会** 誕生 ＊2020 **猿投地区の水辺愛護会**へと合流する ❷ 1996 **アド清流愛護会** 設立(籠川合流点上流) ❸ 1998 **梅坪水辺愛護会** 設立(籠川合流点下流) ❹ 2000 **御船せせらぎ広場愛護会** 設立(山田川) 1993～1999 豊田市が **太田川近自然改修 木戸規詞** ❺ 2000 **太田川河川愛護会** 設立 2000.9月 **東海豪雨による甚大な被害** 2001.5月 **矢作川「川会議」**スタート **裕さくら** 2003.3月 **愛知・川の会** 設立 **近藤朗** 2003 研究所が**初音川ビオトープ**を整備(逢妻男川) ❻ 2003 **初音川ビオトープ愛護会** 設立 ❼ 2003 **百々水辺愛護会** 設立 ❽ 2003 **西広瀬町矢作川水辺愛護会** 設立 ❾ 2004 **藤沢水神ロード愛護会** 設立 ●2004 **矢作川水系森林ボランティア協議会** 設立 2005～ **矢森協 矢作川森の健康診断** 開始(-2014) **丹羽健司**(矢森協)、**洲崎燈子、蔵治光一郎**ら
2005～	2005.4月 **豊田市 平成の大合併** 2005.7月 第8回**「川の日」WS矢作川大会** 開催 ⑩ 2006 **加茂川水辺愛護会** 設立 ⑪ 2007 **枝下町矢作川水辺愛護会** 設立 ⑫ 2009 **富田水辺愛護会** 設立 ● 2007 **矢作川水族館** 発足 **阿部夏丸、新見克也** 2009～ ●**家下川リバーキーパーズ** 活動開始 **阿部夏丸、新見克也、酒井博嗣、山本敏哉**ら ● 2010 **NPO矢作川森林塾** 発足 **裕伸夫** 2010.8月 国が**矢作川流域圏懇談会** 設立 2007～ 旭・足助・小原・藤岡の4地区7自治会「**河畔林整備行動計画**」策定、**河畔林整備**実施 ⑬ 2008 **小渡セイゴ水辺愛護会** 設立 ⑭ 2008 **矢作川自治区水辺愛護会** 設立 ⑮ 2009 **縄文の里・水辺公園**(下川口)**愛護会** ⑯ 2011 **有間竹林**（笹戸）**愛護会** 設立 ⑰ 2014 **大河原水辺愛護会** 設立 2009.頃 **M-easy 戸田友介**ら**若者たちの移住** 2011.3月 **東日本大震災・大津波** 2012 **橋の下世界音楽祭** 開始 **永山愛樹** 2013 豊田市 **おいでん・さんそんセンター** 設立 2013～ 矢作川流域圏懇談会（山部会） **山村再生担い手づくり事例集調査** 開始 ／**洲崎燈子、浜口美穂、近藤朗**ら
2015～	 2015～ 研究所「**ふるさとの川づくり**」事業展開 **吉橋久美子、山本大輔、洲崎**ら、CWP**瀬川貴之** 2015～岩本川　2020～広沢川　2024～一の瀬川 ● 2017 **岩本川創遊会** 設立 **小野内康伊** 2016～2017 豊田市 **猿投台地域会議** 開催 ⑱ 2020 **平戸橋一区水辺愛護会** 設立 ⑲ 2020 **平戸橋二区水辺愛護会** 設立 ⑳ 2020 **中越戸水辺愛護会** 設立 ㉑ 2020 **下越戸水辺愛護会** 設立 ㉒ 2020 **荒井自治区水辺愛護会** 設立 2023.4月 豊田市準用河川等３団体の愛護会発足 ㉓ **池田川** ㉔ **樫尾川** ㉕ **大見川水辺愛護会** 2025.5月 ㉖ **広沢川猿投水辺愛護会** 設立

おわりに

1994－2026年
なお、より良い矢作川流域圏の創造を目指して



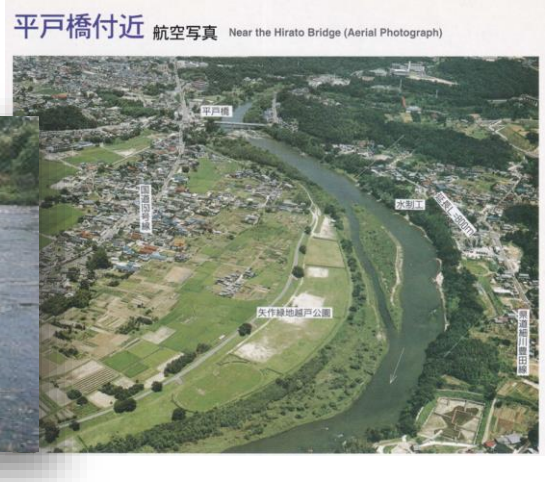
私が初めて豊田土木事務所に赴任した1994年、既に矢作川には古鼡水制工群が９基（Ⅰ期、Ⅱ期工事）設置されており、全国から多くの視察者が訪れていた。さらにこの年、ドイツから河川技術者のボック氏が視察来日するということで、県庁河川課からはパンフレットを作製せよとの命が下る。このため豊田市や漁協、田中蕃さん、古鼡水辺愛護会、自然愛護協会の梅村淳二さんなど関わった多くの方々への取材も行った。そして行政職員としてはかつて経験をしたことのない感覚（良い意味での違和感と言っても差し支えない）を味わう。この水制工はあくまで愛知県が実施した河川工事なのであるが、この人たちは矢作川のこの空間を自分がつくった、自分のものだと思っている。新鮮な驚きであり、これが私の河川管理者としての原点ともなる。

さて、私が今回この原稿を書くにあたって、取材した3名の方々だけでなく、より多くの関係した方々との対話をしたく、改めて「矢作川研究」30巻、「Rio」No.237まで眺めまわした。これを読めば、既に亡くなった方々も含めて、今でも会話が出来ると思っている。なぜそこまでするのかと思われるだろうが、気づいている方もいらっしゃるはず。そう、私は「豊田市矢作川研究所」をあたかも自分のものだと思っているから。何せその誕生にも立ち会っているし、思い入れがある。研究所設立以降、3年間で豊田土木事務所を離れ、その後１年間だけ舞い戻り通算４年、県庁河川課での関わり4年間を含めても8年間であるが、私が2003年に愛知・川の会を創設した繋がりもあり、ほぼ30年間にわたって「追っかけ」をしていたようなものだ。どこか他の流域で難しい課題と向き合うことになった時、「矢作川でだったらどうしていただろう？」と問いかけるのが常であった。まさしく原点なのである。このことは、今「流域圏大学」あるいは「流域圏研究所」構築を真剣に考える上で、重要な示唆にならないだろうか。

さて、もう何度目になるだろうか。今回も矢作川研究などを読み返しながら、最も多く「対話」したのは、やはり新見幾男さん（故人 2023.1月逝去）なのである。「矢作川研究」1997年の創刊時から毎号巻頭で「よく利用され　なお美しい矢作川の創造を目指して」を連載されており、これは2015年発刊のNo.19まで続けられた。この中では特に2005年くらいまで、私のやった工事に対して怒られたし、滅多にはないけれども褒められたこともある。これは初期の「Rio」においても同様であったが、いずれにせよ新見さんとは、随分と幾度も議論した内容がよみがえってくる。お互いに（良い意味で）頑固だったとは思う。







2004年8月の「Rio」No.76は、矢作川研究所の10周年として様々な関係者のメッセージが寄せられており、その中で例えば研究顧問の古川彰さんが、研究所は「**住民との共同研究基地**」であれと謳っている。

同じく研究顧問であった田中蕃さん（故人・2007.5月逝去）との思い出も数多い。かつて矢作川のお釣土場では、洲崎さんと共にお会いした。洲崎研究員指導の下、地元の可愛いおじさんたちが竹林をお姉さまの言われる通りの手法で伐採する現場であり、その内容説明をこの心地よい空間で聞いていた。

この田中蕃さんが10周年にあたって「10年目・言わず語らずの話」として次のようなメッセージを書いているので是非とも紹介したい。

お釣土場の風景



「市民のための川の研究というのは、聞こえは良いが、それは科学的ではありえない側面がある。市民の川を見る目は、意識されているか否かにかかわらず自然主義的である。自然主義は自然科学とは別物だ。それが区別されず混同されている限り、市民に愛される研究所になり得ないのではないか。これに気付いて欲しいのは研究所の職員のみならず、研究所の母胎である市及び市職員であり、かつ市民の皆さんである。」

「科学的にことを処理しようとする気持ちが先行しすぎ、芸術や宗教を深い内面思考で考究するソフトな脳の養成を、研究員がわがものにしていく鍛錬が必要ではないか。その柔軟さが無いと、研究所全体の社会事象に対する受容量が低下してしまう。常日頃の実証的な科学的作業は不可欠である。しかし、漂う自然の雰囲気を、感覚や思考の世界でふんわりと受け止める器が、研究所には必要なのだ。所員個々への分担割り当ては本末転倒。各個人が努力して器を大きくして欲しい。」

総括研究員職を辞され、2年ほど経った豊田市営時代の頃の言葉である。Rioを読んでいると、今も何だか実に多くの方々と直接対話しているような気分になる。

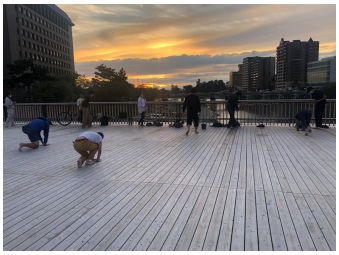
One River with 乙川・伊賀川（岡崎市）

一つの川（流域）で一つのチームを創ろうということで2021年に「One River」が発足した。ここでは単なる一つの市民団体という枠組みにとどまらず、さまざまなプロジェクトが合流していく。まだ新しいチームではあるけれども、岡崎市ではそれ以前から市民や行政が様々な試行、実験、チャレンジなどを展開してきており、それらが結実した結果なのかもしれない。

そこで今回は、「One River」「あいち 橋の会」「海と日本プロジェクト in 愛知県」３組の方々にお話を伺いながら、ワンチームミッションの内容（一部）をかいま見ることとした。

加えて「One River」設立以前の様々な動きについても「乙川アーカイブ」としてまとめてみたので、取材レポートとあわせてご覧いただければ幸いである。

One River 岩ケ谷充さん







One River with あいち橋の会 宮川洋一さん



One River with 海と日本プロジェクト 鈴木訓幸さん 佐々木健司さん









OneRiver ホームページより

ある日の乙川2025

Let it Camp

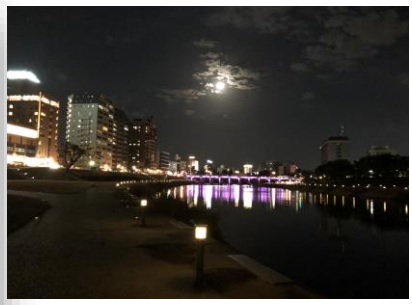
おとがわリバークリーン

なりの田んぼ

いったーんプロジェクト

「乙川らしさ」が自然と生まれる場所を目指して

ONE RIVERは「乙川らしさ」が生まれる場所を目指して発足された、
乙川が大好きな市民による任意グループです。
2016年よりはじまった「乙川リバーフロント地区かわまちづくり事業」
の実施主体として、5年にわたって乙川河川敷を対象エリアにした 水辺空間活用の
プロジェクトを行ってきました。
これまでの活動を通して見つけてきた、 未来につなげたいこの場所の価値を
伝えていくために、 様々な活動を通して、未来の日常につながる
想いをカタチにしていきます。





ONE RIVER

岩ヶ谷さんは、2021年に設立された市民団体「ONE RIVER」のプロジェクトマネージャー/事務局長を務めている。乙川を中心とし、かわまちづくり活動を通じて、様々なプロジェクトを展開している。現在は、まちなかだけでなく中山間地域も含めた流域全体を対象に活動をしている。



岩ヶ谷充さん

取材日　：　2026年2月27日
取材場所：　中央緑道（天下の道）（岡崎市康通南三丁目）
取材者　：　近藤 朗、大嶋謙介、原田竜作
レポート執筆者：原田竜作



● かわまちづくりの歩みと新たなプラットフォーム

かわまちづくり支援制度を受けて、岡崎市では2015年から乙川を中心としたかわまちづくりの動きが始まり、2016年から2021年まで社会実験「おとがワ！ンダーランド」が実施されていた。社会実験終了後は河川活用の窓口業務を乙川河川緑地の指定管理者が担当することで現在も活動は継続しているが、社会実験期間に得た、人との出会いや自然への気づきから、まちなかの活用だけでは見落としてしまう大切な要素があると気づき、それまで実施してきたかわまちづくりの活動をそのまま継承しながら、より広域に川を捉え、事業を実施しながら川の魅力を発信していくためにプラットフォームとして任意団体「ONE RIVER」を設立した。



取材時の様子

● 「ONE RIVER」の活動展開

設立当初は、社会実験時代から実施していた環境美化活動「おとがわリバークリーン」、河川敷を使ったキャンプ事業「Let it Camp」、乙川にまつわる啓発イベント「川びらき、川あそび、川ぐらし」の実施などの活動を自主的に行っていた。現在では、これらの活動を通じて広がった繋がりから、活動の幅が広がり、地域や民間企業等から依頼を受け協働して場づくり等をおこなう場合もある。例えば、乙川の源流部の額田地区で地域住民と一緒に運営する稲作体験プログラム「となりの田んぼ」や、地域の担い手確保を目的とした移住促進プロジェクト「いったーんプロジェクト」の立ち上げと運営、水にまつわる企業の水上安全啓発イベントの企画・運営サポート等も行っている。昨年には名古屋大学から依頼を受け、気象予測シミュレーションを活用し、まちや川の風景への影響についてを考えるワークショップを交えた調査研究事業への協力も行っている。

当初は、自分たちのやりたい川の活動を継続させるための器として「ONE RIVER」を立ち上げたが、上述の通り、現在では、川や水に関わる様々な事業に関わりながら活動している。

「ONE RIVER」は、プロジェクトを中心的に推進する一部のメンバーだけの組織ではなく、市民ボランティアが緩やかにつながりながら活動していくコミュニティを形成している。みんなで協力して1つの物事を作り上げることもあれば、個人が川やまちを通してチャレンジしたい活動や事業をONE RIVERでサポートすることも重要な役割となっている。

● 流域全体の視点から考える中山間部の課題と「ONE RIVER」の挑戦

課題の一つ**として**中山間部で耕作放棄地が増加することで、田んぼの役割の一つである天然のダム機能が減少するということが挙げられる。このような問題を中長期的に考えると、都市部の被害にも繋がるため、それらの現状を知り、山間部の状況をより自分事として捉えていく必要のある社会問題の一つである。そうした理解を深めてもらうために、「ONE RIVER」では、都市部（まちなか）の人が山へ足を運ぶことが重要であり、その一環として中山間部で体験プログラムを開催している。

水源からまちまでの流域全体を意識するきっかけとなったのは、「ONE RIVER」設立前の2017年頃、一般社団法人**奏林舎**の代表理事である唐澤晋平氏が登壇した勉強会に参加したことがきっかけだった。そこで話題となったのが、森の健康状態について、都市部に住まう人を中心にまだまだ無関心な方が多く、そのような意識を変えていかなければいけないという課題感でした。そこからそれらを意識しながら都市部での活動を進めながらも大きなアクションを起こすことができないままでいたが、2016年～2018年の3年間は、流域という考え方との出会いや気づきがあった期間と感じる。そして2019年頃から、これまでの点（人との出会いや自然への気づき）が線となっていき、2021年の団体発足時には、都市部の川の賑わいづくりに留まらず、流域全体の最適解を探るような活動を行いたいと思い、団体発足を決意するに至った。

「ONE RIVER」というコンセプトが壮大であるが故に、結果として世代や関心領域を超えた幅広い繋がりを生み出している。テーマを細分化してしまうと、特定分野のコミュニティに限定されるが、流域全体の最適化という漠然としたコンセプトを掲げたことで、様々な関わり方が生まれることにつながった。



となりの田んぼ①


となりの田んぼ②


畑のつち曜日

● 行政と協力体制を築く「ONE RIVER」の活動方針

2016年～2021年にかけて実施された「**おとがワ！ンダーランド**」は岡崎市が主催し、運営していた社会実験事業である。そこから派生し、現在は民間主体の団体「ONE RIVER」として活動を継続しているが、いまでも岡崎市を含めた関連行政とも良好な関係を築いている。行政からの委託や利害関係に基づくものではなく、ともに川やまちのことを考えるパートナーとしてフラットな関係を保っている。互いに情報交換や活動支援を行いながら、協力関係を構築しているのも特徴である。

活動写真の出典：ONERIVERホームページ

● プラットフォームとしての役割と活動の展開

ONE RIVERで携わっているプロジェクト数は年々増えているが、事務所内のスタッフだけではなく、ボランティアとしてサポートしてくださる方々のおかげで、活動を成り立たせることができている。そのような誰しもが自分ごとになれるコミュニティを維持しながら関わりの場をひらいていくことを重視しているため、事務所内のメンバーだけで運用することを目的にはしていない。さらに、個人的に川に関わる活動を始めたいと思っても、何をどうしたら良いか分からない人もいる。そうした人たちのために、誰でも参加できるプラットフォームを作りたいという思いもある。

最近の取り組みとして田んぼや農園での活動（体験プログラムの企画・運営）を行っているが、頭だけの知識ではなく、身体性を伴う実感知を大切にしている「ONE RIVER」にとってとても親和性が高い取組みになっている。体験を通じて、知識以上の知恵が残っている感覚を届けたいという思いがある。

● 親子で築くフラットな学びの場

ONE RIVERの活動には多くの子どもたちも参加してくれているが、子どもは五感を使って遊び、体験することの天才であり、活動に参加してもらいながら、逆に子ども達から教えてもらい気付くことが多く存在する。自然の中では子どもも大人も関係なく、ともに学び合う同士のような関係を大切にしたいと考えている。親が楽しんでいる姿を子どもは見ており、最も影響を与えている。そのため、親も子どもと一緒に楽しみ、フラットな関係で活動することが重要である。

● 現状の課題と今後の展望

「ONE RIVER」のような活動は、結果が短期（1年や2年）で現れるわけではないため、長く活動を継続する必要がある。そのため、体制や経済面、活動内容等のあらゆる側面を含め、どのように活動を継続していくかが課題でもあり、今後の楽しみでもある。

現在では、中山間部を含めた流域全体に活動の視野が広まっているが、はじまりは都市部（まちなか）の川を対象とした活動であり、都市部に住んでいる人々の自然観を養うことが大切であると考える。また、活動を通して、川とともにある暮らしを実現したいという思いもあり、これまで「ONE RIVER」に関わってきた人々のおかげで築くことができた基盤や思想を、今後はまちなかでの拠点整備等を通して社会活動に接続していくことが大切であると考えている。



おとがわリバークリーン



オカザキリバーサイドリレーマラソン



水辺で乾杯（桜城橋）①



水辺で乾杯（桜城橋）②

活動写真の出典：ONERIVERホームページ

あいち橋の会

岡崎市出身の愛知県職員として橋梁事業に携わりながら、休日は市民活動として毎月第4週の土曜日に「額田の森に思いをはせて桜城橋ふき」を開催しています。

取材日　：　2026年2月27日
取材場所：　桜城橋（岡崎市唐沢町1丁目）
取材者　：　近藤 朗、大嶋謙介、原田竜作
レポート執筆者：原田竜作


宮川洋一さん


取材の様子


活動後の集合写真

● 「ONE RIVER」に見る地域社会の新たな取り組み

地域の課題は多様化しており、各カテゴリ間の隔たりが大きくなったため、分業化された社会では対応が難しくなってきている。また、行政は予算や人員などの問題が発生している。そのため、地域の課題は地域住民で対応する必要があり、現在の体制は持続可能とは言えず、このままでは豊かな社会を次世代に引き継ぐことが困難であると感じている。こうした危機感から、地域住民による自発的な活動が増加し、「ONE RIVER」のような団体が活動の幅を広げている。これらの自発的な活動は、行政から委託されずに発展していく必要があると考えている。また、「ONE RIVER」の活動にみられる様々な要素を自身の仕事に取り入れられるよう、取り組んでいる。

● 地域価値の最大化と技術者の使命

愛知県建設局の技術職員として、インフラを通じて地域の価値を最大化することが仕事であると考えている。インフラ整備が進んでいなかった時代は、道路や川を整備することで、地域の価値が向上していた。しかし、現代は、これまでと同じやり方で、本当に地域の価値を向上させることができているのかと疑問を感じることもある。あらゆる角度から広い視野を持った工夫を重ねることで、価値を向上させることができると考えている。「ONE RIVER」などの外部の人から、めざすべき社会を実現するために自分のできることから始めてみることの大切さを学ぶことができた。

これまでは与えられた予算を執行することが主な仕事だと考えていた。しかし、建設事業は将来への投資として我々の子や孫の世代、未来の市民が、将来にわたって有効に使い続けられる良質なインフラを造り、引き継ぐ使命がある。そのために技術者としてのプライドを持ち、日々研鑽しながらモチベーションを保ち続けることも大切であると考えている。


活動の様子①


活動の様子②

● 桜橋ふきの先駆け～殿橋洗いと「あいち橋の会」の設立～

桜城橋が架かる前、殿橋は岡崎市政100周年リニューアル工事が行われていた。設計当初の計画では、耐震補強を優先し、メンテナンスが困難な構造となり、かえって橋の寿命を縮める恐れがあった。そこで補修設計の考え方を見直し、耐震補強を行いながらもメンテナンスが可能で、かつ魅力をそのまま維持できる計画に変更した。

リニューアル工事のため、半年間の通行規制が必要となった。その際、市民の理解を得るため、工事の情報や橋の魅力を発信する看板を設置した。公共物だからといって行政に任せきりにするのではなく、橋と市民との関係が分断されてほしくないという思いがあった。そこで、殿橋洗いを実施し、橋と市民との繋がりを深め、自分事として考えてもらう機会をつくろうとした。リニューアル工事期間中に実施は叶わなかったが、その後「ONE RIVER」の岩ヶ谷さんと協力し、殿橋洗いを実現することができた。これが現在の桜城橋ふきの先駆けである。

また、橋梁現場を経験したことのない職員や若手職員の育成体制の充実が必要であると感じ、「あいち橋の会」を設立した。そこでは職員同士の技術力向上だけでなく、橋の魅力を発信するなど、楽しく活動を行いたいという思いから、殿橋洗いの主催を「あいち橋の会」としている。

● 桜城橋ふき誕生の背景と橋への愛着

桜城橋ふきを行うきっかけとなった人物とは故・渡邉竜一さんである。渡邉さんの講演会に参加し、長崎県の出島表門橋で市民が橋のメンテナンスを自ら行う設計思想に感銘を受けた。その後、渡邉さんを岡崎市に招待し、まち歩きや講演をしていただいた。また、桜城橋の竣工後には、渡邉さんが大学で授業を担当されていた学生の皆さんを引き連れて岡崎市を訪れてくださった。

その際、渡邉さんが出島表門橋で橋ふきを行っていたこともあり、サプライズで橋ふきを行ったのが桜城橋ふきの始まりである。そこから現在に至るまで、桜城橋ふきが続いている。始めた当初は、桜城橋について知識が豊富だったわけではなく、活動を続ける中で、以下のようなことを学んでいった。

・市民の約6割が乙川の水を飲んで暮らしており、上流額田の森が水源であること
・額田の森が適切に管理されると水害のリスクが減ること
・上流の人々の暮らしが、下流の人々の暮らしを支えていること
・すべてが繋がっていること。決して他人事ではなく、自分事であること

桜城橋は多額の予算をかけて建設されたが、歩行者専用橋のため、渋滞解消にも役に立たないという意見もあった。市民から愛されずあまり活用されない現状に対して、橋の技術者として忸怩たる思いを感じていた。しかし、桜城橋ふきの活動を続けることで、少しずつ市民の愛着が湧いていくことに気づいた。このような愛着という感情に、非常に大きな価値があると感じている。



原田、大嶋も桜城橋ふきに参加してきました
（2026/3/28）



2026年3月の桜城橋ふきで通算67回目
毎月第4土曜日17:00～開催しています

One River ／ おとがわリバークリーン
with 海と日本プロジェクト in 愛知県　鈴木訓幸さん　佐々木健司さん

OneRiverでは、活動の一つとして「**おとがわリバークリーン**」、河川の清掃活動も毎月（第2土曜日朝）実施している。そこにパートナーとして2022年より連携しているのが「海と日本プロジェクト in 愛知県」実行委員会（現；一般社団法人 海と日本プロジェクト in 愛知県）であり、それを主導するテレビ愛知の鈴木訓幸さんと八千代エンジニヤリングの佐々木健司さんにお話を伺った。彼らと私は既に2024年より「22世紀奈佐の浜プロジェクト」海岸清掃において協働しており、今回は乙川での思いを聞く。

OneRiver ホームページより





佐々木健司さん（八千代エンジ）　鈴木訓幸さん（TV愛知）

取材日　：　2026年4月1日
取材場所：　岡崎市内　乙川、伊賀川河畔、
　　テレビ愛知 東海・三河支社（岡崎市唐沢町）
話をしてくれた方：**海と日本プロジェクト in 愛知県**
　● 鈴木訓幸さん（テレビ愛知 業務推進部）
　● 佐々木健司さん（八千代エンジニヤリング）
取材者　：　近藤 朗、大嶋謙介、原田竜作
レポート執筆者：近藤 朗

OneRiverとの連携　楽しく人を巻込む！

テレビ愛知が中心に進める「**海と日本プロジェクト(海プロ) in 愛知県**」が、岩ケ谷さんたち**One River**との連携を始めたのは、2022年12月のイベントから。One Riverさんは、設立時（2021）「**おとがわリバークリーン**」を社会実験「**おとがワ！ンダーランド**」より継承し、既に活動展開されていた。

私たち海プロ愛知は、単に清掃活動をするだけでなく、同時にモニタリングをしながら原因を特定できないか、発生源対策に繋がらないかを模索している。その関係で、地元住民・活動する方々といろいろ話をしてきたが、その中で岩ケ谷さんを「凄いな」と感心するのは、あの人の巻込み方。何より見ていて、とても楽しそうなのである。（ああ、よくわかる！）



伊賀川（坂谷橋）に設置された
モニタリング機器（現在は撤去）



八千代エンジニヤリングが製品化した「**RIAD**」＊というシステムは、東京理科大学・二瓶教授と愛媛大学・片岡准教授が開発されたもので、河川流水面をカメラ撮影、画像解析を行い、プラスチックを含む人工系ごみの流出量をモニタリングする。国内外でいくつかの実績があるが、伊賀川では、2024.7月～2025,3月に（上流側）石神橋と（下流側）坂谷橋の2箇所で設置、様子を見た。結果についてはまだ道半ばであり、十分ではない。

2026.4月1日、満開の桜の下、伊賀川坂谷橋にて
伊賀川はもう30年以上前に「ラブリバー」
河川に登録された河川愛護の象徴でもある
「伊賀川を美しくする会」が活躍中、調査にも協力



＊RIAD ;River Image Analysis for Debris transport

海と日本

海プロの10年とは

さて、日本財団の公式発表(HP)によれば、10年にわたって展開してきた「**海と日本PROJECT**」を、2026年3月をもって休止するとのこと。私(近藤)が運営する**奈佐の浜プロジェクト**では、直接助成など受けていないが、今まで三重・岐阜・愛知・長野で展開されている「海プロ」との関わりは結構深く、数々の成果をあげていることも知っている。「海プロ愛知」では、佐鳴予備校などとも連携し、小学生向け教材を監修されていたが、私が考えるプロジェクトの最も大きな成果とは、「人」そのものであり、活動を通じて育った「担い手たち」、それら対象は決して子どもたちだけではないと思う。プロジェクトの推移については、これからも見守っていきたい。



2024.10月 答志島海岸清掃での海プロ（これは長野）


メリ夫と
後藤里花さん


吉田拓司さん
鈴木訓幸さん

ごみ問題を語る

答志島から乙川への思い

そもそも、私と「海プロ愛知」との関わりは、2024年に遡る。三重・岐阜・愛知3県合同での「**伊勢湾流域圏海洋ごみ対策推進広域計画**」が2023年度末に策定され、いよいよ実行段階時という業務を八千代エンジニヤリングが受ける（三重県発注）。担当者であった吉田拓司さんとは、夏以降に何度か、打合せいただいたのであるが何だろう、会ったその日に一瞬で意気投合した。



「ごみを拾い続けても何も問題は解決しない」は、奈佐の浜のモットーでもあったが、ではRIADなどを使ったごみ調査をどのように発生源対策に繋げていくのか。市民と行政はいかに役割分担をすべきなのか、などを延々と語り合った。そして、2024年10月の答志島海岸清掃での共同作業。「未来創造プログラム」学生たちとも随分交流してもらったという思い出が今も鮮明に残っているが、その吉田さん自身は、その後すぐに急逝してしまう。これは相当にショックだった。わずか３月程の交流なのに、と言われそうではあるが、正に戦友をなくしたと思った。
実はこの時までは、彼が「海プロ」で藤前干潟や乙川をフィールドにしていることを、全く知らなかった。



2024.10月 （名古屋市）藤前干潟
クリーン大作戦での「海プロ愛知」

奈佐の浜プロジェクトを始めておきながら、全国川ごみネットワーク理事も務めながらも「私はごみ拾いが大嫌いである」と公言してはばからなかった。吉田さんにも、であるが、その原点は実は、乙川にある。
30年以上前、岡崎乙川での花火大会に初めて行き桟敷見物をした。花火そのものは美しいが、終了後の光景に唖然とする。駅に行くまでの路上は、弁当などのごみが散乱し足の踏み場もない。それはともかく、翌日新聞を読むと早朝に子どもたちがその清掃をしており、「美談」として取り上げている。それが毎年のことだ。
猛烈な違和感と嫌悪感を感じた。単なる美談のみで片付けて良いのか。現在ではそんなことはないだろうと、信じるが、本当に「ごみ教育」が必要なのは、果たして子どもたちなのだろうかと今でも思っている。乙川の賑わいをめざす OneRiverが、「リバークリーン」も展開するのは、とても理に叶っているのではないか。

乙川アーカイブ

One River 前のあゆみ

愛知・川の会　近藤 朗

今回、岩ケ谷さんなどへの取材に同行させていただいたが、そもそも私は宮川洋一さんと同じく、かつては愛知県職員であり、西三河建設事務所（当時は岡崎土木事務所）にも勤めていたことがある。これは今から30年程前、1997～1998年にかけてのこと。それ以前から現在に至るまで、少しだけ昔話を記しておきたい。これらは単なる思い出話という訳ではなく、全て現在に繋がっているし、多くの世代が協働して未来を創っていくべきだという思いもある。勿論ここは、読み飛ばしてもらっても構わない。

私が1997年に愛知県岡崎土木事務所へと赴任したのは、豊田土木事務所での経験（23頁参照）を経た直後、すなわち河川管理者としてわずかながら覚醒してから。ちょうどこの時、乙川では革新的な「多自然型川づくり計画」検討が始まっており、委員会（東京大学　玉井信行委員長）の運営を担った。喧々諤々の議論を２年程行い、まとめるが実はこの川づくり自体は、私の現役時代には実施されておらず今後を見守っていきたい。

豊田、岡崎いずれも矢作川流域での経験を重ねた後に、河川課へと赴任、2000年東海豪雨での環境対策に立ち向かう訳であるが、実は岡崎での洪水被害は、むしろ平成20年（2008）8月末豪雨の方が甚大だった。この時も愛知県は伊賀川や鹿乗川において、かなり先進的な多自然川づくりを展開しており、極めて挑戦的、実験的とさえ言える。



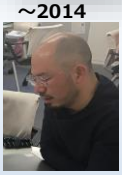
8月末豪雨後の伊賀川多自然川づくり

ちょうど私が岡崎にいた頃（1990年代後半）に、市民参加型まちづくりに向けた動きが始まっていた様で、これは「岡崎まち育てセンター・りた」天野裕事務局長取材時に伺ったが、当時の私は気付いていない。「りた」設立は岡崎市が合併した2006年となる。

その他、若いキーパーソンとしては、上流山間地に移住してきた唐澤晋平さんがおり、奏林舎開設、額田「木の駅」や森の健康診断など活躍していることは、懇談会・山部会でも十分周知されている。乙川のまちづくり、（流域）森づくりは今もまだ進化しているようだ。

岡崎市 乙川、乙川流域アーカイブ

懇談会10年誌、流域圏担い手づくり事例集などから編集
- ●詳しくは、矢作川流域圏懇談会ホームページなどを参照
- ●「乙川多自然型川づくり計画」についてはリバーフロント整備センター報告書（池内幸司氏）より

時代 Year	岡崎 乙川、乙川流域アーカイブ
1970年代～	1967 沖章枝さんが愛知県西三河事務所へ転勤（～1971まで） 1971.8月 **昭和４６年災害により堤防数箇所決壊**
	 乙川 吹矢橋上流 
	 1988 「**音羽米**」栽培・普及／伊藤玲子、沖氏ら 1993 **水とみどりを守る会・岡崎** 設立／沖章枝氏 1996 **岡崎まちづくり市民公社** 設立 1999 **岡崎CDC研究会** 発足 ／市民参加型まちづくり有志グループ 1999 **（有）オフィス・マッチング・モウル** 設立
1990年代～2004	1996.7月 愛知県「**乙川多自然型川づくり計画検討委員会**」発足（東大 **玉井信行** 委員長） 1997 **河川法改正**（河川環境を内部目的化） 1999.2月 愛知県**乙川多自然型川づくり計画** 策定 2000.9月 **東海豪雨災害** 
2005～2014	2005～ **矢作川森の健康診断** 開始（～2014） 2006.1月 **岡崎市・額田町合併**～新岡崎市へ 愛知県 男川ダム計画を河川整備計画から除外 2006. NPO **岡崎まち育てセンター・りた** 設立 2008.3月 岡崎市 **水環境創造プラン** 策定 2008.8月 **平成20年8月末豪雨による甚大な被害** ／伊賀川、乙川、鹿乗川など 8月末豪雨 深夜の岡崎市内   2010.8月 **矢作川流域圏懇談会** 発足 ／岡崎市参画 2011.3月 岡崎市 **森林整備ビジョン** 策定 2013 あいちトリエンナーレ／松應寺横丁会場に 2014～ **唐澤晋平**氏が岡崎市・額田地区に移住
2015～2020	2015 岡崎市「**乙川かわまちづくり**」登録される 2015.5月 **額田木の駅プロジェクト** 開始（開駅） 2016～ **おとがワ！ンダーランド** 開始 2017.11月 愛知県「**海ごみ減らそうフォーラム**」 岡崎市にて開催／矢作川流域圏懇談会の参加 2017.12月 愛知県 第1回**ブラアイチ 岡崎**で開催 2018「乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画」＝**QURUWA戦略** 策定 2018.3月 **奏林舎** 設立／唐澤晋平 2018.6月 **おかざき**（地域）**森の健康診断** 実施 2018.10月 **あいち朝まで川談義** 開催 (菅生神社) 2019.8月 **殿橋洗い**／宮川洋一、岩ケ谷充 2020.3月 岡崎市乙川「桜城橋」完成 9月「**桜城橋ふき**」を開始／宮川洋一 この第1回に渡邉竜一氏が参加する 2021.3月 岡崎市 **水循環総合計画** 策定 （2008 水環境創造プランの改訂） 2021.3月 岡崎市 **森林整備ビジョン** (2011)改訂  
2021～	2021 **OneRiver** 設立 2022.12月～ おとがわ リバークリーンに **海と日本プロジェクト in 愛知県** が参画する  

岡崎市では、行政などが発信するプロジェクトにおいても、実験的なチャレンジが展開されてきたので紹介する。2017年11月に、海のない岡崎市で開催された「**海ごみ減らそうフォーラム**」は、愛知県環境部主催の発信イベントであるが、一般社団法人 **JEAN**（全国）が全面的に協力し、岡崎市、奈佐の浜プロジェクト、ClearWaterProject(**瀬川貴之**さん)、そして矢作川流域圏懇談会が合流、海部会座長の青木伸一教授が総評をしている。

「**歴史と地形から、愛知を知る**」を謳い愛知県建設部局が主体となって始めた、まちあるき「**ブラアイチ**」も岡崎から始まった（2017.12月）。わが**愛知・川の会**と「**あいち橋の会**」を立ち上げる宮川洋一さんが、乙川を舞台として初めてコラボした瞬間でもある。

愛知県建設部、岡崎市、市民などの有志が集まって展開した「**あいち朝まで川談義**」（2018.10月）は、更に斬新だ。乙川河畔の**菅生神社**に様々な人びとが集い、24時間ぶっ通しで語り合い、それをオンラインで全国に中継するというもの。かなりぶっ飛んでいる。

この場には、懇談会山部会の**蔵治**座長や**唐澤夫妻**、後に川部会座長となる中村晋一郎先生（名古屋大学）、伊賀川多自然川づくりにも関わった吉村伸一さん、自然共生研究センターから中村圭吾C長と坂本貴啓さんなどなど多彩なメンバーが顔を揃えた。むろん地元から**天野裕**さん、宮川さんなども多数、駆けつけてくれたのが嬉しい。皆楽しそうである。

岡崎市 乙川、乙川流域アーカイブ

- 海ごみ減らそうフォーラム（2017.11月）／ 愛知県主催 ＆JEAN
- 第1回ブラアイチ in 岡崎（2017.12月）／ 愛知・川の会案内
- あいち朝まで川談義（2018.10月）



海ごみ減らそうフォーラム／愛知県、岡崎市 JEAN主催 ＊懇談会も参加



ブラアイチ岡崎／乙川久後崎切れを説明する愛知・川の会



ブラアイチ岡崎／殿橋を説明する宮川洋一さん











川づくり
アーカイブ

乙川多自然型川づくり計画



「乙川多自然型川づくり計画」というのは、愛知県がこれから本気で「多自然」に取組んでいこうという意気込みを、具体的に示し、どこまで出来るのかを探る「構想」のようなものだと私は捉えていたし、実際県下の河川に関わる職員にとっても大きなカルチャーショックを与えた（当然、真に受けない者もいた）。

1996.7月に計画検討委員会が設立され、東京大学・玉井信行（教授）委員長を始めとして、河川工学から生物分野まで錚々たる顔ぶれが揃えられた（右表）。検討委員会6回、ワークショップ3回の議論は中々凄まじいもので、一回の議論が10時間に及ぶこともあった。概要は県より委託を受けた（財）リバーフロント整備センター報告書にまとめられているが、ここでの池内幸司次長というのは、今や前代113代土木学会会長（東京大学）も担われており、当時は建設省からの出向。昨年、会長として面会した時も、乙川での取組みを懐かしがっておられた。決して社交辞令ではないと思う。



池内幸司さん

表－1　乙川多自然型川づくり計画検討委員会名簿

Table 1　Otogawa River Nature-Oriented River Works Committee Members

氏　名	専　門	所　属
玉井信行	河川工学	東京大学教授
井手久登	生　物	東京大学名誉教授
奥田重俊	生　物	横浜国立大学教授
加藤和弘	生　物	東京大学助教授
河原能久	河川工学	土木研究所主任研究員
北村忠紀	河川工学	京都大学助手(～H9.7)
小出水規行	河川工学	豊橋技術科学大学助手
篠沢健太	景　観	大阪芸術大学講師
白川直樹	河川工学	東京大学助手
高田靖司	生　物	愛知学院大学講師
辻本哲郎	河川工学	名古屋大学教授
冨永晃宏	河川工学	名古屋工業大学教授
中村俊六	河川工学	豊橋技術科学大学教授
東　信行	生　物	弘前大学助教授
細見正明	水　質	東京農工大学教授
水野信彦	生　物	愛媛大学名誉教授

五十音順　敬称略

財団法人 リバーフロント整備センター「乙川多自然型川づくり計画」
報告より抜粋／研究第四部 池内幸司 次長、糸魚川孝榮 主任研究員（当時）







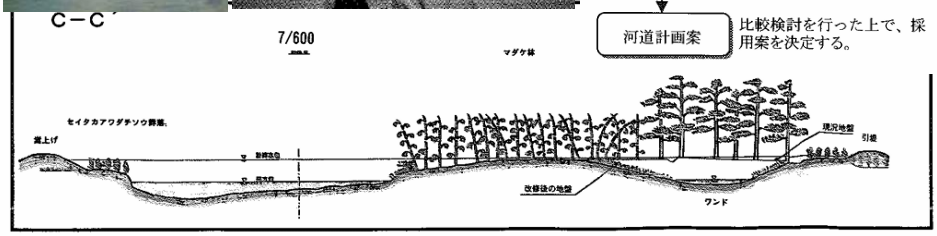


概要と特徴
自然環境・社会環境上の留意点の整理、河川環境をとりまとめた図面の作成を行う。

河道計画案の抽出
複数案のケースを抽出する。

河道計画案の検討
各ケースの水位計算結果、環境への影響などを比較する。

河道計画案
比較検討を行った上で、採用案を決定する。

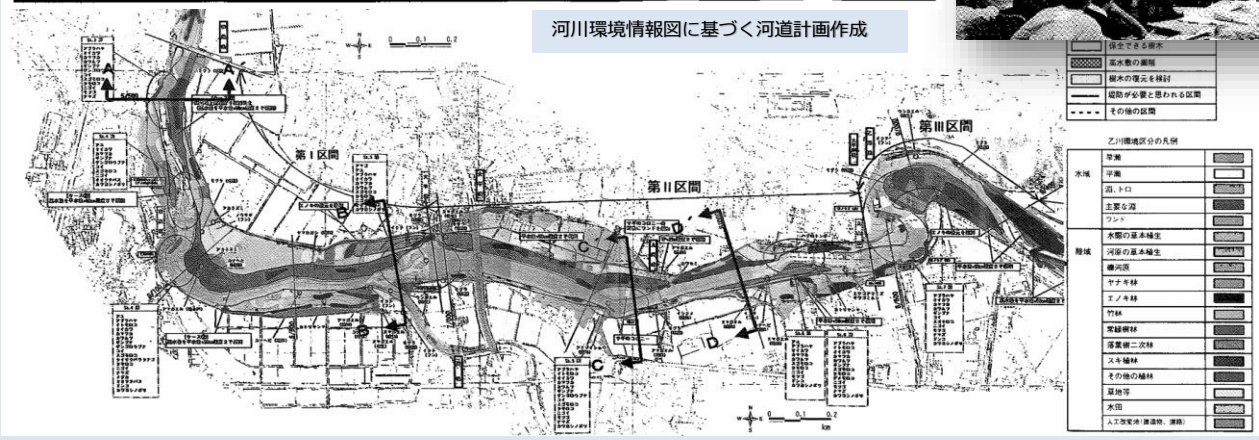




玉井信行 委員長



河川環境情報図に基づく河道計画作成



改めて委員名簿を眺め、白川直樹さんの名前を発見し少し驚いた。ここ10年くらいは毎年、いい川・いい川づくりワークショップでお会いする筑波大学の先生なのであるが、初対面だと思っていた。この時いらっしゃったんだ…。「朝まで川談義」企画した一人、坂本貴啓さんの恩師でもあり、今度会ったら、この乙川の話をしてみたい。

乙川計画検討会でのキーワードとしては、

＃河川環境情報図の活用　＃多様な水域と水際部を可能な限り保全　＃重要な種の生息地保全

＃良好な河畔林・山付林保全　＃保全と復元等代償措置　＃計画・設計、施工、維持管理各段階配慮

などであり、議論に基づいた水位計算・解析をその都度行っていた。水際植生に関して冠水頻度が重要であるという意見が出れば、それも計算する等々、当時としてはかなり画期的だったはず。

これらを踏まえて1999.2月に「**乙川多自然型川づくり計画**」が策定された。

川づくり
アーカイブ

平成20年8月末豪雨後の多自然川づくり

2008年「**平成20年8月末豪雨**」により愛知県、とりわけ岡崎市及びその周辺地域は甚大な災害に襲われ、伊賀川では死者も出ている。その対策として愛知県では「床上浸水対策特別緊急事業」を伊賀川始め、鹿乗川、広田川、占部川、砂川で展開するが、いずれも私がその10年前、岡崎時代(1997-98)に担当していた河川であり、胸が痛んだ。どのような大きな災害であれ「河川が本来有している自然環境や多様な景観の保全・創出、河川の適正な利用等が図られるべし」と、当然ながら多自然川づくりが進められた。特に伊賀川では、多自然川づくりアドバイザーによる助言等も受け、三清橋～瀧見橋間の整備を重視、スタディ模型も活用しながら、多様な空間整備計画を策定、実施していったのである。

伊賀川





伊賀川スタディ模型

「床上事業」は、2016.3月（全体）完工し、伊賀川にも碑が建てられている。なお、この伊賀川は、2018年土木学会デザイン賞 優秀賞を受賞しており、まさに「ステキな川づくり」である。講評として、**萱場祐一**氏、佐々木葉氏から素敵な言葉もいただいているが、これを最も高く評価しているのは、いつもこの水辺で遊んでいる子どもたちではないだろうか。













私自身は愛知県を退職した後（2018～）も、よく乙川を訪れており、少し辿ってみた。アルバムをご覧あれ。

矢作川流域圏懇談会では、流域圏担い手づくり事例集やあるいは山部会において毎年1回は岡崎を舞台としているが、川、市民部会でももっと関わるべきだろうか。2018.8月には初の３部合同部会として、鳥川ホタルや乙川・伊賀川（クルーズ）フィールドワーク含め岡崎を訪れている。

乙川アーカイブ ／ mizube のアルバム 2018～

● 事例集取材、ミズベリング、桜城橋、流域圏懇談会

2018.1月 事例集「りた」天野裕さん取材（りぶら）





2018.2月 ミズベリング セミナー（岡崎市内）

2018.8月 懇談会合同部会（乙川・伊賀川）



2018.10月 乙川殿橋

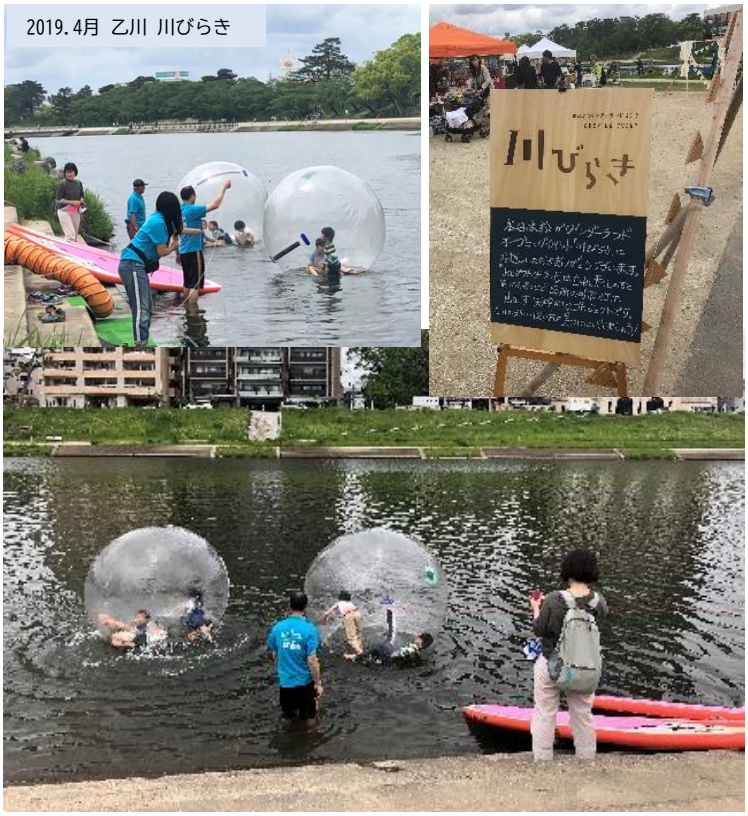


2018.10月 乙川夜景 ナイトマーケット





2019.4月 乙川 川びらき





2024.1月 愛知・川の会 エクスカーション／菱池、鹿乗川、伊賀川（りぶら）



「**桜城橋**」建設の様子も、よく眺めていた。宮川さんが心酔し、岡崎に招聘したという渡邉竜一氏の講演は、私も聞きに行った。公共事業に関わった者としては、感動せざるを得ないと思う。市民も巻き込まなければ。第1回目となる「桜城橋ふき」に、その渡邉さんも来られるというので参加する。ここでたまに行う「橋上勉強会」には、私も「**乙川**」の話をさせてもらったことがあり、これが実は、本稿アーカイブの内容でもある。

2019.8月 殿橋洗い（OneRiver HPより）　岩ケ谷さんの姿も見える



2019.12月 渡邉竜一さん 講演会をりぶらで開催



渡邉竜一氏と出島表門橋

2020.9月 第1回「桜城橋ふき」に渡邉竜一さん来訪



渡邉竜一さん



乙川 桜城橋アーカイブ ／ mizube のアルバム 2018～

● 架橋、供用、殿橋洗い、額田の森に思いを馳せて桜城橋ふき

2018.7月 桜城橋橋脚工事



2018.11月 桜城橋工事



2020.3月 桜城橋完成



2020.3月 桜城橋橋面





2022.1月 桜城橋橋上

魚と子どものネットワーク　新玉拓也さん

三重県亀山市で活動する「魚と子どものネットワーク」代表。滋賀県立大学環境科学部で、環境保全におけるつなぎ役・コーディネーターの役割を学び、名古屋大学大学院環境学研究科では、環境保全の意識・行動について研究。大学在学中から琵琶湖流域で淡水魚調査や自然観察活動に関わる。
＜魚と子どものネットワーク＞
大学院生だった2008年に設立。魚が棲める水環境を保全し、それを次世代に伝えていくことを目的として活動。亀山市が整備した里山公園で里山塾を企画・運営している。河川での取り組みとして「鈴鹿川探検隊」を実施。河口（四日市市）から中流（鈴鹿市）、上流（亀山市）まで、子どもたちと一緒に自然観察や生き物調査に取り組む。その他、企業や行政、学校などの依頼で講座・観察会などを担うことも多い。

取材日　：　2026年3月14日
取材場所：　亀山里山公園「みちくさ」、鈴鹿川中流域
取材者　：　近藤 朗、松沢孝晋、山中祐樹（NPO法人 鈴鹿循環共生パーティー）、浜口美穂
レポート執筆者：浜口美穂



新玉さん
亀山里山公園「みちくさ」にて


鈴鹿市で里山再生事業を行う「鈴鹿循環共生パーティー」の山中さん（左奥）も参加

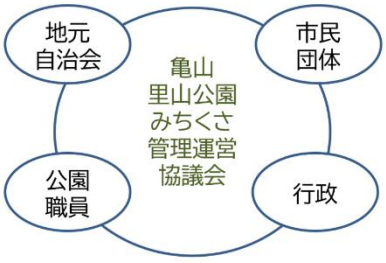
地域　地域に恩返し

生まれ育った地域の自然に育てられたので、お世話になった分、地域の自然が大事にされるよう活動を通して返していきたい。大学時代に学んだコーディネーターの役割や、琵琶湖の環境保全活動の経験を地域に活かしたいと思い、「魚と子どものネットワーク」を立ち上げた。同じようなことに関心を持っていた幼なじみが副代表、中学時代にお世話になった先生に顧問になってもらった。

亀山市が自然公園（里山公園みちくさ）をつくったので、これを使わない手はないと思って「ここを拠点にします」と宣言。最初は年数回イベントをするだけだったが、2011年に市に働きかけて「亀山里山公園みちくさ管理運営協議会*1」を発足し、市や地元で活動する団体、周辺の自治会と一緒に公園管理と里山塾を運営する枠組みをつくった。魚と子どものネットワークとしては、副代表が協議会の会長を務め、里山塾や各種イベントのコーディネーターなど、中心的な役割を担っている。

地域の人に知ってもらうために、地域や学校関連の行事などに出ていって、生き物調査の結果を発表したり、水槽を展示して地域にこんな生き物がいるよと解説したり、できる限りの発信をしている。

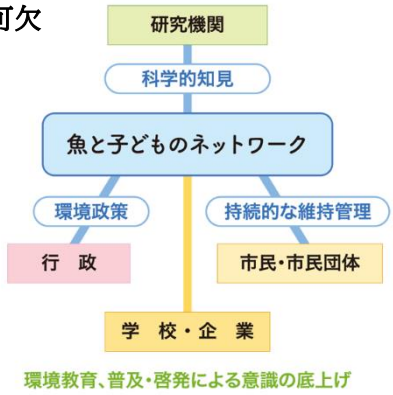

魚と子どものネットワークが担当する里山塾での池干し体験
（写真提供：新玉拓也）



魚と子どものネットワークHPより

＊1 協議会構成員
・魚と子どものネットワーク　・亀山の自然環境を愛する会　・亀山市自然に親しむ会
・三重北部の昆虫を調べる会　・鳴く生き物を調べる会　・windsoil

コーディネーター　活動を広げるには「つなぎ役」が必要不可欠



魚と子どものネットワークHPより

大学での卒業研究などを通し、琵琶湖の環境保全活動に深く関わる中で、生き物を守っていくには行政、博物館、研究者、市民など様々な分野の連携が必要で、そのためには「つなぎ役」「コーディネーター」の役割が欠かせないということを目の当たりにした。だから、団体をつくった当初から自分たちが地域でその役割をしようと意識してきた。「魚が棲める水環境を保全する」「地域の自然の魅力を次世代に伝える」「活動を推進するためのコーディネーターの役割を担う」という3つを柱として活動を始めた。

世代　●各世代の強みを生かして連携

2019年に、地域の水辺の活動で連携していた団体（鈴鹿・亀山地域親水団体連携体：亀山の自然環境を愛する会、水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座、魚と子どものネットワーク）として、「日本自然保護大賞2019 教育普及部門」を受賞。その受賞理由が、世代の異なる3団体の連携だった。

若い世代は体力もアイデアも豊富で実働部隊として、中堅世代は行政や地域とのつながりが強いので様々な調整役として、定年後の高齢世代は平日から動ける利点も生かし学校を巻き込んだ活動を行うなど、自ずと実施してきた役割分担が評価された。

各世代の役割分担　（資料提供：新玉拓也）

	○70代 亀山の自然環境を愛する会	○50代 水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座	○30代以下 魚と子どものネットワーク
Keywords	地域密着 学校との連携 平日OK	行政のつながり 地域のつながり マスコミ対応	自由な発想 行動力 研究機関との連携
主な役割	地域の状況把握 学校の授業対応 準備や会議	行政との調整 地域との調整 マスコミへ発信	今までにない取組み イベントの企画・広報 研究の知見を反映

⇒多世代が協力し合うことで、それぞれの世代の活動の幅が広がる！

14

●世代をつなげる努力

地域で長く活動してきた先輩グループと連携するにあたっては、自分たちはフットワークが軽いので先輩たちを手伝うのは当たり前だと思っていた。また、すでにたくさんのネットワークを持っている方々とつながることで、自分たちの活動も多くの方に知ってもらいたいという思いもあったので、お互いにwin-winの関係。

世代間の対立があっても、活動以外でもゆっくり話す場を設けたり、総会の後はみんなでご飯を食べに行ったりと、みんなで思いを一つにすることを心がけていたのでやってこられた。大切にしていることは「**敬意と感謝の気持ちを持って**」ということ。足りない部分を補い合うことで強い組織になると思っている。

●次の世代に伝える～「魚と子どもKidsクラブ」の誕生

受賞を機に、かねてから構想を描いていた「魚と子どもKidsクラブ」を設立。「次の世代に伝える」ことに、より力を入れ出した。活動に熱心に参加していた中学生にリーダーを任せてスタート。「子どもが自然にふれる機会を増やす」「次世代のリーダーを育てる」という2つの目標を掲げている。子どもたち自身にやりたいことを考えてもらったり、生き物調査の解説を任せたり、環境イベントで発表してもらったりと、活躍の場をつくっている。Kidsクラブ内でも世代が継承されており、現在は2代目がリーダー※2を務めている。

里山塾などの講座に参加していた子どもたちが、今、大学生や社会人になっていて、スタッフとして手伝ってくれたり、地元を離れていてもSNSで発信してくれたりと、つながりながら育ってくれている。もっと積極的に活動し、次の世代の担い手を育てるとともに裾野を広げていきたいと思っている。**何をするにも「人」がいちばん大事**だと思っているので、呼びかけや募集は継続的に行っている。

＊2　このリーダーは現在、ネコギギを20年以上調査し続けている鈴鹿高校「自然科学部」でも活躍。同部は魚と子どものネットワークとも連携を取り、一緒に活動することもある。

流域　上流から河口まで「鈴鹿川探検隊」

鈴鹿川は流域38㎞、上流の亀山市から鈴鹿市を経て、四日市市で伊勢湾に注いでいる。もともと里山塾のフィールドとして里山公園との違いを観察する講座で年に一度出向いていたが、2020年から「鈴鹿川探検隊」として本格的に始動。5月、河口（四日市市）を皮切りに、中流（鈴鹿市）、上流（亀山市）と遡り、年6回程度、川の清掃と生き物観察をメインに活動している。

5年継続してやってきて軸はできたので、これからはほかの団体とコラボすることにもチャレンジ。2026年2月の「鈴鹿川探検隊～冬の川の生き物を調べてみよう！～」では、鈴鹿川と関係が深い忍山神社で地域の歴史と文化の話を聞いたり、「かめやま防災ネットワーク」との連携で炊き出しや防災の話を聞いたりするなど、まちづくりの視点から川を考える取り組みも行った。





鈴鹿川中流域（亀山市）。冬にもしっかりと生き物が棲息していることを知ってほしいと、毎年2月にここで観察会をしている

まちづくり　生物多様性を守る制度づくりにも関わる

2023年度から「かめやま生物多様性共生区域認定制度」の運用が始まり、その審査会委員を務めている。貴重な自然があって市民が守っていきたい場所を認定し、その場所で行われている活動を支援する制度。登録するだけはメリットがないので、かめやま文化年のエコツアーと絡めたり、キャンプ場との連携イベントとして認定先を訪れる企画もしている。事業者も協力してくれる制度になればいいなと思っている。

2025年度からは、亀山市総合計画審議会委員の委嘱（教育委員会や農業委員会と横並びの「市長が必要と認める者」として）を受け、市に対して「生物多様性保全における部署間の連携」や、「環境教育を学校教育の中に位置付けること」などを提言し、一部は計画にも反映されている。実務ベースと政策ベースと並行して関われるようになり、少しずつ形になってきたと思う。

地域の自然と生き物が末長く大事にされるように、団体としても市の仕組みとしても、その流れをつくっていきたい。



← 大学院で政策と人の意識・行動の関わりを学んだ新玉さん。修士論文では、琵琶湖の環境保全活動において何が行動の要因になっているのかを調査。身近な人からの呼びかけや、シンボル的な生き物の存在も行動の大きなきっかけになっていたという。
鈴鹿川流域の“推し”はヤリタナゴとカワバタモロコ。ポストカードやシールなどを作って配布している



→ 右端が鈴鹿循環共生パーティーの山中さん。「河口の四日市とは地元団体主催の海岸清掃に参加するなど連携の機会があるが、鈴鹿市の団体とは交流がないので、ぽっかり空いた中流域が気になっていた」と新玉さん。流域でつながる今後の連携が期待できる

藤前干潟を守る会　　戸苅辰弥さん・梅村幸稔さん

戸苅辰弥さん



「NPO法人 藤前干潟を守る会」理事。20～30年前には、藤前干潟の上流部にあたる海上の森で「海上の森哺乳類研究会」の代表として調査活動などを行っていた。現在は、藤前干潟活動センター、稲永ビジターセンターのスタッフとして活動している。

梅村幸稔さん



「NPO法人 藤前干潟を守る会」副理事長。フリーランス野生鳥獣調査員。小学4年生の頃から藤前干潟に魅せられ通っていた。ガタレンジャー養成講座の講師として人材育成を担っている。

＜藤前干潟を守る会＞

伊勢湾の最奥部、新川と庄内川河口にわずかに残った干潟に名古屋市のごみ埋立処分場計画が発表されたのは1984年。それに対して野鳥愛好家を中心に1987年「名古屋港の干潟を守る連絡会」が結成され、1991年には「藤前干潟を守る会」と改称。署名活動、独自の環境調査、観察会などにより干潟の重要性を発信。1999年1月に名古屋市が埋め立てを断念し、藤前干潟が守られてからは、干潟の素晴らしさを伝えるため、干潟体感プログラム「干潟の学校」の開催、干潟の案内人「ガタレンジャー」を養成する講座を開いている。2002年11月のラムサール条約登録を経て、2005年から環境省がつくった稲永ビジターセンターと藤前干潟活動センターの管理・運営を委託されている。

取材日　：　2026年3月20日
取材場所：　藤前干潟活動センター
取材者　：　近藤 朗、洲崎燈子、三ツ松由有子、
　　曽我部行子、松沢孝晋、浜口美穂
レポート執筆者：曽我部行子、浜口美穂

※ 藤前干潟をめぐる動き

1984年	名古屋市がごみ埋立処分場計画を発表
1987年	「名古屋港の干潟を守る連絡会」結成
1991年	「藤前干潟を守る会」に改称
1998年12月	環境庁（当時）が埋め立て不承認
1999年1月	名古屋市が埋め立て断念
同年2月	名古屋市ごみ非常事態宣言
2000年8月	名古屋市でプラスチック製・紙製容器包装の新収集が始まり、ごみ減量に成果を上げる（藤前干潟が循環型社会を目指す原点になる）
2002年11月	ラムサール条約湿地に登録される
	守る会が「ガタレンジャー」養成講座を開始
2003年7月	守る会がNPO法人に
2005年3月	環境省「稲永ビジターセンター」「藤前活動センター（現・藤前干潟活動センター）」開館
	藤前干潟協議会設立
2009年	ガタレンジャーJr.プログラム開始
2010年10月	COP10の公式エクスカーションのコースの一つになる
2024年4月	「藤前干潟ユース」が誕生
2025年1月	名古屋市が「ラムサール条約湿地都市」として認証される（国内3番目）

●藤前干潟の拠点施設

2002年11月、藤前干潟は水鳥の生息地として国際的に重要な湿地と認められ、ラムサール条約に登録された。その頃から、干潟の保全だけでなく、その活用についても、環境省・環境保護団体・地域住民などの間で議論が進められ、2005年3月、環境省の施設として2つの環境学習の拠点が誕生した*1。藤前干潟の基本的な情報を発信する「稲永（いなえ）ビジターセンター」と体験学習の場となる「藤前活動センター（現在は藤前干潟活動センター）」。当初から「藤前干潟を守る会」が環境省から管理・運営を委託され、各施設2名のスタッフが常駐し、施設管理や来館者の案内・展示物の制作などを行っている。守る会の独自企画となる干潟体感プログラム「干潟の学校」は、活動センターをベースに開催。立場上、利用団体として申請しているが、管理者でもあるため、自由度が高いというメリットはある。

*1　2つのセンターのオープンと同時に、藤前干潟に関わる行政（事務局：環境省、国交省、県、市）、NPO（守る会、東海・稲永ネットワーク）、地元住民、学識経験者が集まり、藤前干潟の保全と活用について話し合う「藤前干潟協議会」を設立。毎月会議を開き、情報共有を行っている。釣りごみ清掃活動は守る会が提案し、協議会のイベントとして定着している。

●干潟の案内人「ガタレンジャー」の養成



ガタレンジャーの養成は、ラムサール条約に登録されたときに、干潟を訪れた人を案内できる人が必要だということで守る会が2002年から始めた（対象は高校生以上）。当初は、毎月の観察会が終わった後に近くの藤前会館に集まり、鳥類や底生生物、歴史や流域などについて2～3時間の学習会を行っていた。12回講習を受けたらガタレンジャーに認定、登録するという形。その後、2日間の講習会を年に2回実施して認定する形になり、現在まで続いている。当初の内容にプラスして救命救急やリスクマネジメントなども教えるようになった。

2009年からはガタレンジャーJr.プログラムという子ども向け（小学4年生～中学生対象）の活動も開始。2カ月に1回程度（5月には1泊2日のキャンプ）、五感を使って自然を発見する体感学習を行っている。ここで育った子どもたちが、正規のガタレンジャーになってガイド業務を行うなど、次世代育成の場となっている。また、ジュニアの親がガタレンジャー養成講座を受講したり、守る会の活動に参加したりすることも増えてきた。

現在、約160名のガタレンジャーが登録されているが、守る会の活動に継続的に参加する人は限られている。また学校の観察会など、平日に動ける人がいないのも課題。ただ、活動センターという場が、新たな人が繋がる入り口として機能しているのは大きな強みでもある。

●藤前干潟ユースの誕生

ガタレンジャーjr.の中から大学生・社会人に育った若者が、自ら動けるプログラムをしたいと2024年4月に「藤前干潟ユース」を結成した。ちょうどラムサール会議でもユースの活動が重要視されたタイミングだった。また守る会は2008年からSOMPO環境財団が実施しているCSOラーニング制度の大学生インターンの受け入れ団体になっており、そこからガタレンジャーになったり、藤前干潟を守る会のバイト募集から繋がった学生などもいる。

現在は、15歳（中学生を除く）～35歳の約20人が所属。魚類調査など「調査研究」、勉強会や子どもたちへの環境教育・普及啓発イベントなどを行う「ラムサール条約CEPA活動*2」、これまで築いてきた伝統と活動を受け継ぐ「事業の継承」を柱に活動を行っている。ユースのメンバーの中には、ガタレンジャーになり、観察会のスタッフなどを務めている者もいる。このユースの活動もあって、最近は守る会の活動に若者の参加が増えている。

また、名古屋市が2025年1月に「ラムサール条約湿地都市」に認証されたこともあり、藤前干潟ユースを立ち上げたメンバーが主体となり、なごや環境大学の中に「ユース提案型　湿地の未来プロジェクト」が誕生し活動を始めた。藤前干潟をはじめ市内の湿地全般を対象に今後も活動していく。

*2 ラムサール条約CEPA（セパ）活動・・・ラムサール条約が掲げる「対話・教育・参加・普及啓発（Communication,Education,Participation,Awareness）」の頭文字をとったもの。

●干潟を取り巻く環境の変化

泥だった干潟が砂っぽくなってきて、生き物の多様性が乏しくなっている。2000年以降、減少している生き物もおり、特にヤマトカワゴカイが激減した。東海豪雨後、県が新川の浚渫を行って川床を下げたことで流量が増え、潮の流れも速くなったと考えられる。泥は粒子が細かく軽いため、引き潮の際に河口で溜まらず流されている可能性がある。また、上流からの土砂の供給も減っている可能性もある。浚渫は、潮が満ちる際の流れにも影響し、全体に塩分濃度が上がっていると考えられる。

干潟の形もかなり変わった。きれいな三角に近い形だったが、新川河口のサイドがかなり削られて西に偏った形になっている。ただ干潟は途中の経過の状態。放っておけば土砂が溜まり、大雨が降れば表面が削られる。その繰り返しなので、ある程度長いスパンで見ていかなければならない環境ではある。

訪れる人も変わってきた。埋め立て計画があった頃は保全活動関係者ばかりだったが、今は、一般の人たちが多数訪れ、景観や野鳥を楽しんでいる。それだけ藤前干潟は人々に知られる場所になった。

●流域圏を見据えて

庄内川と新川が流れ込んで形成される藤前干潟。戸苅さんは、1990年代、庄内川・矢田川の上流である海上の森で哺乳類の専門家として調査活動を行っていた。海上の森が守られた後に、最下流である藤前干潟へ。あれから20年以上が経ち、変化する海上の森と藤前干潟。「流域まるごとラムサール」、さらには「伊勢三河湾流域圏の環境再生」を目指していた守る会前代表の辻淳夫さんの想いは次世代に託されている。

海上の森から藤前干潟へ

上流（海上の森）～中流域（矢田川・庄内川）～下流（藤前干潟）

曽我部行子

今回、「藤前干潟を守る会」の戸苅さんを取材して、1990年から2000年までの海上の森市民調査の始まりを思い出しました。

市民による保全活動は、環境アセスメント調査が始まる前に、海上の森がどんな場所でどれほど多様な生き物が生息するところなのかを示すため、まず、植物相・動物相・文化財までを調査して報告書にまとめる作業から始まりました。これは、場所を残そうとする科学的な反対運動ですが、知識を持っている人がいなければ不可能です。調査が可能な知識を持つ人の一人が戸苅さんでした。

戸苅さんが費やした時間と労力と知見は、しかし、海上の森へと繋がることはありませんでした。2006年、守られた海上の森を、愛知県森林保全課の出先である「あいち海上の森センター」が管理することになったとき、戸苅さんは採用されなかったからです。そのことが、戸苅さんを最下流の藤前干潟に向かわせることになりました。森の人が海の人になって、学ぶことは一からだったでしょう。でも、それは考えれば稀有で貴重なことです。藤前干潟の埋め立て問題がピークだったころ、代表の辻淳夫さんが、通信に書いておられて知ったフルボ酸鉄こそ、森と海を結ぶ見えないけれど繋ぐ連絡網です。落葉樹が生み出す物質が海の豊潤をもたらす事実は、わくわくすることでした。

住民は住んでいる場所近くの川のあり方や川の中の生き物については関心がないとしても、子どもを川に入れてガサガサに付き合えば、川の中にも世界があることを否応なく知ることになります。上流にオニヤンマが産卵する湿地があり、モクズガニが見つかれば、それは、海が森に繋がっている証拠です。

干潟の海の水を顕微鏡で覗けば、様々なプランクトンが目撃できます。海上の森の砂礫層地域には石ころチャートがごろごろしています。チャートの祖先はプランクトンが何百万年にもわたって雪のように1000年に1ミリメートルまた1ミリメートルと海底に降り積もって硬い石になったというのです。ほんとうなら、今も、海上の森は海に確かに繋がっていることになります。

取材しながら、わたしは、つい自分のフィールドである海上の森の現状の共通点と違いを比較していました。

森は、住民の営みがない里山による夏緑広葉樹の遷移によって、春に必ず見られたギフチョウが見られなくなり、湿地が陸化しています。干潟は、泥干潟が砂干潟へと変化しカタチを変えてきて、ゴカイやアナジャコが減っているそうです。それは、人的に解決するものではなく、里山は人的な力で解決することができるのにできていないという違いがあります。どちらも、環境の変化は、待ったなしです。しかし、それを診ていくしかありません。保全され残った後こそが課題の出発だと知りました。

何より希望を見いだすのは、藤前干潟ガタレンジャーの存在です。海上の森には、ユースを誘い育む装置はありません。学ぶべき最大の羨ましい取り組みです。

さらに言えば、「藤前干潟活動センター」が環境省から守る会に管理・運営を委託されているために活動する自由度が高いという点のメリットです。自由度とは、市民目線と市民頭をフル回転させて動くチャンスがあるということです。それに比べ、海上の森の管理は行政マター―なので、そこにNPO法人「海上の森の会」が協働という名でいたとしても、会に行政管理に口を出すほどの意欲と能力がない限り、小作人のような存在になりがちです。

さて、森と干潟を繋ぐ間の中流域はどうなっているのでしょうか。愛知万博が愛地球博と名称を変えて開催が決定した後、「だれでもばんぱく協会」という奇妙で熱い市民団体がありました。熱烈な万博開催賛成派の谷岡郁子さん（当時、中京女子大学長）と万博反対派と目されていたわたしが手を組んで、開催するなら環境博と市民博にする万博でありたいと動いた結果でした。その一つとして、2000年「万歩く（ばんぽく）」と称して約42キロメートルのマラソンコース距離に匹敵する海上の森から藤前干潟へと歩くイベントを企画しました。下見をしたのが寒い2月だったことで、矢田川から川沿いを歩くのは過酷を極め、これは無理だと断念し、結局、上流からと河口から歩き始めて庄内川の中間地点で合流することで妥協しました。歩いてわかったのは、名古屋市の都市の辺りは、河川敷を歩ける見晴らしのいい歩き安いコースですが、上流域は最初の間だけで、後の川沿いは道が整備されておらず、川に沿うことを諦めて迂回するしかなかったのです。川に近づくことができない距離の長かったことを思い出します。*3

*3 豊田市矢作川研究所の月報（2004年7月）には、「万歩く」から続くエコストックの記事が掲載されています。
https://www.yahagigawa.jp/archives/003/201509/325b47da6705cdc58b9a57832ebbb32c.pdf

こうして考えると、流域の保全とは何が課題なのかぼんやりとですが見えてきます。
森（里山）の課題、川・中流域の課題、河口干潟の課題。それぞれの課題が何なのかを洗い出し、人が自然を食い物にするのではなく、恩恵を受け続ける道を探るしかありません。ただし、一番重要なのは、人が生き生きと楽しんでいることです。「万歩く（ばんぽく）」やエコストックのテーマは子どもたちに、「大人になることは怖くない、大人だって真剣に遊ぶよ！」という背中を見せることでした。
さて、流域を自由でユーモアのあるトコロにすることはできるでしょうか。



第２章

森の大学 ～山から繋ぐ～



根羽村から／森とまちの流域学

矢作川の源流域に位置する根羽村。人口約800人の小さな村では森林面積が村の９割を占め、林業が中心産業となっています。村の森林資源・自然資源を活かして根羽村の地域活性化に取り組むみなさんの活動を取材しました。

取材日　：　2026年3月
取材場所：　根羽村役場、根羽村森林組合、ハッピーマウンテン
取材者　：　小池時広、近藤朗、三ツ松由有子、服部大輔、可兒日和
レポート執筆者：小池時広







根羽村役場の鈴木総務課長と戸谷さん

nebane代表の杉山さん

根羽村取材１：根羽村役場の鈴木秀和さん・戸谷亮太さん、nebane代表の杉山泰彦さん

長野県の南端にある根羽村。山に囲まれ、空気が澄み、水がとてもきれいな村だ。人口は800人足らず。この小さな村から、川の上流から海までをひとつにつなぐ「nebaneプロジェクト」という面白い動きが生まれている。
「難しいことをやっているように見えるけど、実はすごくシンプルなんです」と笑いながら話すのは、nebane代表の杉山さん。
「水って、勝手につながっていくじゃないですか。じゃあ、人ももっと素直につながってもいいんじゃないかなと思って。」
その言葉どおり、nebaneプロジェクトは、“流域まるごとをひとつのコミュニティとして見てみよう”というとても自然な発想から始まっている。

■ 森は「村だけのもの」じゃなくて、みんなのもの

根羽村の約90％は森林だ。
その森からしみ出す水は、矢作川へ流れ、中流の町や下流の海へと運ばれていく。
実は、この水のおかげで下流の農業や工業、暮らしが成り立っている。けれど、森を守っているのは、ほぼ根羽村の人たちだけだ。
「この森は、下流の人たちの暮らしにもつながってる。だから“みんなの森”なんですよね」と、根羽村役場の鈴木さん・戸谷さん。
それを上流だけで守るには限界がある。その気づきが、流域全体で森を考えるきっかけになった。

■ 森を「使う」じゃなくて、「楽しむ」ことでつながる

nebaneプロジェクトがユニークなのは、森との関わりを“真面目な保全活動”だけにしないことだ。
たとえば……
杉から糸をつくって編んだ「木の糸ジャケット」
ヒノキの香りが広がるチョコレート
クロモジとニオイコブシを使った生キャラメル
大径木を上流・中流・下流に置いて乾き方を比べる実験
まるで文化祭の準備みたいに、楽しそうな企画が次々と生まれている。



木の糸製品

「森って、ちょっとハードルが高いでしょ。でも、食べたり、着たり、香りで楽しんだりすると、急に身近になるんです」
そんな関わり方が面白くて、都会の企業や学生も村へ足を運ぶようになった。


ヒノキの香りのチョコレート

■ 「実際に触れたら、心が動く」――流域を身体で感じる

nebaneプロジェクトには、もうひとつ大事な考え方がある。
それが“身体知”だ。
「源流の冷たい水に手を入れたり、海でゴミを拾ったり……。自分の体でつながりを感じると、理屈よりずっと深く心に残るんです」
昨年、愛知県西尾市の“塩田体験館”に行き、“源流から海まで”をめぐる体験ツアーを行った。
森を歩き、川沿いを進み、最後に海へ辿り着く。
その中で流域の結びつきを強く感じたそうだ。
「難しく考えず、人が自然につながれる仕組みをつくりたいんです。
流域って、仲間が見つかりやすい場所なんですよ。」
体験は人を変える。
だからこそ、nebaneの活動には“感じる”場がたくさん用意されている。

■ 行政も企業も「一緒に考える」関係へ

プロジェクトの広がりは、行政にも波及している。
根羽村がつくった水源の森の未来図は、15年後の森の姿を共有するためのものだ。
「立場が違えば、見える景色も違う。でも、同じ地図を持てたことで、みなさんとの対話がすごく前向きになったんです。」（戸谷さん）
企業も変わり始めた。
CSR（社会貢献）だけではなく、「自分たちの未来のために上流と関わりたい」という動きが増えている。
新卒研修として根羽村を訪れた企業は森での体験に大きな手ごたえを感じ、翌年も研修を依頼したという。

■ 小さな村の活動が、流れるように広がっていく

nebaneプロジェクトには、派手なことはない。
でも、川の流れのように、じわじわと確実に広がっている。
源流の村で感じた小さな気づきが、
やがて下流の人の心を動かし、
川のように流域へとつながっていく。
そんな“ゆるやかだけど強い”つながりが、ここ根羽村で育ちつつある。
流域で生きるということ。
その意味を考える旅は、これからもっと面白くなっていきそうだ。



NebaneプロジェクトのHP

根羽村取材2：根羽村森林組合の大久保裕貴さん

次に、根羽村森林組合の大久保裕貴さんにお話を伺いました。根羽村の主な産業は林業関係です。その現状と課題についてお話を伺いました。



長野県南部、山あいの静かな空気が広がる根羽村。その中心で長く森と向き合ってきたのが、**根羽村森林組合**です。規模は小さくても、地域の暮らしに深く根差し、下流域とのつながりを大切にしてきました。今回お話を伺った大久保さんは、森の現場で働く人の息づかいを知りながら、森と人の関係をもう一度丁寧に紡ごうとしている方です。

大久保さんがインタビューの序盤から繰り返していたのは、「上流と下流が互いをよく知ること」の大切さでした。木材利用だけでは見えてこない、森の背景にある物語。木がどんな森で育ち、どんな人たちの手によって山が守られているのか――その部分が伝わって初めて、木は“素材”以上の価値を持つといいます。

「地域材だから、だけではなかなか心に届かないんです。森の時間や人の思いが見えて、ようやく共感してもらえるんですよ」と大久保さんは穏やかに語ってくれました。

最近は、企業や市民から「森で何かしてみたい」という相談が増えているそうです。組合は小規模ゆえに動きやすく、できる限り断らずに受け入れてきました。森を案内するところから始まり、一緒にアイデアが生まれて小さなコラボレーションにつながったこともあります。環境配慮型のチェーンソーオイルを使う取り組みなど、組合の姿勢は“できる範囲で丁寧に挑戦する”という言葉がよく似合います。

さらに、信州大学と協力しながら、森を用途に応じて区分する「ゾーニング」の検討も進めています。木を出す山、環境を優先して静かに育てる山、人が入りやすい山……。補助金に頼りきらず、森が長く続いていくための仕組みづくりを、ゆっくりと、しかし確実に進めている最中です。

一方で、山を取り巻く課題も増えています。山主の高齢化が進み、かつて自分の手で木を植えた世代から、山への思いが薄い世代への移行が進む中、「山を手放したい」と考える人が増えているとのこと。「このままでは森が続かない」という危機感を、大久保さんは率直に話してくれました。

そんな中で心強い存在となっているのが、下流である安城市との長年の交流です。水源地として根羽村を訪れる人が続き、森を見る目が育っていくことが、上流側の大きな励みになっているといいます。森は水や暮らしを支え、その価値は上流だけでは完結しません。だからこそ、「来てくれること自体が本当に嬉しい」と大久保さんはほほえみます。

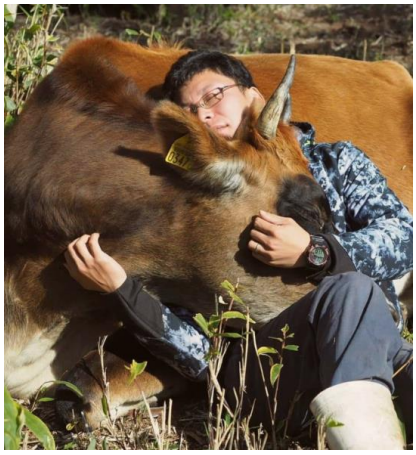
最後に、大久保さんは優しい口調でこう語りました。

「この地域が、誰かが挑戦したくなる場所になればいいと思うんです。森って、本当は面白い場所なんですよ。」

学生や若い人たちが訪れ、体験し、地域と関わる。その積み重ねが、森の未来を支える大きな力になります。上流と下流、それぞれが相手を知り、助け合う関係が少しずつ育まれ、根羽村から新しい森の物語が静かに広がり始めています。

根羽村取材３：ハッピーマウンテンの幸山明良さん

最後に、ハッピーマウンテンの幸山さんにお話を伺いました。幸山さんは山地酪農と呼ばれる自然の中で牛を放牧する飼育方法で、山の環境保全と牛の飼育を両立させようとしています。また、幸山さんの「百姓的な生き方」は田舎のサステナブルな生き方を教えてくれるようでした。



山あいの牧場で、牛の世話から森の手入れ、そして地域のお手伝いまで――。幸山さんの毎日は、ひとことで言えば「百姓的」。ひとつの職業にしばられず、好きなこと・必要なことを重ねながら暮らしている。

大学では農業経済を学び、その後は牧場で働いた。そこで乳製品づくりから電気・土木まで、さまざまな技術を身につけたという。「頼むとお金がかかるから、自分でできるようになっただけですよ」と笑う。しかし同時に、組織で働く中で感じた“利益優先の窮屈さ”が、独立を意識する理由にもなった。「自分を変えてまで組織に合わせるのはしんどかったんです。」

独立後は“山地酪農”を掲げたが、やってみると課題は山積み。ただ、「人が手を入れたほうが自然環境の回復は早い」と幸山さんは語る。今では牛飼いだけでなく、地域の“なんでも屋”としても知られている。重い荷物を運んだり、車を出したり、ちょっとした頼まれごとに応えることで自然と信頼が生まれ、仕事になっていった。

「信頼って、一緒に時間を過ごすところから始まるんですよね。」

祭りに参加したり、お茶を飲んだり、何気ない時間の積み重ねが、困った時の「お願いしやすさ」につながるのだという。

また、幸山さんが特に手をかけているのが森の手入れだ。お金にはならないが、「数十年後の景色を想像しながら作業するのが楽しい」と目を細める。“稼ぐことが目的”ではなく、自分にとっての本当の目的を大切にしている。



幸山さんが狩猟でとったシカ

「お金は手段。生き方の軸は、自分が何をしたいか、どんな風に暮らしたいか。」そう語る姿は、やわらかいけれど、芯のある強さを持っている。

多くの仕事を少しずつこなしながら、地域の人とゆるやかにつながり、森と牛とともに過ごす日々。幸山さんの暮らしは、“好きなことを組み合わせて生きる”という新しい働き方の形を、ゆっくりと教えてくれる。



幸山さんの多様な活動

（左上）キノコ栽培
（右上）山地酪農、牧場見学
（左下）苔を飼育し苔テラリウムに
（右下）ゲルテントに宿泊もできる

幸山さんは多様な活動の中から“稼げること”と“好きなこと”のバランスをとっている

若者よ
森へ行こう！

学生たちも参加した根羽村取材
～ そこから何が生まれたのか ～

地域の未来・志援センター　近藤 朗


2026.3/7 根羽村で山地酪農を展開する幸山さんに話を伺う

今回の根羽村取材には、未来創造プログラム森班（103頁参照）で合宿企画を担う学生たち2名も参加している。彼らがそこで何を感じ、その後どうしたのか、についても少し記録しておきたいと思う。何かにインスパイアされたのは確かであろう。通常夏休み中に行う「森の合宿」ではあるが、その前にプレ企画として、根羽村での合宿もやりたいと提案し、その調整と仲間集めに動き出した。取材に行けなかった人間環境大学生も改めて幸山さんを訪ね、話を聞きに行った女子もいる。

結果として2026年6月13～14日にかけて、山地酪農と森を学ぶ合宿を信大生や岐阜大OB含め20名規模で実施した。鶏を自ら殺し食べる、丸太を全員で協力しながら山から搬出する、森で寝泊まりする等の体験を通して彼らは何を学んだのだろうか。ご協力いただいたハッピーマウンテン・幸山明良さんには深く感謝する。


幸山さんに取材する小池さんと学生たち


根羽村森林組合 大久保裕貴さんへの取材




2026.6/13～6/14 根羽村ハッピーマウンテン合宿

この合宿終了後に、みんなで隣村の平谷村へと向かいソフトクリームを食べに行く。このペアツリーファームカフェというのは、今や未来創造プログラムでも馴染みの店である（右写真は2024.8月の信州大学生打合せ風景）。ペアツリーファームでは、林直秀・茜さん夫妻が幸山さんとは違った形での「山地酪農」を展開しており（74頁参照）、それを聞いて学生たちの目は爛々と輝いていた。夏の本番合宿は平谷村で行うことになるのかもしれない。


信州大学 牧野さん、渡邊さん



ペアツリーファームHPより

平谷村から／少ない人口を強みに

西川清海村長
林直秀さん・茜さんご夫妻

平谷村長。令和7年2月5日から二期目の村政を担う。公約に子育て支援や教育の充実、若者が地域に定着できるような支援などを掲げている。

取材日　：　2026年5月7日
取材場所：　平谷村役場 応接室、ペアツリーファームカフェ
　　（長野県下伊那郡平谷村354、平谷村302-1）
取材者　：　野田賢司、宇角佳笑
レポート執筆者：野田賢司



西川清海 平谷村長



西川村長と取材者（左・宇角）、背後の置物は上下流交流の一端を示す安城の桜井凧など

取材者らは「人口減少最先進地の生き方」をテーマに平谷村役場を訪れた。西川清海平谷村長は、応接室に招き、高原の自然環境と山里の資源を活かし人材育成に特化した観光立村づくり戦略のアウトラインを語った。

1．平谷村にようこそ

平谷村は矢作川の最上流、長野県南端にある人口約370人の小さな高原の村である。役場は標高922m。村の面積は77.37km²、その94.83%が林野である。構造谷の山麓緩傾斜地から川沿いの段丘面と沖積低地に農地が1.71%ある。村の中心部はなだらかな山々に囲まれ昔の伊那街道（別名 三州街道）名残の景観もある。村境に4つの峠がある。国道418号の平谷峠（標高1,160m、売木村境）、ヤハズ峠（標高1,154m。根羽村小戸名境）、国道153号の赤坂峠（標高969m、根羽村境）と治部坂峠（標高1,187m、阿智村（旧浪合村）境、天竜川水系と矢作川水系を隔て伊那街道の最高地点）である。下流の都市から自動車で2時間程で来ることができる。

年間降水量は約2,600mm、最多月が7月で約360mm。年間平均気温は9.3℃。夏の最高気温は8月28℃近く、冬の最低気温は1月－8℃近い（気象庁・浪合1991～2020年観測値）。昼夜の寒暖差と年較差が大きい。冷涼な高原性気候で夏の涼しさは格別である。山地は緩傾斜で木材の伐採・搬出はし易く、良材は昭和初めに切り尽された。今は枝が茂って伐採し難い。山々に湧水があり、平谷川とその支川は谷頭からの距離が短く、水が清冽でほぼ濁らない。冷水性のイワナ・アマゴ（アメノ魚）が生息する。昭和30年まで山崩れで人口流出したが、その後の自然災害は昭和50年来殆ど無い。これは山の地力のお陰。平谷村の山は標高が高く、混交林（又は混合林。針葉樹と広葉樹、常緑樹と落葉樹など複数の種類が混じる）植生なので、土砂災害・河川氾濫が少ない。落葉は降雨・樹冠から落ちる雨滴・雨水・融雪水、表面流のクッションになり、一連続降雨・時間降雨強度50mm程度まで保水する。標高1,600m以上は樹木が生育できないが、ササが茂って表土を守っている。しかし大寒に出水があると礫や岩屑が流れる。昭和36年災害と平成12年の恵南豪雨では山が崩れて一気に出水した。

私の名前は祖父の名付け。隣に海という地名がある。昔、海があった。伝平家落人で126代続く。平谷村には村名はじめ平が付く地名が多い。村民は祖先から気概を持って歴史・文化を継承している。律令時代頃から木地師（きじし）が住み栄えてきた。木地師は轆轤（ろくろ）を使って椀や盆などの生活用木工品製作を生業とした職人集団である。定住せず良質な木材を求めて移動生活を送る独自の文化と信仰を育んだ。彼らは蛤挽き（はまぐりびき）で器の外側や縁を蛤の殻のように緩やかな曲面で削り出す高度な技法を持っていた。中世に武田氏が軍用路として伊那街道を開発し、平谷宿が生

まれた。戦国時代は柳川の狭窄地・靭（うつぼ）に滝ノ沢城と滝ノ沢御関所（突端瀬の関、現遺跡）が置かれた。地名の靭は兵が矢入れを多く残して去ったのが由来。近世は伝馬制度の宿駅として、また荷物運搬手段「中馬」の馬屋を備え、人と物の交流、善光寺参りの宿場として栄えた。旅芸人から学んだ地芝居の「平谷歌舞伎」は今も「珍珍幕府・秋の陣」で上演して好評である。

郷土の偉人に 林 芋村（うそん）が名高い。彼は平谷尋常小学校で教員を15年（大正4年～昭和4年）勤め、貧しくも母子の養育と谷間の畑開墾をしながら平谷の子供らの教育に情熱を注いだ。植林作業中に事故死し、教育の情熱と苦悩を多くの短歌に残した(平谷村HP)。平谷の言葉はきついと言われる。言葉は粗いが人間性は良い。五平餅は三州が赤味噌（豆味噌）ベースでわらじ型、信州はクルミや胡麻を加えた信州味噌（米味噌）ベースで団子型や眼鏡型が主流だ。

矢作川流域圏では、現在、（財）矢作川水源基金はじめ**矢作川沿岸水質保全対策協議会**、矢作川水質汚濁対策連絡協議会、矢作川流域圏懇談会で、定期的に会議・シンポジウム・イベント交流がある。また、長年の上下流交流として、最下流の碧南市の子供らに平谷の雪を2月初めに市が指定した公園にダンプ3台分プレゼントしている。矢作川水源基金による水源林対策事業もある。平谷みどりの少年団は平谷村の児童生徒による自然体験や森林保全活動で、村の財産区と連携し、バス1台、山の緑化植樹や川ゴミ清掃等を通じて、ふるさとへの愛着を育む活動を実施している。さらに植樹祭や明治用水の水源林基金事業もある。

２．「人口減少対策」に特化し分野横断的に効果を発揮する村の施策

昨年、私は「守る」「育てる」「みんなの力で」をスローガンに村長二期目に就任した。村行政のトップとして、村民の命と暮らしを守り、子どもや若者支援、森の恵みでもある温泉もスキー場も農産物も守る覚悟である。また、学校教育の充実、子どもたちが感性豊かに育つよう村民の期待に沿うべく村政の発展のため精一杯努力する覚悟である（広報ひらや、令和7年2月）。

平谷村の新しい総合戦略は「人口減少対策」に特化し分野横断的に効果を発揮する施策だ。基本は、① みんなで支える子育て安心戦略、② 未来を担う人材定着戦略、③ しごと創生 賑わいのある村づくり戦略、④ 時代に対応した持続可能な地域づくり戦略の4点である。若者を村に呼び込むことが経済の活性化や生活サービスの充実、住民の負担軽減に繋がり、結果として子どもから高齢者まで全住民に便利で快適な暮らし村になるという考え方で、魅力ある仕事づくり、子育てし易い環境づくり、便利で安全なまちづくりなど、若者の移住・定住を促す環境づくりを推進する（平谷村第6次総合計画・総合戦略素案、令和8年3月）。

子育て支援は、平谷村保育所（小学校と連携、自然との触れ合い、地域との交流）、結婚・出産と小学生から大学生までに係る補助金制度等。平谷村教育委員会は、平谷小学校と大学生の受け入れ事業、交通安全プログラム。平谷村立小学校は山間にある全校児童数13人の小さな学校（令和8年5月現在）。豊かな自然の中で、美しい緑や川と触れ合い、地域と繋がり地域に学び地域を元気にする学校づくり。現在、大阪教育大学の学生が平谷村に滞在し、教育分野等で活動してもらう体験プロジェクトを実施中。放課後は学びと遊び。教育委員会と地域おこし協力隊で進める放課後の居場所「ひらひら平谷」、学習教室、全力で遊ぶ平谷キッズビレッジプロジェクト、ひらひら平谷イベント。

公民館は、子どもからお年寄りまで地域の人々の教養の向上、健康づくり、生活文化の発展等に寄与する事業を推進。珍珍幕府秋の陣・芸能発表会、ひまわりコンサート、盆踊り（保存会）、朴葉餅づくり等料理教室等、成人式および西部地区公運協（隣り合う3村合同）の活動を推進。

平谷村移住・定住推進施策では安心な生活、出産・育児と様々な経済的支援。さらに縁結び大学で、信州里山の魅力と暮らし方をPR（平谷村HP、運営next level）。① 豊かな自然に囲まれて登山やスキーといったアクティビティと、四季の美しい景色が多く心穏やかな暮らしが叶うコンパクトなコミュニティー。② 子育て世代に優しい手厚い支援と充実の教育環境。子どもたちを“自立して考

え決断できる人”に育てる取り組み。③ 親子で山村留学制度を推進し、家族で平谷村への引っ越し（親子留学向け住宅）、1年間（最長11年まで延長可能）の山村生活・自然の中で体験を手厚くサポート。④ 移住者の仕事探しは近隣市町村も含めて可能。商工会で起業を支援。産業建設課で新規就農を支援。⑤ 育児環境を優先して地方移住を検討されている人向けに移住体験ツアーを開催。移住者は村役場が斡旋する村営住宅を主に利用。新築・空き家取得改修等補助金制度も有る。

３．小さな村が推進する子ども伸び伸び教育、トコトン教育

学校教育は、学校・地域・家庭の連携を図り人材育成に取り組んできたが、少子化と過疎化の急速な進行に伴い児童生徒数が減少。中学校は阿智中学校へ委託統合し小学校1校になった。過疎対策制度を実施し、村費講師を補充して単式学級を維持しているが、今後も小学校児童の減少が深刻な問題である。社会変化に対応できる「学校力」が問われ、特色ある開かれた学校づくりに取り組んでいる。村も人口増加方策として児童生徒数の増加を図っている。少人数学級のメリットを生かした学習の個別化、村費教員採用による学力向上、隣村との合同学習・他校との交流等を図り少人数の弊害解消に努めている。（出典：平谷村過疎地域持続的発展計画（令和3年度～令和7年度））

(1) 小規模学校で特徴的な子ども教育

小さな学校で育てたいと小規模校を望まれる親子を対象に親子留学を受け入れている。母と子が1～2年。大人も子供もお互いに勉強して考えられるようになる。小村だがコミュニケーションがつくり易くなる。いろいろ先端の教育を続けようと思っている。PTAは止めて“フラット”という呼び方に変えた。大人も子供と村で育て・子供の可能性を展ばす考え方、トコトン教育。子供をのびのびと可能性・自主性を伸ばす考え方。感動すると思う。親子留学で来たい人は沢山あるが、児童生徒1人に1人付けることになるので、そう沢山は受け入れられない。

(2) 平谷村親子留学

信州自然留学（山村留学）は、都市部の子どもたちが自然豊かな農山村地域の共同宿泊施設や農家等で暮らし、その地元の学校に通いながら、長期（通常１年間）で自然体験や生活体験をする取り組み。親子で農山村地域の住宅などに転居して暮らす方式もある。長野県は、山村留学発祥の地として、信州の豊かな自然環境を活かした活動を「信州自然留学」と名付け、全国に広く発信している（長野県HP）。平谷村親子留学は、児童生徒が本人だけでなくその家族と住宅で生活する（平谷村農山村親子留学助成金交付要綱・平谷村農山村親子留学用住宅設置及び管理規則・平谷村農山村親子留学生募集要領、令和3年11月施行）。村の窓口は平谷村教育委員会、受け入れ条件は平谷小学校と阿智中学校である。令和7年度の在籍人数は小学校1年2人、2年1人、4年2人、5年1人、6年2人。中学校は無し。親子が公営住宅に入って暮らす短期移住プログラムである。親子で暮らすため就学前や低学年の子どもから参加できる。限られた子育ての時間を子どもたちの「やってみたい」という気持ちを全力でサポートする。平谷村でしか体験できない田舎暮らしを通じ、忘れられない素晴らしい思い出ができる。（出典：長野県県民文化部県民の学び支援課2025）

(3) 子ども伸び伸び教育、トコトン教育

「ひらひら平谷」は、学校、放課後、保健所、保護者、地域が緩やかに手を取り合う、村の温かな拠点として平谷教育委員会が設置した。子どもの自由とありのままの姿を大切にして、ふらりと立ち寄りたくなる場所である。図書室や読書活動を通じて子どもたちの世界を広げて行く。オープンして7年目の今年度からは、地域おこし協力隊3名と集落支援員2名のチームで支え合う体制になる。大人が教え込むのでなく、子どもたちが自分の意志で「やりたい」を見つけて動き出し、工夫して試行錯誤しながら形にして成長していく。居心地のいい時間を一緒に過ごして見守る。

【参考】長野県の特色、ウェルビーイング実践校TOKO-TON（トコトン）事業

2023年6月に閣議決定された教育振興基本計画では「持続可能な社会の担い手の育成」と「日本社会に根差した



矢作川水系最高峰の大川入山（標高1,908m）から流れ下る柳川、靭（うつぼ）砂防ダム（堰堤）、岸辺で生長するカワヤナギ林



国道418号、平谷郵便局付近の家並み、ビニールやPOフィルムなどで作られた農業・園芸用施設



高原の農地（向町）、遠景は平谷カントリー倶楽部（1,222～1,300m）の山稜

ウェルビーイングの向上」の２つを大きなコンセプトに掲げている。長野県での事業は、発達障害や不登校の児童生徒が増加傾向にあるなど、子どもの抱える困難も多様化・複雑化している現状の中、全ての子どもが「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求するために、自ら学び方等を選択でき、自己実現できる（ウェルビーイング）学校づくりの推進を目的としている。ウェルビーイング・TOKO-TON（トコトン）実践校は、県教育委員会が応募校の中から審査・指定し、① 子どもたち自身が学校のルールを作る・決めるなど学校の仕組み改革に挑む、② 子ども・保護者・地域と一緒に学校づくりをする、③ 他校への横展開につながるよう取り組みの経過を公表したり学校公開を実施したりすることに取り組む。この結果、公立小中学校70校（12市町村教育委員会）が指定され、平谷村1校も含まれている。（出典：長野県教育委員会事務局 教育政策課、義務教育課、学びの改革支援課）

平谷小学校では、子どもたちの声を取り入れた学校運営を行っているなかで、地域・保護者・教員も交えた平谷未来カフェを立ち上げた。その場では自由に発言してよい、相手の発言は否定しないというルールで、子どもと大人が一緒にグループを作って話し合う。大人も子供たちの目線で意見を出して公平に集計し、その結果をさらに話し合う。その結果、自分で決める宿題改革が実現した。子供たちは1週間の計画を立てて宿題を自主的に取り組み、大人と対話・手助けされたりして力を伸ばしている。（出典：文部科学省HP：地域発！教育振興基本計画×実践事例レポート）

（4）村で教育を受けた児童生徒たちのその後は

教師になったり教育関係の職場に就いたりしている。村に戻る人は少ない。移住者に替わる。この先15年後の村は全く新しい人になってしまうだろう。私は思い切ったことをしたいと思っている。

４．地域おこし協力隊を入れた未来づくり

当村は中山間地で活躍する「地域おこし協力隊」を入れている。現在12名程（平谷村HP・広報）。起業家、農業経営を目指す若者たちが増えている。彼たちは小規模な自治体に応募してくる。平谷村は高冷地野菜どころ。「ひらひら平谷」のスタッフ担当も待っている。赴任期間は３年間と短いが、農業、林業、教育と選べる活動分野も広い。

【参考】「三方よし」のメリット

この取り組みは「三方良し」（三者Win）の関係が見込まれている。① 地域おこし協力隊員は、自身の才能や能力（専門性）を活かした地域活動ができる。国・自治体等によるサポートが充実しており、隊員自身も活動を通して理想とする暮らしや生き甲斐を発見することができる。また、じっくりと時間をかけて仕事や住居等の定住にむけた準備ができる。② 協力隊を導入する地方公共団体は、行政ではできなかった柔軟な地域おこし策をを展開することができる。また、隊員（住み込み）の住民増によって地域活性化が図られる。③ 隊員の活動を

受け入れた地域には、その移入者・若者による斬新な（多様な）視点が生まれ、隊員の熱意と行動力が地域に大きな刺激を与える（地域コミュニティーに新たな繋がりを生み出す可能性が高まる）。（出典：総務省HP）

地域おこし協力隊員の募集・受け入れおよび活動支援にかかる各種費用は特別交付税措置の対象になっている。この制度を導入する地方公共団体は受け入れに適切な予算編成を行い必要な予算を確保する。因みに令和7年度は全国で10代から60代以上までの幅広い年齢層の総勢8,196名（男性59.7% 女性40.3％、優占年齢層 20～39歳63.6%）が、移住・定住、観光、商品開発の販売、地域コミュニティー活動、漁業、水産業、農業・林業、環境保全、医療・保健、デジタル、教育・文化、スポーツ等の幅広い分野で活躍している。取り組み自治体総数は1,187団体で、いずれも右肩上がりで増えている。長野県の受け入れ隊員数は全国トップの477人である。南部の下伊那郡13町村で80名、うち平谷村が11名である。（出典：総務省地域力創造グループ地域自立応援課2026）

５．ひらや高原の美しい地域経営戦略

（1）産業の現状と課題

当村の総世帯数203戸のうち農家戸数は66戸。大部分は兼業農家。経営面積は11ha、うち水田1.1haで自家用米生産が主である。畑地はトウモロコシを主にして蔬菜を作付けしている。零細経営で、鳥獣害の多発、生産意欲低下、高齢化等による担い手の減少で、遊休農地が増えている。村の人工林（人工林率46.4%）の多くは手入れが必要である。林業も担い手が減少。人工林の大部分を占めるカラマツの木材価格低迷、労働費等経営コスト増による生産性悪化等、森林の適正な管理、安定的林業生産に影響している。内水面漁業は遊漁・レクリエーションを通じ余暇活動や憩いの場として社会的役割もあり、漁協管理河川と平谷湖フィッシングスポットで利用が増えている。

商業は小売店6店舗、飲食店10店舗で、ほぼ家内労働に依存している。企業育成の強化、高齢化への対応、後継者・人材確保が課題である。観光業は、平谷高原スキー場（昭和60年開場）、温泉施設ひまわりの湯（平成6年開業）、道の駅信州ひらや、平谷湖フィッシングスポット（平成15年開業）等、ハード面の整備が進展した。しかしソフト面では長期滞在型、通年観光地を目指した新たな事業取り込みが弱い。観光志向は見る型から体験型に変化してきて、「来客」と地元の「ひと」との関りが重要なポイントになった。スタッフ教育、インストラクター人材育成等を積極的に取り組み、体験プログラム開発をはじめとする魅力ある観光メニューのコーディネート機能、誘客プロモーション機能を充実することが課題である。（出典：平谷村：平谷村過疎地域持続的発展計画（令和3年度～令和7年度））

【参考】ひまわり市場は平谷村の中心地、現役場の隣、国道153号沿い平地に整備した道の駅「信州平谷」に併設した農産物直売場である。新鮮な野菜や季節のフルーツ、平谷村特産のトウモロコシなど、地元の特産品が豊富に並ぶ。設備も駐車場も充実している（平谷村観光協会※1会員・（株）信州平谷温泉HP）。平谷村の「朝採れ野菜市」は、当市場で、7月～8月（期間限定）8：30～17：00に開催している。920mの標高を活かして栽培された高原野菜は人気商品である。特に平谷高原特産のトウモロコシは、高原の昼夜の気温差が大きい特性を生かして生産されてとても甘く美味しい。他にも伝統野菜の平谷芋、ほんのり爽やかな酸味のトマト、生でも美味しいキャベツ等があり、早朝採れた野菜類を提供している。（出典：長野県町村会HP）

（注）※1：平谷村観光協会：平谷村役場産業建設課内

（2）自然環境は優れた地域資源

高原の魅力　村民は高原の気候特性を生かした農林業で作物・品種を栽培している。昼夜の気温差が甘味を増す。市場で販売すると午前中に売り切れてしまう。平谷の農産品は好評だが生産量は限られている。20年前は市場一杯に出荷できたが、生産する人が次第にいなくなった。イノシシは里地の農地に時々出没するがシカはそれほど居ない。里山の景観（景色）を保つために山裾・山林の整備（林縁1㎞範囲）を行っているから。行わないと草木が繁茂した茫々の山になってしまう。1年すると元に戻るので林縁保全は毎年戦いだ。



旧伊那街道（三州街道）・柳平集落の家並み（南西方向）



旧伊那街道（三州街道）沿い、平松集落の農地・トウモロコシ畑の農作業、遠景（西方）は長者峰山麓



旧伊那街道（三州街道）沿い、柳平集落、山麓の沢・農地、里山の林縁はきれいに手入れされている。

水と森の魅力　平谷は保水力の高い水源地で水の良い清流がある。平谷川は県境を越えると上村川に名称が変わる。上村川は神郷川とも書き、人々が集う、雨が降っても濁らない川に因む。根羽のスギに対し平谷はヒノキが特産である。気候的に緻密な年輪に生育するので品質に魅力がある。カラマツは長野県の奨励樹になっている※2。カラマツは植林して40～50年で伐採できる。しかし私は一番嫌いな樹木だ。薄緑・黄金色の落葉がいたずらをする。落葉マツが水に混入すると目詰まりを起こして機械をダメにする。森林植生はヒノキやイロハモミジ、ヤマモミジ等にしたい。平谷のヒノキはツヤが違って年輪の目が細かいので上質な材として使われる※3。

（注）※2：長野県の奨励樹種は主に4種。カラマツ：強度があり長野県の植林面積でも高い割合を占める代表的木材、ヒノキ：優れた建築材として県内で広く生産されている。スギ：最もポピュラーで広く利用されている。アカマツ：信州の景観に馴染み、味わいある空間をつくっている。

（注）※3：強度が高く耐久性に優れる。生長が遅い分、木の組織が密になる。冬目（濃い色の硬い部分）の割合が多くなるため硬く丈夫な木材になる。狂い（反りや割れ）が少ない。目が細かな木材は吸水や乾燥による伸縮が少なく建材や家具として加工後も安定。木目が詰まって見た目が美しく、上品で高級感ある仕上がりになる（カラマツWikipedia）。

（3）水源と森の価値を忘れた日本人

昭和30年代後半に木材が自由化され、外材が港から上流に上って来た。地元産は伐採・搬出・運搬が高額で外材に太刀打ちできない。山の木材は金にならなくなった。木づかいが後退した原因だ。当村はじめ上流・山間地域の人口減少は、森林のCO_2吸収減、活力減になってきて多面的機能も後退（退化）。逆に流域の下流、都市でCO_2発生が増大している。下流の人が守り人にならないと良くならない。水を通じて水の恵みを得る、森と水の価値をよく知ることが大事だ。

他方、水源地にも社会的危機が来ている。今や外国資本が人口希薄な山を買い求めている。平谷村も他ごとでない。村の中心地から見えない山向うの民有林で大慌てしたことがある。勝手な乱開発は水源林の整備計画に影響するし、治山・治水、利水、環境保全など矢作川流域に波及する。山里に人口が減り続け、農地も宅地も維持管理が行き詰まると、それが流域圏、国土管理の問題になると危惧される。この山の危機を知ることも必要である。

昔から山の神信仰や民俗的慣習があって、女性の入山は制限されていた。平谷村には木地師が多くいて栄えた歴史がある。大川入山は難しいが、木地師らも生業の範囲内でわきまえて生活していた。日本人は山の価値を忘れてしまった。山々を見ながら切って木質化し、新しく木を植えるとCO_2の吸収力が高まる。

取材者・宇角：本来山里がどういう土地だったのか。女性は木の恵み（林産物）、木材と多面



YAMAP流域地図でみた矢作川流域・平谷村周辺　　（黄色線：流域界、薄い白綿状は上空の雲。）

的働き（機能）、森・山（上流山間地）の文化に注目する。未来会議で女性が山に行き森に入る。森の民ともに体験を共有する。今のままでよいのか、流域材も勉強するとアイデアが生まれる。見方が変わることで資源の価値が高まり、経済に強い地域になると思う。

（4）自然環境を生かし若い世代の生き方を受け入れる山村経営者の先見

人口が少ない地域も魅力になってきた。国土交通省も漸く気付いて3年前くらいより全国から人を集めて勉強会を開催している。柳川にでっかい砂防ダム（堰堤）があるが、砂防事業も皆が理解できるように砂防ダムツアーも増えている。山地の森林を学んで考えてもらいたい。平谷では標高で植生帯が変化して、季節毎の森林の作用が分かる。山の林地土壌から水を揚げて（蒸散作用）、新芽が噴き出るくらい。皆一斉に葉を出して。森の世界、不思議な森林の躍動、生命が季節に一致している自然界。これは凄いヨ！えーと思う。芽吹くのも、木々同士で話しているのか、10日と違わない。秋の落葉も。この摂理はよく出来ていると思う。標高約1,000mの温泉のサクラは一斉に咲く。生命体の反応が高度で共通している。水の有難さに感動する！

取材者・宇角：意味が分かると視点が変わる。興味が湧いてくる。情報提供は大事なこと。私も農業をやっていて、昨年からインスタグラム（写真や動画の共有に特化した無料SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス））に投稿（撮影した写真や動画、文章をアプリ内で公開し、他のユーザーとシェア）している。投稿を定期的に購読するフォローワーに若い人が多い。若い人はインスタグラムの利用が多い。今や水系と流域界が分かるYAMAP「地球とつながる流域地図」はジンとくる（図1、URL：https://watershed-maps.yamap.com/maps）。マザーツリー（母なる木）と水とのネットワークか、気候の妙の様で平谷の特産物を味比べしてみたい。誰もが学生になる。正に平谷村学校か。

6．ウェルビーイングで活き活き山村

（1）「山地酪農」牧場と直営カフェの例



平谷川、やくぢ橋上流・東方向恵南豪雨災害復旧個所、右の左岸は平谷村保育所・平谷小学校



上村川と明治用水水源かん養保安林（右奥）ヒノキ人工林尾根筋奥（東方向）が平谷村の山稜



ペアツリーファームカフェ店、事業者の林さん夫婦と取材者（右・野田）

西川村長は、若い世代が挑戦している事業の一例を紹介しょうと、取材者らを誘って近くのペアツリーファームカフェに移動。閉店間際の店で事業者の夫妻も入って半時間、交流を楽しんだ。ペアツリーファームは本村に移住してきた夫婦が山を開拓（整備）し、ジャージー種を極疎に放牧している。カフェに開拓開始から現在に至る牧場の経過と毎年牧場の様子を記録した写真アルバムが置いてある。来客は自由に閲覧できる。村の施策、特に当事業の誘致・設備支援のモデルの一つである。西川村長の熱い村づくり戦略の一端に頷かれた。

事業者（林夫妻）：私たちは岩手県の牧場で「山地酪農」を学び、「自分たちで酪農をやりたい」と夢を抱いた。牧場探しで、山があること、空き店舗があること、中京圏から来客が期待できること等の利点で平谷村に決めた。令和2年に移住して山を整備し、翌年から放牧を始めた。牛の飼育や店舗の準備に難航したが、力を合わせて令和6年に念願のカフェもオープンできた。

（2）地域間交流の促進

地産地消はあまり進展していない。矢作川流域圏で積極的な交流拡大は当村の持続的活力になる。温泉と高原の立地を生かし長期休暇、団塊の世代退職者に対応した健康保養地づくり、観光客の多様なニーズに対応できるサービス、山村体験事業等、ソフト事業に取り組む。農商工連携で職場・就業の場の確保、若者の定住促進、体験学習で誘客を図り、都市と交流、滞在型で経済も地域間で循環させたい。（出典：平谷村過疎地域持続的発展計画（令和3年度～令和7年度））

7．展望：高原の学舎・研修・実習フィールドに期待

西川村長の言葉どおり、様々な取り組みを試行錯誤されている中には苦悩もお有りだと思う。常に前を向いて村民と工夫されながら村づくりに取り組まれている姿に感動した。特に子どもさんへの想いに共感した。「村で子どもを育てよう！ 村全体が教育の場」という村長の言葉は、都市部で子育てをしているお母さんたちには魅力的である。親子留学してみたいと。「小規模な村だからこそ教育の灯を消してはいけない」という村長の熱い想いが様々な施策に繋がっているんだなと感じた。女子森の活動にも生かしたい。（取材者・宇角）

産業が活発で水の恩恵を受けて人口が集積した下流都市は山村の活用を忘れてしまったのか。今後は水源地・平谷村を要とした流域圏づくりの生き方とコラボしたい。それが発信・体験・交流・先端産業にリンクする。総合治水、流域の保全と防災・自然・水保全も相乗効果で高められよう。ハード整備ばかりでないソフトな人づくり・交流、水と経済が山川海と循環する各地が共存、三者Winの関係。これが西川村長の先導する「人口減少最先進地の生き方」ではないか。人口最少村は、矢作川の水源だけでなく未来に繋がる流域圏発展の要であろう。若い世代は都会生活と別のウェルビーイングを求めている。集まって学べる学び・体験・活動できる施設が欲しい。学び舎も流域産の木造であって欲しいと思う。終わりに、公務ご多用のなか拙い市民の取材に対応頂いた西川村長に心より謝意を表します。（取材者・野田）

三河山間地から
/三河の山里サポートデスク



鈴木孝典さんは２００７年に東京の広告デザイン会社を辞めてふるさと豊田市小原町で広告デザイン事務所「スズキ広務店」を開業。地域性を活かした「三河里旅」事業などを展開。

取材日　：　２０２６年3月２８日
取材場所：　スズキ広務店（豊田市小原町登８３）
取材者　：鈴木建一、三ツ松由有子
お話を聞いた方：鈴木孝典さん
レポート執筆者：鈴木建一



祖母と繭のなかで遊ぶ幼少期の鈴木さん

● Uターン開業

３月最終土曜日、三ツ松さんと2人で小原支所(旧小原村役場）から１ｋｍ程東のスズキ広務店を訪ねた。国道４１９号沿いの自宅兼オフィスは鈴木さんの実家である。２０２３年に山部会でお会いしてから、森と子ども未来会議のチラシを制作して頂いた事もあり、ずっと気になっていた人だ。

昭和４８年生まれの５２才。東京や名古屋で広告デザインの仕事をしていた彼が生まれ故郷に帰ったのは２００７年、３４才で娘さんが6才のころ。

地歌舞伎が盛んな小原で父は太夫、母が役者、土葬された曾祖父も含めて３世代８人家族で育った彼は、養蚕＝お蚕小屋や炭焼き、家族で育てた地鶏のご馳走を戴いた最後の世代でもある。賑やかな家族で育った「ふるさとっていいなぁ」という原体験がUターンを後押ししたのだった。

●　地域の縁

ふるさとで広告デザイナーの仕事が成り立つか大きな挑戦だったが、様々な補助制度もあったので、地元小原商工会に入ると、次第に地元からも仕事を戴けるようになった。

数年で小原商工会青年部部長に抜擢され、地元をもっと賑わいある場所にしたいと思うようになる。豊田市の他地区とも交流する機会が増えるなかで、小原や旭など、市街地に近いほど、地域の人達が仕事も買い物も豊田市内で済ませ、地元が廃れていくのを何とかしたいと強く思うようになった。



あいちの山里なりわい実践者で5期の仲間と学ぶ様子

２０２０年、あいちの山里なりわい実践者(現あいちの山里アントレワーク実践者)に選定されたことで転機が訪れた。　そこで出会ったのが出羽三山で修行した山伏の女性だった。彼女から日本の山里には古代から信仰や文化、歴史が息づいており、世界にもまれな豊かな自然の中にモノやコトが溢れるようにあるということ。飛騨高山など各地で和菓子職人の匠の技や、山里の中で受け継がれてきた暮らしを、地域内外の人々にアテンドし体験体感する新しい観光業態が息吹いていることを知る。小原で新しい挑戦が始まった。

●『地元の人しか知らなかったニッチでローカルなコミュニティ体験を通して人と人が深く繋がる旅を目指す＝三河里旅』『資源は人！地域を掘り起こす体験型観光　MIKAWA　SATOTABI』

三河里旅
MIKAWA SATOTABI

３年前お話をお聴きした時、とても面白い取組みだと思ったが、この３年で地域プレミアムガイドの方々も小原から足助、旭、藤岡など他の地区へも増えて、その中身も多様で奥深くなっていると感じた。アテンドするガイドさんと旅人が共に創り楽しむような関係性が生まれることが三河里旅のツボで、通り過ぎるだけでは味わえない山里の魅力を生み出している。


小原地区の市場城址にて山城を知ろうツアー


地元豊田小原歌舞伎公演の様子


狩猟の世界を知ろうツアー（足助にて）

●今後の課題

①山里に伝わる文化や歴史を深く掘り起こすこと。
　小原和紙、地歌舞伎、神社仏閣、修験道、武道、塩の道等
②更に多様な担い手＝ガイドさんを掘り起こし継承すること。
③滞在宿泊できる場＝民泊候補の古民家はメドあり。
④継続して人々が来たくなる地域づくり。
⑤結果として地域全体が誇りを持ち工夫して付加価値を向上。心豊かな山里の暮らしを継承。


旬の野草を学び、「春の野草おかずツアー」




試食の野草の天ぷら

●　人口減少が顕著な山里地域において、自然の恵みと、伝承され育まれてきた人々の営みを、新たな視点で掘り起こし、都市部の人々と新たな交流を生み出すチャレンジ。

野草に詳しい人と里山に入って野草を採取し、お昼に各自で天ぷらにしてみんなで試食する等、取材した私もワクワクし、是非この輪を広げていきたいと思います。

第３章
流域圏の担い手たち
～新時代の人育て～



ニワケンという生き方　丹羽健司さん

矢作川流域で長年、森林ボランティアの育成やネットワークづくりに奔走し、「森の健康診断」「木の駅プロジェクト」といった市民参加型の運動を牽引してきた丹羽健司さん。「流域圏大学」を構想する上で、忘れてはならないのが「現場」目線と、現場を支える「人」目線。それらを軸に活動してきた丹羽さんの生き方に学びたいとお話を伺った。



取材日　：　2026年1月
取材場所：　地域の未来・志援センター事務所
（名古屋市東区代官町 中部リサイクル運動市民の会内）
取材者　：　近藤 朗、曽我部行子、照井友奈（人間環境大学）、三ツ松由有子
レポート執筆者：三ツ松由有子



2005年に始まった「矢作川森の健康診断」。10年で延べ2300人の市民が研究者や行政と手をつなぎ、森の状態をくまなく調査した。その結果、約3分の2の人工林が早急な手入れを要することが科学的に明らかになった。その手法は40都道府県へと広がっている

●「流域圏大学って、作るものじゃないんですよ」
～形のないネットワークという発想～

――流域圏大学について、丹羽さんはどんなイメージを持っていますか。

丹羽さん：「流域圏大学を作ろう作ろう、と議論すること自体が、実は少し違うんじゃないかな……と思っているんです。」
そう切り出した丹羽さんは、少し笑いながら続けた。

丹羽さん：「誰かが号令をかけて“設立”するようなものじゃない。勝手に名乗って、後から定義がついてくるくらいでいいんです。」

その説明は、ウィキペディアのようでもあり、くまモンのロゴのようでもある。つまり、誰でも自由に使える“共通ラベル”としての大学だ。

――「名乗った者勝ち」というのは面白いですね。

丹羽さん：「そうそう。バラバラに動いている魅力的な活動を、一つの大きな塊として“見える化”するためのブランド。そんな怪しい大学がいいんですよ。」



恵那の森から始まった「木の駅プロジェクト」。放置された間伐材や林地残材を地域の人が集めて出荷、対価は地域通貨として受け取るしくみで、人も地域も元気になることを目指す。この活動も日本各地に広がっている

●「あれも流域圏大学だったのかもしれない」

丹羽さんは、流域圏懇談会山部会が2023年7月に開催した**「矢作川流域現場森林技能者合同交流研修会」**を例に挙げる。

丹羽さん：「林業の安全対策や技術継承って、日本ではまだ体系化されていないんです。事故率もずば抜けて高い。どこも困り果てている。当時多数の死傷者を出していた豊田森林組合は『もう誰一人死なせない』と決意し、本気で科学的な人材育成に取り組んだ。

その葛藤と成果を流域の4つの森林組合が集まり現場で学び合う研修会で公開共有させてほしいとお願いしたら快諾されました。」
「流域の3県にまたがる4つの森林組合が一堂に会して研修するなんて画期的で全国でも例がないんですよ。内部資料やノウハウをありのままに晒すなんて普通はありえないことです。」その取り組みは流域全体に共有され、翌年には『森の人をつなぐ』として冊子にもなった。

丹羽さん: 「あとで、これって流域圏大学だったのではと思いました。こういう現場の学び合いも、研究者のフィールドワークも、市民の学習会も、オープンに共有されれば、それが流域圏大学になるんですよ。」
――「作る」のではなく「なる」。
丹羽さん: 「そう。流域圏大学は“なる”ものなんです。」





「矢作川流域現場森林技能者合同交流研修会」の様子と記念撮影。～矢作川流域13万ヘクタールの広大な森林は、今、どうなっているのか、将来どうなるのか、いったい誰がどのように管理していくのか～こうした課題を流域の森林組合皆で共有したい、次代を担う林業人材育成について共に考えていきたい…そんな思いで10年余の試行錯誤を経て結実した学びの場のひとつ

●怪しさと強さ　　～丹羽さんの“現場目線”のルーツ～
――丹羽さんの“現場”へのこだわりは、どこから来ているのでしょう。
丹羽さん: 「**矢森協**を立ち上げる前に、どうしても会いたい人がいたんです。矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）(注1)の初代事務局長、**内藤連三さん**。」
昭和40年代、工場排水で矢作川が汚れたとき、下流の農民や漁民が立ち上がってつくったのが矢水協だった。
丹羽さん: 「内藤さんは、法的権限も予算もないのに、現場を歩き回って、科学的データを武器に悪質事業者とも対峙していた。全国初の市民による水質汚濁防止法違反の告発もやってのけた人です。」
――すごい迫力ですね。
丹羽さん: 「思わず『これって正義のヤクザですね』と言ってしまったんですよ。ギロッとにらまれて、身がすくんだ。そして、ニッと笑ってくれた。」
丹羽さん: 「カネも権限もないけど庶民からは頼られ、オカミからは煙たがられる。あの怪しさと強さがかっこよかった。」「矢作川の水の番人が『矢水協』なら、私ら森の応援団は『矢森協』と名乗ることにしました」

(注1)矢水協が掲げた**「流域は一つ、運命共同体」**という言葉は、矢作川流域圏懇談会の合言葉ともなっており、精神的な柱として引き継いでいるものである。

●新しい出会いをつくるために　～シェアカフェと子ども食堂～

――最近は、岐阜県恵那市でシェアカフェ「HYAKKEI」を運営されていますね。

丹羽さん:「2019年からですね。古民家をリノベーションして、移住したい人や起業したい人が集まれる場にしました。始めたとき、親友に『この期に及んで何を…』ってあきれられましたけど、今では一番通ってくれる常連です（笑）。」

――HYAKKEIは、移住者や地域の人が気軽に集い、情報を共有し、挑戦できる場所ですね。

丹羽さん:「昨年、週末に3年近くカフェを開いていた仲間が、古民家カフェで独立したんです。あれは本当にうれしかった。」

● 子ども食堂が生まれた理由

――2025年からは子ども食堂も始めたとか。

丹羽さん:「15年前、『浦河べてるの家』(注2)の向谷地生良さんに出会って以来、今は森林とか山村だけど、いつか彼のような福祉の世界にたどり着くんだろうなという漠然とした、けど確信に似たものがあったんです。それでフードパントリーで困窮ひとり親世帯への食品配布を手伝っていたんですが、月に一度並ぶ姿を見て、孤独を感じたんです。食事しながら親同士が交流できる場があればいいなと思って始めました。」



――中庭でBBQ、裏畑で芋掘りやトマト採り。参加家族同士が自然に交わり、会話が弾んだそうですね。

丹羽さん:「『また一緒に来ようね』『うん、うん』って声を聞いたとき、やってよかったと心から思いました。」



(注2)
北海道浦河町にある、精神障害のある人たちが中心となってつくり上げてきた福祉・医療・地域活動の拠点。日本精神保健福祉の歴史の中でも、非常に特徴的で国内外から注目されている。
・正式名称:社会福祉法人 浦河べてるの家
・設立:1980年代初頭(活動の始まりは1980年)
・キーワード: o「当事者研究」
o「弱さを共有する」
o「依存し合う」
o「治すより、共に生きる」

●すべては「孤立させない」ために　～丹羽さんの活動が一本につながる理由～

――「森の健康診断」「木の駅」「HYAKKEI」「子ども食堂」。一見バラバラに見えますが、丹羽さんの中では一本の線でつながっているように感じます。

丹羽さん:「いやいや、いつも思い付きばかりなんですよ。そしてついみんなを巻き込んで忙しくさせてしまって・・・。でもとびっきり楽しいんです。結果的に想いを持った人が孤立しないための仲間づくり、コミュニティづくりになっちゃったみたいです。」

流域圏大学もまた、挑戦する人たちが集い、支え合う場になる。

丹羽さん:「試行錯誤して、壁にぶつかって、それでも前に進もうとする人たちのよりどころになる“場”。それを育てる仕掛けが、流域圏大学には欠かせないと思っています。」

ニワケンのおまじない

「今度はシェアカフェを？　この期に及んで何を……」

親友のアキラさんが呆れた顔をするのも無理はない。矢森協も、森の健康診断も、木の駅プロジェクトも、私の妄想と暴走に巻き込まれ、どれだけの仲間が振り回されてきたことか。

けれど、今回は違った。

自分の暮らしを、自分の手でつくり直したかった。長く空き家にしていた実家を、少しだけ息を吹き返らせたいと思ったのだ。独りでコツコツと店舗を改装し、中庭を整え、裏畑にはバラを植えようと決めた。

そのうち、誰かがクラウドファンディングを立ち上げ、気づけばシェアカフェがオープンしていた。コーヒーなんて淹れたこともない私に、みんなが寄ってたかって教えてくれた。

「蕎麦を蒔きたい」と言えば、誰かが荒れた畑を借りてきてくれる。草を刈り、畝を立て、種を蒔く。秋の刈り取り、ハザ掛け、足踏み脱穀、手回し唐箕――気づけば二十人ほどの仲間が集まっていた。石臼や製粉機で挽いた粉で打った蕎麦は、短く不揃いでも、胸に沁みるほど美味しかった。

味噌も、醤油もそうだった。

老若男女の歓声が響くたび、築百二十年の味噌蔵が、どこか嬉しそうに軋んだ。

二人で始めた路地の茶庭の竹藪整備も、いつしか助っ人が増えた。竹のジャングルを切り拓くと、大きな桜の木が姿を現した。春にはその下で、野点茶会と花見の大宴会を開いてしまった。

座敷横の坪庭は荒れ放題だったが、移住仲間のカノさんが「ここ、コケ庭にしてもいい？　メンテも勝手にやるから」と言って、みるみる美しくしてしまった。見学者に「友人が勝手にコケ庭にしちゃって」と説明していると、今度はミツさんが「私も勝手に庭をやっていいですか」と言い出した。その一言から、オープンガーデン「他者の小径」が始まった。宿根草とバラを中心に、誰でも参加できる庭づくりが続いている。

庭や裏畑には、いつの間にかニホンミツバチの巣箱が点在している。私が始めたはずなのに、気づけばアキラさんのほうが詳しくなり、勝手に巣箱を増やしていた。

「BeeForest――蜜蜂の飛ぶ森をつくろう」

そんなことまで言い出す始末だ。「この期に及んで何を！」と思いながらも、分蜂と逃去に一喜一憂するアキラさんを眺めるのが、今では一番の楽しみになっている。

独力では何一つできなかった。

けれど、「そのうち」「誰かが」「勝手に」と呟いているうちに、何でもできてしまった。

水・木・金、ときどき土日。

ニワケンは今日も、岩村HYAKKEIにいます。　（丹羽健司）

女子よ　森へ行こう プロジェクト　　宇角佳笑さん

記念すべき「山村再生担い手づくり事例集Ⅰ」から登場している「green maman」宇角佳笑さんが、矢作川流域圏懇談会に参加するようになったのはまだ最近のこと。そして、まちの普通の主婦たちを山へと誘い「森へ行こう!」プロジェクトを開始し、流域に目を向けようと語っている。
是非ともお話を伺いたいと思った。

取材日　：　2026年3月28日
取材場所：　豊田市駅西側　セルフカフェ　T-FACE　豊田店
　　（豊田市若宮町　T-FACE　6階）
話をしてくれた方：**宇角佳笑**さん
取材者　：　近藤　朗、三ツ松由有子、曽我部行子（海上の森）、鈴木建一、
　　人間環境大学（学生）／　照井　友菜、服部大輔、可兒日和
レポート執筆者：近藤　朗



「女子よ　森へ行こう！」
（女子森）宇角佳笑さん

女子森！出発点　　なぜ森へ？なぜ流域なのか？

結婚前から田舎暮らしをしたいと思っていました。20代の頃からそういった場所によく旅をした。今の活動の原点としては足助で田んぼをやり始めたことだったのかもしれない。「green maman」から始まり、千年委員会、おいでんさんそんセンター、いなかとまちの文化祭など、街と山間部を繋げるような活動を仲間たちと関わってきました。

「女子よ 森へ行こう プロジェクト」（以下女子森）に関していえば、2024年6月に開催された矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）20周年シンポジウム「豪雨からはじまった市民の森づくり」に田んぼの仲間たちと参加したこともきっかけの一つになってます。シカが急激に増えたことや、間伐遅れの高木が影を作り、田んぼに陽が当たらなくなっていることなど、山間部でお米作りをする私たちにとって、山の問題を無視できなくなっていました。蔵治光一郎先生の話などを聞きながら「もっと山のことを学んで私たちに何ができるのか考えよう」と、一緒に参加した田んぼ女子たちの山への関心は一気に高まったんです。その時に山本薫久（シゲ）さんから「矢作川流域圏懇談会に参加するといいよ。」と誘われ参加するようになりました。流域圏で活動されている方々との交流やフィールドワークを通して学んだことは大きかったと思います。

流域を考えるようになったのは、実はかつて設楽ダム建設中止を求める会の活動に関わったことがあり、その時に設楽町の方から「あなたは矢作川流域の人だから」と言われたこ



矢森協20年「森づくりシンポジウム」（2024.6/1）
東京大学・蔵治光一郎教授、鈴木公平 元豊田市長
の他、矢作川流域圏懇談会山部会メンバーなど登壇



矢作川流域圏懇談会・山部会（2025.6/27）豊田市旭地区
宇角さんも参加、実はこの日**「流域総合水管理のあり方について」**審議会答申が国へと提出された日でもあった

と（2007年頃）がきっかけでした（設楽ダムは豊川流域）。二つの流域の分水嶺である「きららの森」に何度も足を運び、親子向けに「森のこども大学」というイベントをしたり、森歩きの会や観察会などもしたことがあります。あの時の一言がきっかけで、私としては伊勢湾流域という視点に立っていたいと考えているし、これからの女子森もその視点は持っていたいですね。



「女子よ　森へ行こう」facebook ページより

女子森！発進！　私たちの生き方を問いたい

今の時代に「女子」だけを冠にするって時代と逆行していておかしいですよね？でも私たちが敢えて「女子」とつけたのは、多くの女性に森に入ってもらいたかったから。

林業や山の世界は男性社会のイメージが強いので、女性が参加するハードルを下げたかったんです。実際、女子森の活動には、森に興味はあっても縁がなかった女性や、街中に住む女性が参加してくれてますし、山間部に住む女性たちも参加してます。ある意味、活動自体がコミュニケーションの場ともなっていると思います。

女子森の活動は2024 年の夏に友人と一緒に立ち上げました。私たちの命の源である水源の森への危機感があって、それは例えば、増え過ぎたソーラーパネル設置問題や、投機目的の森林の土地所有の問題とか、山間部の耕作放棄地など、色々あるけれど、そもそも、それらの問題は私たちが森に関心を持たなくなった事が大きいのではないかなと思ったんです。



2024.11/10 HYAKKEI（岐阜県恵那市岩村）にて

だったら関心を持ってもらい、森を好きになってもらうために、「まずは森へ行って森を知ろう！」と。女子森としての正式なキックオフは2024.11/10 岐阜県岩村HYAKKEIにて、**丹羽健司**さん（本事例集78頁参照）、**山本薫久**さんの協力を得て開催。以降、映画「サステナ・フォレスト」上映会、豊田足助でのシカ調査、茶話会、「お山へ登ろう」などの活動を展開し現在に至っており、流域圏懇談会・山部会に参加したことも活かされた。

そして活動を始めてから 1 年後の2025年9月、11月と「森から考える 流域圏みらい会議」という場を、矢作川流域と関わりの深い**渋沢寿一**さん（豊森なりわい塾）、**蔵治光一郎**先生（懇談会・山部会）のお二人を招いて開催。（右に一部を掲載したのが呼び掛け文）私たちがこれからの未来にどのようなかたちで森に関わり、 豊かな森や水を次世代へ繋いでいけるの

「森から考える　流域圏みらい会議」

～命の循環を見つめ、自然と共に生きる生き方～（抜粋）

私たちは、かつて「森の民」でした。
森に寄り添い、川と共に暮らし、山や里の恵みに
感謝しながら、いのちを繋いできた日本人。
けれど今。
豊かな自然に囲まれながらも、私たちの暮らしはいつのまにか森から遠ざかり、自然との繋がりを見失いつつあります。
目の前に広がる山や森、流れる水の景色は、数千年、
あるいは何万年にもわたる営みが織りなしてきたもの。
その豊かさを次の世代へと手渡していくために、今、
わたしたちができることは何でしょうか。
（中略）　流域圏の中で共に学び考える場を育みませんか。
女子森では、森と大地が繋がり、仲間と豊かな時間や関係性を結んでいけるような、新しい共同体を育んでいきたいと思っています。　　皆様のご参加をお待ちしています。

か、皆さんと一緒に考えていきたい。共に学び、新しい時代を育んでいきたいというメッセージを伝えるものだった。

　このような会を「森女養成講座」のメンバーと「女子森」のコラボでやったらおもしろいんじゃないか？と丹羽さんの提案で実行委員（丹羽、山本シゲ、洲崎、高橋啓、宇角）が発足。渋沢さん、蔵治先生の協力のもと、2026年３月14日に「女子で語ろう　森のこと。」を開催。森女15名、女子森15名が集まり、賑やかな会となった（次頁参照）。今後も森に興味を持ってくれる女子が増えたら、嬉しい。

2025.9/7 共存の森ネットワーク
澁澤寿一代表のお話し
東京大学 蔵治先生のお話し













Year/day	「女子よ　森へ行こう プロジェクト」活動内容（Facebookより）	備考／協力者など（敬省略）
2024.夏頃	「女子よ　森へ行こう！」と活動開始	
2024.11/10	Vol.1　岐阜県岩村 HYAKKEIよりニワケンの森へ	丹羽健司、山本薫久、佐藤大輔
2024.12/ 8	Vol.2　映画「サステナ・フォレスト」上映会（名古屋市緑区）	（座談会）東京大学 蔵治光一郎教授
2025. 3/ 1	Vol.3　森林とシカ問題を考える／座学＋シカ調査 （豊田市足助町）	人間環境大学・江口則和 清水潤子、山本薫久
2025. 3/ 4	茶話会	
2025. 5/10	Vol.4　山で暮らす人を訪れる GONZORE TRAILの森（豊田市御内町）	GONZORE TRAIL 藤澤祐作・あや
2025. 6/ 1	Vol.5　お山に登ろう@屏風山（岐阜県恵那市・瑞浪市）	**とよた森林学校** 講師 永井初美
2025. 9/ 7 11/24	**流域圏みらい会議Ⅰ**（そらのうたみうち） **流域圏みらい会議Ⅱ**（つくらっせる）	共存の森ネットワーク 澁澤寿一代表 東京大学 蔵治光一郎教授
2025.11/ 1	Vol.6　お山に登ろう@寧比曽岳（豊田市御内町）	とよた森林学校講師 永井初美
2026. 3/14	**女子で語ろう　森のこと。**　（豊田市駅前 T-face） 女子森！×森女養成講座OBたち交流会（15名×15名）	澁澤寿一、蔵治光一郎、丹羽健司、 洲崎燈子、高橋啓、山本薫久
2026. 5/ 9	ブナの森を歩こう@段戸裏山（面の木園地 豊田市稲武町井山）	とよた森林学校講師 永井初美
2026. 5/28	GONZOREの森（豊田市御内町）／シカ対策作業	

女子で語ろう
森のこと。

女子よ森へ行こうプロジェクト と海上の森女養成講座卒業生の出会い

女子よ森へ行こうプロジェクト（女子森）のメンバーは講演会や現地勉強会、映画上映会などを開催し、森林と流域についての理解を深めていったが、では私たちは森で何ができるのだろう？と考えていた。女子森の活動に寄り添ってきた丹羽健司さんは、自身が立ち上げ、運営してきた「海上の森女養成講座（森女）」に思いをはせた。森女は2016年から、海上の森をフィールドとして、山仕事ができる人材を育て、里山づくりに関わってもらうために毎年開催されている講座だ。その卒業生たちは学びを生かし間伐を行っているが、そもそも目標とすべき森とはどんな姿だろう？という疑問を持っていた。丹羽さんは思った。この２つのグループのメンバーが出会ったら、ステキな化学反応が起こるのではないか？ 丹羽さんと宇角さん、筆者を含む5人の趣旨賛同者により実行委員会が結成され、2026年3月14日、豊田市駅前T-face のレンタルスペースで、「女子で語ろう　森のこと。」と題したミーティングが開かれた。

集まった約30人の女性たちの楽しげな声で会場は大賑わい。まず両グループの活動紹介を行った後、1人目のゲストスピーカーの渋澤寿一さんから、日本人がどのように森をとらえ、育て、森とつながり、地域に根ざした暮らしをしてきたか、その暮らしがどのように豊かなものだったかということが語られた。続いて蔵治光一郎さんが、私たちは流域の森、川、海のつながりの中で生かされていること、食料、水、エネルギー、森は密接に連関していること、森の価値について改めて問い直す必要があるということを話した。続く質疑応答では、講演内容や森林をめぐる課題、自身の活動に関することなどさまざまな質問が投げかけられ、ゲスト参加の豊田市森林課職員が答える一幕もあった。初めて出会った、森に強い思いを持つ２つの女性グループが、生き生きと交流し会場を盛り上げた。



日本の森林は現在気象災害、獣害、巨木化などさまざまな課題を抱えているが、町場の女性たちがそこに向き合う機会は今まで非常に少なかったと思う。そんな中、森に向き合い始めた女性たちが出会い、新しい気付きを得るためのお手伝いができたことはラッキーだった。森に関わる女性が増えれば、人と森の関わりは強く、豊かになっていく。そう確信している。女子よ、森をめざせ！

（洲崎燈子）





green maman から女子森！ へ

事例集アーカイブから未来への展望　（文責；近藤朗）

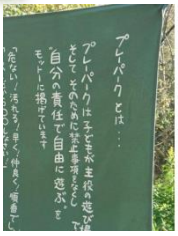
「green maman」4名の女子たちと、それに協力する方々は2013年度から始めた本事例集にたびたび登場し、それぞれ活動も輻輳しながら様々な進化を遂げてきたように思う。私が宇角さんを取材するのは初めてながら、2014年に「とよたプレーパークの会」小黒敦子さん、2017年に「ちんちゃん亭」鈴木桂子さん御夫妻をたまたま取材させていただいている。





「green maman」
小松昌代、小黒敦子、宇角佳笑、中根桂子さんたち
←「農業再生法人 みどりの里」野中慎吾さん

改めて今までの事例集を読み返し、それぞれのキーワードを拾ってみると、例えば　＃まちのなかの結　＃子育て　＃農業生産者と消費者をつなぐ　＃米作り　＃食と農　＃（林業）木を消費する仕組み　＃循環の輪　＃農福連携　＃「ことり」　／　＃子育てから「人育て」へ　＃自ら考え想像力で行動　＃怪我と弁当は自分持ち　＃心折れるくらいなら骨を折る　＃ごちゃまぜに繋がって交流　＃お仕着せでないこと　／　＃利他　＃長いものに巻かれない生き方　＃正直　＃他人がわらわら出入りする暮らし（楽しい）　＃一つのものに依存しない暮らし（タフ）　＃ふるさとのような居心地　＃「居場所」と「繋がり」





「とよたプレーパークの会」小黒敦子さん



2016事例集・その後いかがお過ごしですか
みどりの里と green maman のみなさん

あれから10年以上の時が経ち、みなさま、子育てなどからは次のステージへと向かわれているのでしょうか。2016年「green maman」再取材時に、Facebook ページを作りたいとありましたが、今は公開されている。今回の宇角さん取材にあたっても、女子森！Facebook は、貴重な情報源でしたが、やっぱり話は直接聞かないとね。



「ちんちゃん亭」鈴木桂子、鈴木啓佑さん

本事例集でも紹介する「**未来創造プログラム**」（87頁参照）では、学生たちを森へと誘う「森のミライ合宿」というのを2022年から展開しており、そのため今回取材にはその関係者である私、三ツ松由有子さんと学生３名も参加させていただいた。どちらも女子、あるいは若者を「森へ行こう！」と企画している同志、実は私たちも始まったばかりのプロジェクトであり、まだ何も生み出しているわけではない。今回の取材を通して、あるいは宇角さんなどの通ってきた道を辿りながら、流域への思いが共有出来たら良いな、などと思い巡らせている。若者達には何が伝わっただろうか。



2026.3/28 事例集取材後

未来創造プログラム　学生・若者たちを流域へ

2018年から始めた「未来創造プログラム」は、地域の未来・志援センター（事務局長；三ツ松由有子）と22世紀奈佐の浜プロジェクト（事務局長；近藤朗）がコラボして始めた担い手づくり事業であり、中部の学生たちを中心に海へ山へと連れ出し、流域圏をベースとしたこれからの私たちの生き方、暮らし方を学び、探るものである。以下は今回このプログラムの一環の中で、三ツ松さんから本プロジェクトの本質・意義、そして今後のあり方について話を伺いながら、皆で語り合った記録でもある。



地域の未来・志援センター
三ツ松由有子さん

取材日　：　2026年3月7日～8日／ ヤマイロゲストハウス宿泊
取材場所：　長野県飯田市駄科地区（天竜川流域）／ 鈴岡城址公園、他
IVUSAとの「伊那谷環境保全協働活動」と共に
協力＊IVUSA（国際学生ボランティア学生協会）
／ 箭野純貴、深山恭介、吉田彩花、他
＊いなだに竹Links／ 曽根原宗夫
話をしてくれた方：三ツ松由有子さん
取材者　：　22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会（NSP22）
／近藤 朗、川野純也、米田紗歩（魚と子どもNW）
人間環境大学（学生）／照井友菜、服部大輔、可兒日和
信州大学（学生）／ 小池天、北澤 丞、平塚玲美子
レポート執筆者：近藤 朗

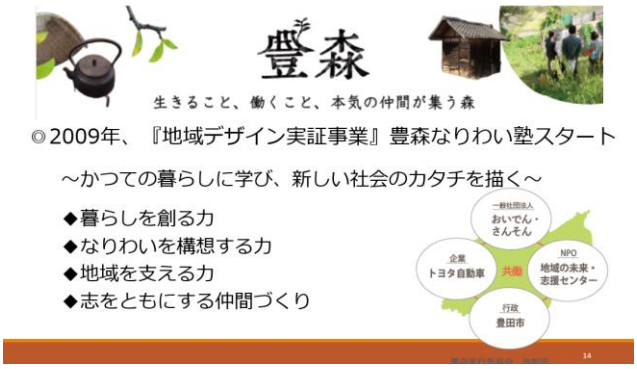


未来創造プログラムの原点「豊森」～中部リサイクル運動市民の会から地域の未来・志援センターへ～

三ツ松さんは現在、1980年設立の老舗NPO「**中部リサイクル運動市民の会**（中リ）」スタッフとして働いているが、リサイクルだけではいけない、持続可能な社会を目指すべきだとして、中リから派生し2004年に「**地域の未来・志援センター**」が創設された経緯がある。総合的な地域デザインをサポートし、そのための人材育成が重要であるというのが基本スタンスとなった。三ツ松さんは2013年より、ここでの事務局スタッフを担う。またほぼ同時期にスタートしていた「**22世紀奈佐の浜プロジェクト**」と出会い、活動のあり方を共に模索していくこととなる。

センターとしては、 2009年～2018にかけて運営を担った地域デザイン+人材育成のプログラム「**豊森なりわい塾**」での経験は大きい。三ツ松さんより提供いただいた「豊森なりわい塾報告書 2017」を読ませていただいたが、その内容はとても興味深くて、「**未来創造プログラム**」に通じるものだと感じた。





この報告書「**豊森なりわい塾 2009-2017 「人づくり」から始まる地域づくり** ～行政・企業・NPO・・・未来へつなぐ社会デザイン」（2017.3月発行）の中で、**澁澤寿一**（豊森実行委員長）が以下のように語っている。

「経済だけで社会を考えるのではなく、一度生態系サービスも含めた自然資本をベースに、何が本当の価値なのか見直さなくてはいけない時代である」

「今までのように同じ組織で定年退職まで勤める仕事と、自分たちを生かしていく仕事は違うものではないかと、皆が気づき始めた。特に高学歴で懸命に最前線で働いてきた若者たちがそのことを認識し始めたのは、この10年だ」

「一緒に生き、死んでいくという共感、それはかつて日本全体に当たり前にあった。むしろこの50年が異常だったのだろう。それが3.11震災で目を覚まされて、時代のページがめくられたという感じ」

「当初はコミュニティビジネスをつくれば、若者も地域に入っていけると思っていたがそうではないと見えてきた。かつて農村では当たり前だった地域社会との関わり、家族や自分の幸せ、そして稼ぎ。そのバランスをつくりあげることが大事だ」

これら言葉を噛みしめながらも、この時から10年経った今こそ、若者たちだけでなく全ての人々に伝えなければならないメッセージだと感じた。下に示す「豊森」時系列表に今、書き加えるならば、2020～2022年頃の「コロナ禍」による価値観の見直しであろうか。日本、とりわけ都市の脆弱性がまた露呈した。

以下 2017.3月発行報告書「人づくりから始まる地域づくり」から





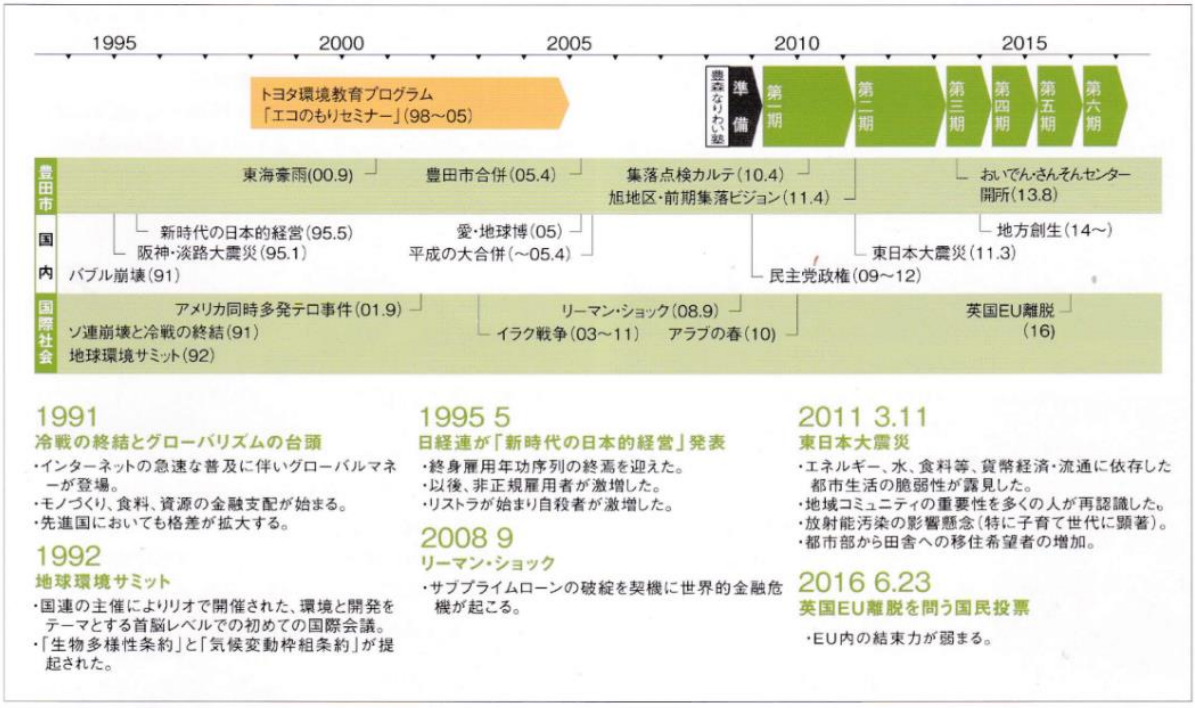
「豊森」座談会／語り手・ゲスト；
←● 澁澤寿一（NPO共存の森NW）
● 大洞和彦（トヨタ自動車）
● 藤山浩（島根県中山間地研究C）
司会；駒宮博（NPO地域再生機構）





フィールドワーク（森林）の様子

■20年間の社会の動きと豊森なりわい塾



地域の未来・志援センターが「豊森」運営を担ったのは2018年度第8期までで、卒塾生は1期から191名にも及ぶ。2019年度からは、運営主体を**おいでん・さんそんセンター**に移管し継続されたが、これも2022年5月をもって終了した。2023年4月からは後継となる「山里ひとなる塾」が開設。運営が一般社団法人おいでん・さんそんに継承され、塾長は**戸田友介**氏が担っている。

報告書「人づくりから始まる地域づくり」から



それぞれの思いで参加する塾生たち

未来創造プログラムへの継承 ～ 豊森なりわい塾から未来創造プログラムへ ～

未来創造プログラムは、2018年度より竹内ゆみ子理事長（当時）の提唱により始まった。理念としては、「豊森」を継承していると言ってよい。森（山間地）だけでなく、海まで含めた流域全体を視野に入れた、地域デザイン・人材育成のプログラムである。

地域の未来が新たな人材育成事業を展開するにあたって、「**22世紀奈佐の浜プロジェクト【通称NSP22】**」との連携を視野に入れたが、お互いにWin-Winの関係なのだと気づいた。

地域の未来では、未来創造プログラム予算を持つが、担い手候補となる学生たち自体の確保に苦慮。NSP22はというと、プロジェクト発足時（2012年）から数多くの学生・若者たちが参加していたものの、彼らにもっと自主的に動いてもらおうとするも、旅費交通費等支給するための自主財源を持たず、新たな動きがとれない。お互いが足りない所を補完する形で「**未来創造プログラム**」はスタートしたのである。

地域デザインという点では、NSP22は三重・岐阜・愛知３県広域のNPO集合体でもあり、伊勢湾流域全体での地縁が強い。とりわけ拠点となる鳥羽市（答志島）との関わりは深く、**鳥羽市長**ですらメンバーとなっていた。そこで新たな「未来創造」は、流域圏全体を視野に入れた広域プログラムとして起動させ、一方NSP22は、これを契機に学生交流会（2014開始）を、より自主組織的な「学生部会」へと改組。若者たちが「**自ら考え、自発的な活動へ進化**」することを期待するが、実際これはそれほど容易なことではなかった。

「地域の未来・志援センター」パンフレット



2018.10月 NSP22答志島海岸清掃と学生交流会の様子



覚醒！ 学生たちの覚醒は、北海道から始まった！

未来創造プログラムでは「豊森」にならい、地域デザインも目的としているが、海や森で人材育成を進めながら徐々に気づかされたのは、地域よりはむしろ「流域デザイン」をめざすべきではないのか、ということ。何という大それたことかとは思う。やたらと「流域思考」と提唱する三ツ松さんの影響もあろうか。

まずは、中部地域（愛知・岐阜・三重・長野・静岡）での連携体制を創ろうかとなったものの、これは実は私が「**愛知・川の会**」代表をつとめていた2015～2016年頃に一度挑戦し、挫折している。理由はいろいろあるが、「中部では無理だよな」と思いつつ、「いい川・いい川づくりワークショップ（いい川WS）」の中部版を創りたいという無茶で勝手な若者もいて、再チャレンジすることにした。

ならばまずは全国版の「いい川WS」を中部に誘致して、それをキックオフにするか。誘致宣言するためには、何か目立つ発表をすべしと、NSP22の学生たちに白羽の矢を立てた。それは四日市大学、岐阜大学、中部大学を中心とした若者たちであったが、プレゼン内容は彼らに任せる、旅費交通費・宿泊費はこちらで用意する、さらに多くの学生たちを参加させたいので学生スタッフにも何人か応募させ、12月真冬の北海道に１チームを送りこんだ。

結果として彼らは、堂々と自ら考えた発表を行い、あろうことか準グランプリまで受賞してしまう。さらには中部WS開催に手をあげた。本来はNSP22の**小浦嘉門**(漁師)代表コメントだったはずが、学生たちが「さあ、行こう！」とステージに上がり高らかに宣言した。きっと何かのスイッチが入ったのだろう。その後戻ってからも、何人かの学生たちが、明らかに主体的な行動を見せるようにもなり、かなりの驚きである。



2018.12月 いい川ワークショップ北海道にて準GP受賞

時代／年度	未来創造プログラム（地域の未来／NSP22）と中部流域連携ネットワークのあゆみ
2018	2018.～「**未来創造プログラム**」のスタート ／奈佐の浜プロジェクト（NSP22）に**学生部会**設立 2018.12月 （通算第21回）「**いい川・いい川づくりワークショップ**(WS) **北海道大会**」への参加・発表 ／NSP22（学生部会主体）が準グランプリを受賞 2019.1月 学生部会による石徹白（岐阜県）合宿 2019.2月「**山川里海情報交流会**」開催（名古屋市）
2019	2019.8月 学生部会の答志島（三重県）合宿 2019.10月 （通算第22回）「**いい川・いい川づくりWS 京都・滋賀大会**」への参加・発表 ／**小浦嘉門** NSP22代表が「広松伝賞」受賞 次回「**第23回大会を中部開催**」で誘致・宣言する 2019.10～12月 WS中部大会の現地実行委員会編成に奔走する／名畑恵、中村晋、朴恵俶、森誠一ら 2019.12.20 「**中部流域連携NW**」**設立、キックオフ** 2019.12月 学生部会による佐久島（愛知県）合宿 2020.2月「**山川里海情報交流会**」（岐阜県垂井） 2020.2月 いい川中部大会に向けて静岡県へ表敬訪問 2020.3月 いい川中部大会に向けて長野県へ表敬訪問
2020	2020.春～ **新型コロナウイルス感染拡大**（～2022） 2020.7月～ **三ツ松由有子**氏が初めて矢作・山部会へ 2020.夏～12月 NSP22学生部会による**キーパーソンヒアリング**、広報ツールとしての動画編集など 2020.12月 オンラインで全国を繋ぐ「**ゆく川 くる川 川談義**」を名古屋堀川沿いから中継・発信する ／2021年に延期した「いい川WS中部大会」に向けた発信
2021	2021.10月 （通算第23回）「**いい川・いい川づくりWS 中部・長良川大会**」開催・運営（岐阜市内） ／長良川国際会議場を拠点にオンラインも活用した初めてのハイブリッド開催を試みる 2021.11月 NSP22学生（**米田沙歩**さん）が初めて矢作川流域圏懇談会・山部会（足助）に参加 2021.12～2022.3**月 矢作川流域圏懇談会「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ－学童保育木造化－**」作成に三ツ松氏が参画（この年、同取組を伴走支援）
2022	2022.5月「**天竜川（上下流）まるごとツアー**」開催 2022.9月（通算第24回）「**いい川・いい川づくりWS**」（東京）への参加・発表 2022.11月 NSP22 野村典博氏が逝去 2022.11月 第1回「**中部のいい川WS in 天竜川流域**」を長野県宮田村で開催 2023.1～3月 **矢作川「流域圏担い手づくり事例集Ⅳ－都市の木質化－」**作成に未来創造P学生が参画 2023.3月 第208回「**河川文化を語る会**」 NSP22講演／３県代表を若手へと移譲する
2023	2023.6月 NSP22が第25回「**日本水大賞**」において**市民活動賞を受賞** 2023.9月（通算第25回）「**いい川・いい川づくりWS in 東北**」（仙台市）への参加・発表 2024.1月 第２回「**中部のいい川WS in 矢作川 ～ 流域治水と言う勿れ ～**」を豊田市で開催 2024.3月 矢作川**「流域圏担い手づくり事例集Ⅴ－伊勢湾の豊かさ－」**作成に未来創造P学生が参画
2024	2024.9月（通算第26回）「**いい川・いい川づくりWS in 白山手取川**」（石川県）への参加・発表 2025.2月 第３回「**中部のいい川WS in 伊勢湾流域圏** 」を四日市市で開催
2025	2025.10月（通算第27回）「**いい川・いい川づくりWS in ひょうご神戸**」（神戸市）への参加・発表 ／ 学生・OB部会メンバー多数が実行委員を担う 中流域連携NW 近藤朗代表「広松伝賞」受賞 2025.9～11月 全国川ごみNW主催「**全世代 リレーミーティング**」にNSP22若者たちが登壇する 2025.12月 第11回「**川ごみサミット ～多世代ですすめる 豊かな流域づくり ～**」(東京）への参加 2026.冬 矢作川**「流域圏担い手づくり事例集Ⅵ-2－流域圏大学－」**作成に未来創造P学生が参画

翌年2019年、京都・滋賀での同大会に参加した私たちのチームは、高らかに宣言した。われらが姉御とも慕われる**清水雅子**さんは「中部のやつらは、全員前に出てこい！」と壇上へと呼び付け、会場に向かっては「みんな！来年は中部に行きたいかー!!」雄叫びをあげる。「おー!!!」という大歓声の下、何と一瞬での合意形成がなされるという、これは「見事！」と讃えるしかなかった。

今思えば、かつて私の部下でもあった清水さんは、私が定年退職した2018年直後に「河川の仕事がやりたいのに、愛知県は女性の私にさせようとはしない。ならば辞めるわ」と宣言し、実際その通り実行した。そして建設コンサルタントに彼女が転職したばかりの年が、この時。今では会社の河川担当部署を任され、苦労しながらも大いに奮闘しているらしい。

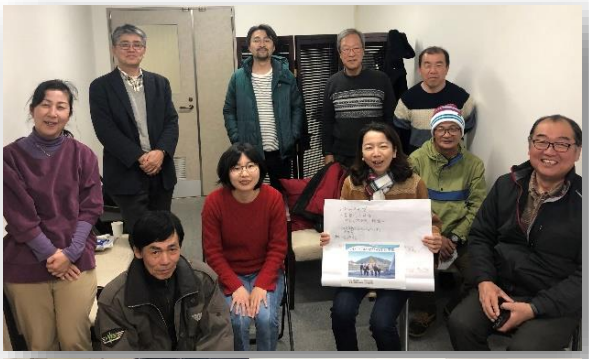
さて、直ちに「**2020年に 全国いい川ワークショップを中部で開催する**」という具体的な目標に向かって、私たちは動き出した。更なる仲間たちを巡り集め、舞台も愛知・岐阜・三重県に関連する木曽三川の長良川と定めた。会場は早くから長良川国際会議場（岐阜市）で確定し、2019年12月、この推進母体となる「**中部流域連携ネットワーク**」を立ち上げたのである。ここでは若手・若者たちを中心に据えたかった。このワークショップ初期のキーパーソンであった**延藤安弘**氏が前年に逝去したばかりで、彼の「**まちの縁側育くみ隊**」後継者である**名畑恵**さん、名古屋大学の中村晋一郎准教授（現在は懇談会・川部会座長）、**CWP 瀬川貴之**氏、新玉拓也氏（本事例集54頁参照）ら若手に声をかけ引きずり込みながら、ベテランの私らや森誠一教授（岐阜協立大学）、朴恵淑教授（三重大学）らが支える構図とした。もちろん、これに三ツ松さん以下「未来創造プログラム」の学生たちが合流していく。

万全の体制かと思われた。ところが、である。この直後に私たちはとんでもない事態に見舞われることとなるが、この時は知る由もない。そしてまた、新たなドラマが生まれていく。















新たな飛躍へ

コロナ禍を超えて










2020年の年明けから、世界中で新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミックが広がっていき、日本でも2～3月頃より騒がしくなる。4月以降、緊急事態宣言が発令され私たちも行動制限を受けるようになったが、この措置は以降２年間ほどにわたって幾度となく続いた。世間はかなりヒステリックな状況であったことを覚えているだろうか。

この年8月に開催予定であった、全国「いい川WS 中部大会」は延期せざるを得ず、2021年にも果たして開催できるのか、という事態の中で、私たちはそれまでのロードマップを再検討することになる。まずは、決して諦めないこと、むしろこの状況を踏まえた上で、より良いストーリーを創ろうとさえ決意していた。魚と子どものネットワークの新玉さんが語った言葉を忘れない。「私たちがやろうとしていることは、決して不要不急のものではない。真に必要なことであり、出来得る限りのことをしよう」と。WSそのものは延期したが、そのための活動自体は予定通り2020年度から始めることとしたのである。

2020年12月26～27日にかけて、全国をオンラインで繋ぐ「ゆく川 くる川 川談義」を開催、そして翌年2021年10月1～3日にかけて、いよいよ第13回（通算第23回）「いい川・いい川づくりワークショップ in 中部」長良川大会を対面及びオンライン併用のハイブリッドで展開することが出来たのであるが、ここまでの道のりは中々簡単に言葉では言い尽くせない。実現にあたって、決して大げさな表現ではなく、学生や若者たちの存在と力が大きかったのは確か。コロナ禍にあって、オンラインなど新しい技術を駆使しなければならなかったこと、過去にとらわれない柔軟な発想と企画力、そして少人数でも軽快に動ける機動力などにより、新しいワークショップを創造することが出来たのではないか。ただしそれは、20年以上にわたって蓄積された(全国WS)実績と経験知があってのことでもある。





すなわち、若い世代とベテラン世代などの融合によってもたらされたと考えるべきだ。実はこれらの過程で、若者たちから言われた言葉がある。大人たちはよく「世代継承」をしなければと言うが、それはある意味「無責任」なのではないか。僕たちへの責任転嫁だ。新しい社会を創らなくてはならないのであれば、一緒にやるべきだ。それぞれ世代が持っているスキルも違うのだから。その通りだ。



「ゆく川 くる川」でNSP22学生たちが作成したアニメーション動画も秀逸だ。彼ら4人が伊勢湾・奈佐の浜ごみ駆除の旅に出かけるが、最終的にラスボスに敗れてしまう。最期の「**僕たちには仲間が必要です！**」というメッセージがとても重要であり、私には「ここにいない人たちも巻き込んでいかなければ、何も変えられない!」と響いた。コロナ禍で大学内の新入生が募れなかったという切実な事情もあろう。

「ゆく川 くる川」での名畑さんから本大会に向けてのメッセージ「**継ぎながら**（次、長良）」を受取り、私たちはその後9か月を若者たちと共に疾走した。本大会でも学生たちは2日間にわたり国際会議場（岐阜市）から河口部桑名までの長良川往復を自転車で疾走する。彼ら自身の発案・企画であり、これは逐一オンラインで中継された。ここに参加しない者も、全てWSでの運営・裏方に回る。やり切った感は確かにある、がしかしながら、この大きな経験で彼ら私たちが何を得たのかは、これから次第のことになろう。まだ単なるキックオフだ。

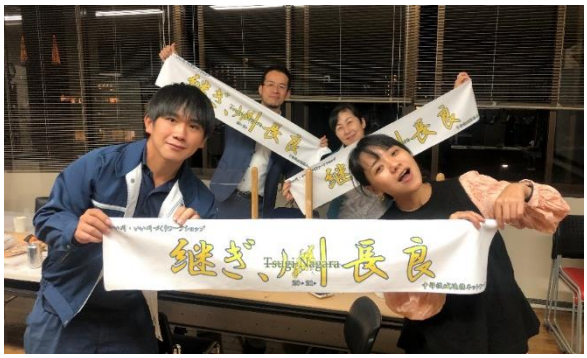
中部のWSへ

海から流域圏を考える
～ 伊勢湾、遠州灘からの視点 ～

2022年度から、中部での「流域ワークショップ」を開催すると決めていた。それは決して全国いい川WSの地方版を開催するということではなく、別な形を模索するものになるだろう。まずは長野県天竜川流域を第1回目とし、学生たちも含めて愛知、静岡県から長野県諏訪湖までのスタディツアーを3日間かけて催行してみた（2022年5月）。
天竜川源流である諏訪湖から海（遠州灘）までは、200km以上あり、実に遠い。流域面積も5,000㎢以上あり、何だか分断されているようにも思えたが、実際に天竜川流域圏市民はどう感じているのだろうか？





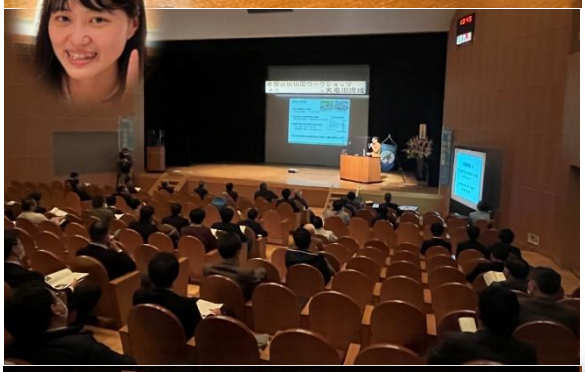






2022年11月に第1回「**中部のいい川WS in 天竜川流域**」を開催し、愛知・岐阜・三重・長野県行政の方々に、「流域治水」のあり方を語っていただき若干の違和感を覚えたこと、そして2024年1月の第2回「**中部のいい川WS in 矢作川流域圏**」タイトルを「**流域治水と言う勿れ**」とした経緯については、前回事例集「流域の視点から見た治水・環境と総合水管理」で述べた通りである。







中部でのWSにおいても、学生や若者たちが主体となるのは、当然の流れとなる。ただし第1回、第2回と若者たちの発表はされるも、「天竜川」では主に行政側からの発信が主体となってしまった。そこで、矢作川でのWSでは、若者たちによる「座談会」の場を設け、素直な気持ちを語ってもらうこととした。話は少し前後するが、ある若者から「2023年 奈佐の浜での学生合宿」での出来事が語られる。「合宿は本当にとても楽しくて堪能していたのだけれども、でも翌朝、近藤さんから『**今から見るもの、ここで起こっていること（漂着ごみの惨状）は決して他人ごとじゃない！**』と言われたことでハッとした。**それまでは確かに他人事でした**。**これからは自分ごととします**」との発言。私自身すっかり忘れていた言葉、あれが響いたんだ。その場にいた三ツ松さんや清水雅子さんに確認すると、「近藤さんにしては、珍しくいいこと言っていたよ」と返される。そうか、流域圏からの全てのアウトプットが海へと流れ着く。**伊勢湾など海から流域を繋げていくことがとても重要**かもしれないと、逆に気付かされた。発言の主、筒井千遥さんに感謝する。この筒井さんと平野智也さんは、自分ごととするために「答志島でのアマモ場の再生」に目を向け始めたという。









2025年2月に開催した第3回中部のいい川WSでは、その流れを汲んで「**伊勢湾から見た私たちの流域とつながり**」をテーマとし、伊勢湾沿岸の三重県四日市市で開催した。ある意味、通過点ではあるものの中部流域連携ネットワーク5年間の集大成とし、多くの人たち、世代、セクターに呼びかける。健全な流域圏社会を構築していくためのアプローチとして、まず ① **流域の入口、さらに奥へ**
② **流域を繋ぐ** ③ **全世代を繋ぐ** ④ **セクターを超える**
そして ⑤ **海から繋がる** というプロセスが有効ではないかと提案し、様々な発表と議論を展開した。













さて、ここを新たなスタート地点として、伊勢湾（遠州灘も含めて）流域圏は一体となり、繋がっていこうか。

そのためにも森のことも海のことも他人事にしないで、現場へ行こう。その大きな課題はたとえ都市の人にとっても、必ずや自分ごとであるはずだ。より多くの人々が、それに気づかなければならない時代に来ている。



若者よ
海へ行こう！

ここで起きていることは他人ごとではない！

奈佐の浜プロジェクトの学生たちは、元々毎年答志島を訪れてはいた。ただし、愛知、岐阜からもバスを仕立てて日帰りのごみ拾いであり、お客様にしていたのかもしれない。2014年から学生交流会を開催、未来創造プログラムとしては2019.8月の答志島、同年12月佐久島合宿を実施したところで、コロナ禍を迎えた。

学生部会主体となる本格的な海での取組みは、長良川WSの経験を経た後、2022年10月から再び始まる。この年恒例の答志島海岸清掃も再開し、この日程に合わせた学生合宿（前日土曜日から宿泊）が展開された。企画もほぼ全て学生たちに委ねるものであり、新たなスタートを切ったとも言える。

ところが、である。この直後の11月に、岐阜県代表委員で学生たちの精神的支柱でもあった野村典博さんが急逝する。これは私自身が相当ショックだったものの、今思えば学生やOBたちはこれをも乗り越え、さらに逞しくなっていったようにも思える。別に弔い合戦という訳ではないが、この時ちょうど「日本水大賞」にも応募し、市民活動賞受賞の知らせを受けた際（2023年3月）、どさくさ紛れに野村さんの後任も含めてプロジェクト３県代表委員は全て、学生部会OBたちに担ってもらうことにした。この時はまだ全員20代だったが、誰も怯まなかった。やはりみんな逞しくなったな。

私が「**お前ら、ここで起こっていることは決して他人ごとじゃねえぞ！**」と学生たちに叫んだのは、翌年度10月、次の学生合宿の時だった。私自身が野村さん亡き後の、強い気負いも感じていたような気もする。学生たちは当然ながら毎年のように入れ代わり、新しいメンバーも加わる。その中で学生OBの存在がとても心強く感じたのも、特にこの頃からだったろうか。何であんな言葉を叫んでしまったのかは、実はよく覚えていない。今となっては、自分が発したその言葉から自分自身が学んでいる。海から流域が繋がっていくのだと。ここを見れば、全て自分ごとだとわかるのだ。

この気づきは、この時から「海の合宿」、さらには「森の合宿」を何度か重ねていくにつれ、徐々に熟成されていくこととなり、前頁ワークショップでの「アプローチ提言」に至った。世代間の交わりは私たちベテランにも、実に多くの学びを与える。時代は大きく転換しており、長く生きたからというだけで偉そうにしている場合では、決してない。


2022.10月 答志島へ










2022.11月　岐阜市へ


2023.3月　河川文化を語る会へ

「未来創造」の中で、私がたまに学生たち、特に新しいメンバーが加わった時などに言う言葉がある。「今、君たちが接している先生、あるいはこれから社会人となり接するであろう上司・先輩の方々、あるいは親であれ、これら大人の言うことを決して信用、鵜呑みしないでほしい。大人とは私を含めて、である」皆、キョトンとしている。

伝えたいこととは、大人たちが根拠としている経験なるものが、主に開発成長時代に蓄積したものであり、アップデートされているかどうかは疑わしい。経済大国と呼ばれていた時代の幻想から離れられない大人もまだ一定数おり、これからちゃんと未来と向き合おうとするのであれば、まずは自分自身で考えてほしいということ。君たちはおそらく、幻想を持っていないだろうから。

さて、奈佐の浜プロジェクト、及び学生たちのミッション（合宿等）は、その後もどんどん新しい展開を見せていく。再開後3年目の2024年10月の答志島海岸清掃では、岡谷市・小口智徳氏（諏訪湖浄化推進連絡協議会）協力の下、長野県子どもエコクラブの家族、長野放送「海と日本PROJECT／長野」、信州大学学生らの参加により、中部広域に及ぶ広がりへと繋がった。テレビ愛知、八千代エンジニヤリングによる「海と日本P／愛知」（本事例集46頁参照）も合流し、コロナ禍後では最大となる230人規模での大会となった。2日間を通じてわが未来創造・学生部会と信大MAGES（サークル）の交流は深まり、その後も継続されている（116頁参照）。

2025年度の大きな動きとしては、NSP22小浦嘉門代表、四日市大学の**千葉賢**教授（副代表）の呼びかけで、学生合宿の際に答志島桃取地区の若い漁師さんたちとの交流、話し合いの場がもたれ、課題である「アマモ場再生（保全）」に向けての意見・情報交換を行った（2025.10月）。

その後も、漁協や行政（鳥羽市など）も交えた協議が進められ、2026年4月に「桃取アマモ保全会」が誕生し、これに奈佐の浜プロジェクト及び学生OB部会も合流していくこととなる。まずは、5月30～31日にかけ「アマモ花穂採取作業」とアマモ会議から始めていく。単なるごみ問題から「**豊かな伊勢湾**」再生へと繋がっていけばよい。

2025年頃より、学生合宿運営は若者が主体というより、何も言わなくても彼ら自身が日頃からオンラインでのミーティングなどを行い、コミュニケーションを図っているようだ。これはOBの存在も極めて大きかろう。今や私たちは必要だと言われれば、その時手を差し伸べるのみである。
嬉しいというか、寂しいというか。


2023.10月 答志島へ






2024.3月 大阪へ


2024.10月 答志島へ


2025.10月 答志島へ

直接「未来創造」として取組んでいるわけではないが、「担い手づくり」という点では、最近新たに進めている企業（労組）連携についても記しておきたい。きっかけは、全国川ごみネットワークから紹介された全積水化学労働組合との協働であり、2022年より幾度かの話し合いと現地案内・調査を重ね活動の試行をしてきた。積水側では、ポスト東日本大震災後のボランティア活動場所を模索しており、こちら側としてはプラスチック製品製造にも関わる化学系企業との連携は何か十分意義があるのではないかとも思惑する。

まずは、2023年8月に全国労組幹部たちとの意見交換、答志島での海岸清掃を試行した後、2024年8月より組合員家族も含めての本格的なボランティアツアーが始まった。積水側へお願いしたのは、なるべく島内旅館などの施設を利用、可能であれば宿泊もしてほしいということ。是非、伊勢湾の恵みを堪能してほしい、社員、家族の皆さんに。

この願いは、2025年11月のツアーで実現する。私の方からは、伊勢湾漂着ごみの現状、小浦さんからは現地でのマイクロプラスチックそのもの、その現状について説明させていただいた。社員の方々が奥様や子どもたちから「こんな風にならないよう、しっかり仕事してね」と叱咤される風景を眺めながら、「こんな風に伝わるのがいいんだろうな」などと思う。労組との連携が良いのは、社会貢献と銘打った単なる作業奉仕に終始するのではなく、社員・家族への福利厚生事業としても行える点にあろうか。

積水化学を経由して、2025年5月には業界団体「合成樹脂産労連」セミナーでの講師も依頼された。これに参加していた住友ベークライト労組（プラスチック製造を始めた老舗と言っても良い）からは2026年1月、ボランティア活動をしたいとの協力要請があり対応する。そして、海岸清掃数日後、組合事務局よりメッセージをいただいた。

「初めて奈佐の浜海岸清掃に参加して、マイクロプラスチックが、これほどまでの惨状だとは思わなかった。社員同士で何が出来るのかを話し合ってみたい」との感想。全ての方々に現状を知っていただく意義は大きそうだな、と決意を新たにする。道は遠そうではあるが。

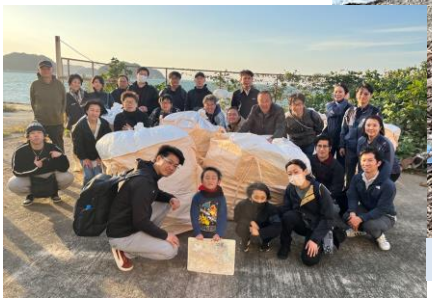

2022.12月 全積水化学労組×戸田家
宍倉支配人と打合せ


2023.8月 積水化学労組幹部 学習会


2024.8月 積水化学労組家族 清掃会

2025.11月 積水化学労組家族 清掃会


2024.12月 JICA研修／廃棄物（戸田家にて）



若者たちよ　東へ西へ！

開始2018年時点、私の手元には30万円ほどの基金が残っており、それを使って学生たちを12月の北海道でのWSへと送りこんだ。全国水環境交流会の学生スタッフにも応募させたので、１チーム編成できたのであるが、この経験が「**学生たちの覚醒**」と言ってよいほどの効果を生むとは、これほどとは想像していなかった。学生たちの多くは普段バイトに勤しんでおり、それほど自由に動けるわけではない。そうか、それほど大きな予算でなくとも、若者たちの旅費交通費・宿泊費程度を工面すれば、可能性が大きく広がるのだと気がついた。それで「未来創造プログラム」へと繋がる。

私たちは、学生たちを大人として対等に扱い、きちんと「役割」を与えることに専念した。自分たちで考え、やれば良い。これしきの場で失敗など何もないのだから。活動してわかったことは、「中間支援」の重要性である。この「繋ぐ」機能については、行政も企業もかなり劣化していることに驚いた。しかも、である。企業などの市民活動支援に関する助成金は、効果が目に見える（発信効果が高い）ごみ拾いだとか、植林活動などには注目するが、地味な人材育成や「中間支援団体」を軽んじる傾向にある。現実問題として、「未来創造」を運営する「地域の未来・志援センター」は、2022年度をもって企業からの助成金が打ち切られ、2026年にはNPO法人登録抹消したばかりである。だが、愚痴っている暇はない。担い手づくりなど、やるべきことはやらねばならないのだから。若者らは、今も元気に東へ西へ、海外などへも出かけ発信を続けている。

2018.12月 北海道十勝WSへ



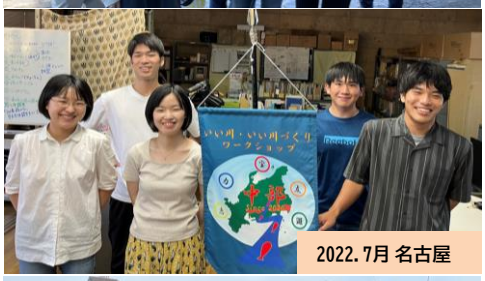


2019.10月 滋賀WSへ



2021.5月 天竜川へ





2022.7月 名古屋



2024.6月 大阪、神崎川へ

2022.10月 鳥羽市、答志島へ



2024.10月 答志島学生合宿に来たMAGES



2024.10月 答志島へ





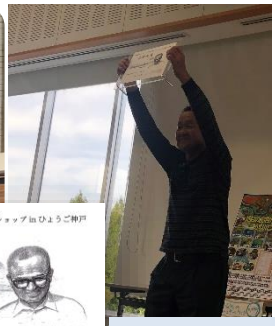
地域の未来や奈佐の浜プロジェクトのみであったならば、例え旅費交通費などが確保されたとしても、その運営は難しかったであろう。私たちは様々なネットワーク組織と連携、その場を活用することで活動範囲を広げていった。全国水環境交流会は元より、**愛知・川の会**、（新設）中部流域連携ネットワーク、そして矢作川流域圏懇談会との共同である。懇談会との連携については、後述「森へ行こう！」で詳しく述べる。

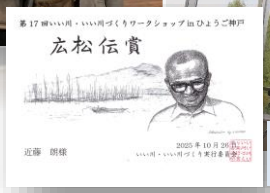


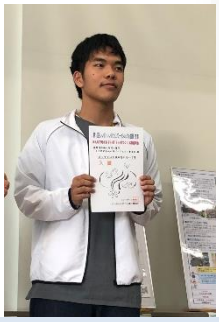
2018.12月 第21回 「いい川WS」北海道大会で準グランプリ受賞 見屋井、浅井さんら



2025.10月 第27回「いい川WS」ひょうご神戸大会 近藤と仲間たち







2019.10月 第22回 「いい川WS」京滋大会 小浦嘉門（広松伝賞）、平野智也さん



2023年の「日本水大賞」に応募した最大の動機は、活動資金の確保であり、大賞賞金の200万円に目が眩んだ。しかしながら、市民活動賞の30万円でも十分な旅費交通費に充てることが出来るため、非常にありがたかった。またこういった「晴れやかな場」に若者たちが登壇することで、新たなモチベーションが湧いても来るだろう。水大賞表彰式後の懇親会で三重県代表委員の下田菜生さんが、「5年後には私が大賞を獲ってやる！」と宣言していたのが、実に頼もしかった。



2023.6月 第25回 「日本水大賞」での下田菜生さん

さて、ネットワークの連携は、更なるネットワークの広がりも生んでいく。2025年12月の**全国川ごみネットワーク**が主催する第11回「**川ごみサミット**」に初めて登壇した**米田紗歩**さん（元学生部会長）と三ツ松さんであったが、同席したIVUSA（NPO 国際ボランティア学生協会）の方々、MAGESとも交流を果し、2026年3月にIVUSAが主催する活動（長野県飯田市）へと、合流してゆくのである。これについても後述したい（116頁参照）。



← 左からMAGES 眞嶋美波さん IVUSA 箭野純貴さん、（学生）出水響さん





2025.9～11月 全世代OLミーティング
2025.12月（東京） 川ごみサミット に登壇した三ツ松さん、米田紗保さん



2023.8月 第23回 韓国「川の大会」プレゼンする今井和樹さん

島しょ、伊勢湾沿岸の地域デザインを考える
～ より多くの人々の自分ごととするために ～



未来創造プログラム開始後初となる、地域の未来主催「**山川里海情報交流会**」が2019年2月に名古屋市内で開催された。この時基調講演を行った木村尚氏（NPO 海辺つくり研究会）、DASH海岸などマスコミにもよく登場する海洋環境専門家であるが、彼からはそこで貴重な示唆をいただいた。



海の環境を守るためには、思いのある一部の方々の努力だけではダメで、<u>今はここにいない多くの市民を巻き込んでいかなくてはならない</u>、と。ここに来ていた魚と子どものネットワーク新玉拓也代表（本事例集54頁参照）は、この言葉に感銘を受けたようで、以降さらに活動の幅を広げていった。私も大いに共感する。


2019.8月 答志島での学生合宿

2019年8月に「未来創造」として初めての海合宿が答志島で行われた。四日市大学**千葉賢**研究室ゼミ生だった**浅井雄大**さんは、この時の体験から「魚など<u>美味しい海の幸で仲間を集めよう</u>」と気づいたらしい。




OMM 内藤美和、池田ちかさん

同年12月には、愛知県佐久島での学生合宿も実施した。ここでは、アートを使った島づくりが展開されており、よそ者の**オフィス・マッチング・モウル**(**OMM**)の方々と地元「**島を美しくつくる会**」**鈴木喜代司**さんの連携が魅力的だ。


2019.8月と12月 学生たちは佐久島へ





さて、答志島漁師の小浦嘉門代表は、実に奥ゆかしい方であり「男は黙って」と、自分がされているプロジェクトを地元の方々にも伝えなかった。2025年に「豊かな海づくり大会」大会会長賞を受賞するに及んで、さすがに活動が知れわたる。むしろそれが大事なのであり、「大いなる海の危機」は皆に共有されなければいけないのではないか。

2025.11月 豊かな海づくり大会で表彰される**小浦**さん




2018.豊かな海づくり大会では「**島を美しくつくる会**」**鈴木喜代司**さんが表彰されている


佐久島にて **高橋伸夫**さん、（西尾市）**三矢由紀子**さん

未来創造プログラム 2018-2026

緑色は今までの担い手事例集で掲載された団体・人など

年度	未来創造プログラム（地域の未来／NSP22）と中部流域連携ネットワークのあゆみ	未来創造プログラム 海へ行こう！（川へも行こう！）	未来創造プログラム 若者よ　森へ行こう！
2018	2018.～「**未来創造プログラム**」のスタート ／NSP22 **学生部会**設立（７月学生懇談会） 2018.12月「**いい川WS北海道大会**」発表 ／NSP22準グランプリを受賞	2018.6月 NSP22 **吉崎海岸エクスカーション**（三重県四日市）開催／森一知、下田菜生 2018.10月 第8回 **答志島清掃／学生交流会** 2019.2月「**山川里海情報交流会**」（名古屋） ／木村尚、新玉拓也ら参加	2019.1月 学生部会 **石徹白**（岐阜県）**合宿**
2019	2019.10月「**いい川WS 京都・滋賀大会**」 ／「**第23回大会を中部開催**」で宣言する 2019.12.20 「**中部流域連携NW**」設立	2019.～ 学生部会代表 **平野智也**（四日市大） 2019.6月 NSP22 **長良川エクスカーション**（岐阜市）開催／野村典博、富樫幸一 2019.8月 学生部会 **答志島**（三重県）**合宿** 2019.10月 第9回 **答志島清掃／学生交流会** 2019.10.22 **魚と子ども** 新玉×学生懇談会 2019.12月 学生部会 **佐久島**（愛知県）**合宿**	2020.2月「**山川里海情報交流会**」（垂井） ／坂本貴啓、**唐澤晋平**、**下田菜生**ら参加
2020	2020.春～ **新型コロナウイルス感染拡大** 2020.12月「**ゆく川 くる川 川談義**」運営	2020.夏～ 学生部会がNSP22の**キーパーソンヒアリング**	2020.7月 **三ツ松**氏が初めて矢作川・山部会参加
2021	2021.10月「**いい川WS 中部・長良川大会**」 2021.12月～「**流域圏担い手づくり事例集Ⅲ－学童保育木造化－**」三ツ松氏が参画	2021.～ 学生部会代表 **今井和樹**（岐阜大学）	2021.～ 地域の未来・志援センターが「**森と子ども未来会議**」を伴走支援 2021.～ 岐阜大学学生が運営を担う 2021.11月 NSP22学生（**米田沙歩**さん）初めて矢作川流域圏懇談会・山部会（足助）に参加 2022.2月 初めての「**森のミライ合宿**」開催 ／第1回（試行版）**根羽村**（長野県）**合宿**
2022	2022.9月「**いい川WS**」（東京）参加 2022.11月 NSP22 野村典博氏が逝去 2022.11月「**中部のいい川WS① in 天竜川**」～ **中部で流域治水を語る** ～ 2023.1～3月「**流域圏担い手づくり事例集Ⅳ－都市の木質化－**」作成に学生が参画 2023.3月 第208回「**河川文化を語る会**」NSP22講演／**３県代表を若手へと移譲する**	2022.～ 学生部会代表 **米田沙歩**（岐阜大学） 2022.5月「**天竜川まるごとツアー**」開催 2022.10月 第10回 答志島海岸清掃 ／第1回「**答志島ミライ合宿**」OB含め開催	2022.7月「**こわれない道づくり**」長瀬土建協力 第1回 **高山林業合宿**（岐阜県高山市） ／岐阜大学 **米田、川野純也**参加 第2回（12月）／信州大学 川崎、佐竹参加 2022.8月「**森のミライ合宿**」第２回 **根羽村合宿** 信大生が初参加／山地酪農、根羽村森林組合 2022.11月 信大学生（**佐竹、川崎**さん）初めて矢作川流域圏懇談会・山部会（足助）に参加 2023.1月 矢作川・山部会（幸田町）にて 信大学生・**川崎**さん×**丹羽健司** 懇談
2023	2023.6月 NSP22「**日本水大賞**」**市民活動賞** 2023.8月 **韓国「川の大会」** 今井和樹君発表 2023.9月「**いい川WS in 東北**」参加 2024.1月「**中部のいい川WS② in 矢作川**」～ **流域治水と言う勿れ** ～ 開催 2024.3月「**流域圏担い手づくり事例集Ⅴ－伊勢湾の豊かさ－**」作成に学生が参画	2023.～ 学生部会代表 **川野純也**（岐阜大学） 2023.10月 第11回 答志島海岸清掃 ／第2回「**答志島ミライ合宿**」「**ここで起こっていることは他人事じゃない！**」	2023.～ 信州大学学生が運営を担う 2023.7月 矢作川流域４森林組合「**森林技能者交流研修会**」開催～「森の人をつなぐ」発刊へ 2023.9月「**森のミライ合宿**」第３回 **根羽村合宿** 人環大生が初参加／村人たちとの交流 2023.9月 第3回 **高山林業合宿**（岐阜県高山市） ／長瀬土建協力＊**根羽村森林組合**も参加 岐大 **鈴木智子**、**川野**、信大 **渡邊、石原龍太**
2024	2024.4月「**流域治水から流域総合水管理へ**」深化させるよう総理官邸から指示 2024.9月「**いい川WS in 白山手取川**」 2025.2月「**中部のいい川WS③ in 伊勢湾流域圏**」（三重県四日市）開催 **海から見たら全ての流域は運命共同体だ！**	2024.7月「**流域圏担い手づくり事例集交流会 in 鳥羽**」海の博物館及び答志島で開催 2024.10月 第12回 答志島海岸清掃 ／第３回「**答志島ミライ合宿**」長野県参加 長野県岡谷 **MAGES**（信大学生）も参入 「**海と日本**」テレビ愛知、八千代エンジ参加 2025.2月 **吉崎海岸清掃・鈴鹿川河口 エクスカーション**（三重県四日市市）開催	2024.5月 矢作川・山部会（豊田市旭） 2024.7月矢作川・山部会（恵那市岩村百経） 信大学生・OB・**川崎、渡邊美里**さん参加 「**水循環基本法が流域管理の基本法令だ！**」 2024.9月「**森のミライ合宿**」第４回 **根羽村合宿** ／大久保村長との懇談、飯田市の木の家づくり 2025.2月「**森のミライ合宿Ⅴ in 旭・足助**」 ／「**関係人口**」テーマ、「**自給家族**」**鈴木辰吉**猟師・**清水潤子**氏、**山本薫久**氏ら協力
2025	2025.4月「**循環フェス名古屋**」ブース参加 2025.10月「**いい川WS in ひょうご神戸**」 ／学生・OB部会メンバー多数が実行委員 2025.9月～「**全世代 リレーミーティング**」 2025.12月「**川ごみサミット ～多世代ですすめる 豊かな流域づくり ～**」(東京）参加 ／**未来創造プログラム、IVUSA、MAGES** 2026.冬「**流域圏担い手づくり事例集Ⅵ-2－流域圏大学－**」作成に学生が参画	2025.5月「豊田市 **児ノ口公園・龍川エクスカーション**」（**愛知・川の会**主催）参加 2025.10月 第13回 答志島海岸清掃 ／第４回「**答志島ミライ合宿**」**MAGES**共**アマモ場再生**に向けた答志島桃取若手漁師さんたちとの懇談・交流会 2025.11月 第44回「**豊かな海づくり大会**」三重大会にて大会会長賞を受賞 2026.3月(答志島)「**桃取アマモ保全会**」設立 **小浦嘉門**代表／**NSP22**が構成員となるOB,学生たちも参加する	2025.～ 人間環境大学学生が運営を担う 2025.6月「**海上の森スタディツアー**」（瀬戸） ／**曽我部行子**氏、**松沢孝晋**氏協力 2025.6月「**長野県天龍村スタディツアー**」 ／**渡邊(於保)美里**夫妻始め、天竜村の人々協力 2025.9月「**森のミライ合宿Ⅵ in 天龍村**」 ／祭り、農業による「**関係人口**」テーマ **於保**夫妻始め、天竜村の人々の協力 2026.3月「**伊那谷環境保全協働プロジェクト**」（長野県飯田市）開催／ **IVUSA**共同事業、**いなだに竹Links 曽根原** ×未来創造+MAGES 2026.3月 「**女子よ 森へ行こう！**」**宇角佳笑**さんへの取材（担い手事例集Ⅵ-2）
2026	2026.4月「**循環フェス名古屋**」開催 2026.11月「**いい川WS in 四国こうち**」	2026.5月「**桃取アマモ保全会**」活動開始 2026.10月 第14回 答志島海岸清掃 ／第５回「**答志島ミライ合宿**」	2026.6月「**長野県根羽村スタディツアー**」 ／「山地酪農」**幸山明良**さん協力 2026.9月「**森のミライ合宿Ⅶ**」開催

若者よ
森へ行こう！

やはりここも他人ごとではない！
～ 矢作川流域圏懇談会から広がっていく ～

流域をきちんと考えるのであれば、森へも行かねばならない。コロナ禍前の取組としては、故野村典博氏の協力を得て、2019年1月に郡上市石徹白地区での学生合宿を行った。「未来創造」合宿は海・山も通じて、これが最初となろう。この頃のリーダーとしては、三ツ松さんの他、地域の未来・河合良太さんの存在に触れておかなければならない。2019年度をもって一旦、愛知・岐阜（伊勢湾流域）を離れてしまうが、頼もしい兄貴であった。

河合良太氏最後の仕事となる2020年2月「山川里海情報交流会」は、岐阜県垂井町の山間地で行われた。若者たちによる活動発表とセッションが主体となるが、今思えば、そこに学生たちに交じって、**唐澤晋平**氏（**奏林舎**）、新玉拓也氏、**下田菜生**氏などが参加していたのである。この時既に、林業に関わることを目指していた**平野智也**さん（四日市大学）が、三ツ松さん紹介により奏林舎研修も受けていた。この後の交わりを象徴するような交流会ではあったものの、この直後よりパンデミックに突入する。

コロナ禍を経て、改めて「**森へ行こう！**」プロジェクト開始されたが、「**矢作川流域圏懇談会**」との関わり、繋がりが極めて重要となった。三ツ松さんは既に2020年7月の山部会（額田）から参加済、岐阜大学の**米田紗歩**さんが意を決して臨んだのが2021年11月のことで、ちょうど全国WS長良川大会でを終えたタイミングで、これは山部会（足助）夜から。ここより**根羽村森林組合**の**今村豊**氏との繋がりを経ての2022年3月、ある意味試行版として「**林業のミライ合宿**」**根羽村**での実施に至った。試行版というのは、当初目標としていた人間環境大学の学生が、まだコロナ禍の制約も受けており参加を断念。代わりにこの頃、**学童保育木造化プロジェクト**取材先として巡りあった**桑山工務店**の**桑山久**さんと共に、そこに関わっているという名城大学（建築）の学生さんたちとの縁を繋いでもらい、合宿に参加いただくことになった。彼女たちは木造建築を目指しながらも、本物の森林（林業現場）を見たことがないのだという。

「未来創造」米田さん、**飯坂温子**さん含め学生は5名（なぜか女子のみ）に桑山さんが加わる少人数ながら、とても面白い合宿となった。このレポートについては、**2021事例集・流域圏Ⅲ 25～26頁**に掲載している。


2019.1月 地域を知る石徹白合宿

河合良太氏




2020.2月 山川里海情報交流会 in 垂井

山の恵み


2021.11月 初めて懇談会・山部会（足助）に参加した米田紗歩さん






2022.3月 学生合宿 根羽村へ





妄想の共有　～ 森の時間とは ～

根羽村での研修は、この時を含めて2024年まで4回実施している。さて根羽村というのは、村民全世帯が森林を所有する森林組合員であり、その代表理事を村長がつとめる村だ。植栽から加工利用までの「**トータル林業**」を掲げ、矢作川源流域としての誇りを持つ。合宿に協力をいただいた**根羽村森林組合**の方々は、**今村豊**参与はじめ、**小野隆治**さん、**山本徹**さん、**山本英介**さん、**木村勇太**さんなど全員がＩターンによる移住者とのこと。作業研修、「どこでもサウナ」体験など終えた後、彼らの内3名と学生たちが意見交換の場も持った。

小野さんの言葉は特によく覚えている。「今村君は夢多き妄想家である。しかしながら、その妄想を現実に具体化しているのは俺たちなんだ」と。それを聞きながら「でも、その妄想をみんなで共有しているんだね」と妙に納得する。また後の合宿にて「山の暮らしはどうなの？」と尋ねた時に聞いた言葉だっただろうか。「自分には時間だけが山のようにある。それをどう使うのかは、全て自分が決めていける。誰かが決めてくれるわけではない。明日は何をしよう、何を創ろうかなどを考えていると毎日がワクワクする」。ハッとした。

特にまち（都市）に住み、公務員、会社員などやっていると、何も考えなくても勝手に「時が流れていってしまう」ことがある。「**都市の時間**」「**山の時間**」の違いについて、思わず考え込んでしまった。きっと「**海の時間**」というのもあるのだろう。

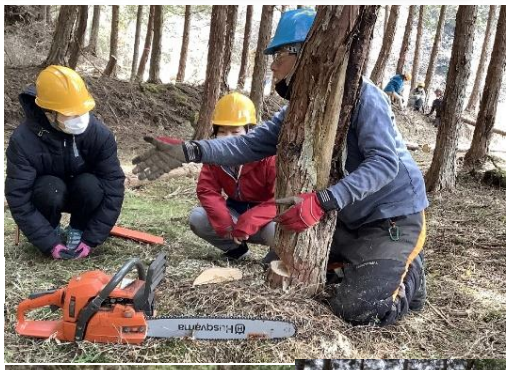
この後、現在まで私たちは様々な森へと出かけて行くのであるが、根羽村をはじめとして学生たちが訪れた地域（自治体）データを下表にまとめてみる。少しはイメージが湧くだろうか。

根羽村森林組合、根羽村HPより　凛々しい森の民たち





2022.3月 学生合宿 根羽村へ





学生合宿等訪問先自治体データ／ 人口は2022年度時点（総務省）

流域	自治体	面積 (㎢)	人口 千人	人口密度 (人/㎢)	備　　考
天竜川 長野県	岡谷市	85	48	565	2022.5月 天竜川視察
	下諏訪町／諏訪湖	67	19	289	2022.5月 天竜川視察
	南箕輪村	41	16	386	信州大学伊那キャンパス
	宮田村	55	8.9	163	2022中部WS 天竜川
	駒ケ根市	166	32	194	2022中部WS 天竜川
	大鹿村／小渋川	248	0.9	4	2022.5月 天竜川視察
	飯田市	659	98	149	2026.3月 IVUSA
	天龍村	109	1.2	11	2025.9月 合宿
	売木村	43	0.5	12	2015 天下杉 公演取材
矢作川 長野県	平谷村	77	0.4	5	2025.7月 山部会
	根羽村	90	0.9	10	2022~2024 合宿
愛知県	豊田市（旭地区）	82	2.4	29	2025.2月 合宿
	豊田市(足助地区)	193	7.1	37	2025.2月 合宿

「森へ行こう！」第１回として銘打った学生合宿は、2022年8月に開催された。実はこの時も人間環境大学学生は参加が叶わず、ただし環境科学部（森林）江口則和准教授に参加いただく。引続き根羽村森林組合に協力いただくことに加えて、同地で山地酪農を展開する幸山明良さん、「ねばのもり」主宰する杉山泰彦（マギー）さんなどにもアテンドいただき、多彩な体験を経験することが出来た。大久保憲一村長には、役場の木づかいについても案内いただくことに。根羽村の取組については、本事例集62頁でも取り上げており、併せてご覧いただければ幸いである。

その後の「森のミライ合宿」展開を考えると、この場で大きな役割を果したのは、(株)アジア航測の若きホープで、この年から矢作川流域圏懇談会事務局補佐を担うようになった**筒井千遥**さんであろう。信州大学のOBでもあり、母校へと声をかけてもらい信大学生2名の参加が叶った。これが後々の展開に大きな飛躍をもたらす。学生は引続き岐阜大学、名城大学（建築）など膨らむ。懇談会からは筒井さんの他、海部会の**高橋伸夫**氏（野鳥の会）、前年事例集「学童保育木造化」取材先建築家の**東海林修**氏などの参加を得て、さらに関係を深めていく。

根羽村合宿参加者の**川崎海斗**さん、秋の天竜川WS（宮田村）に来てくれた**佐竹寅次郎**さん、この信大学生2名は筒井さんと共に同年11月、豊田市足助地区で開催された懇談会山部会へとやって来る。更に彼らは、**2022事例集「都市の木質化」**取材（**名畑恵**さん）にも参加し、川崎君に至っては2023.1月幸田町で開催の山部会にて**丹羽健司**さんに捕まり、「**森の人をつなぐ**」（人材育成・技能研修）プロジェクトに、喜んで巻き込まれていく。

そうか、ニワケンも信州大学OBだった。

根羽村森林組合HPより
試行錯誤を繰り返し村を守る、森の民たち



2022.8月 学生合宿 根羽村へ









「森の人をつなぐ」懇談会山部会 2024.2月発刊



2023.1月 事例集「都市木」取材／信大生・川崎、佐竹君







信大OB 筒井千遥さん

2022.11月 山部会（足助）参加する信大生たち

実のところ、2022年11月に開催された第65回山部会WG（豊田市足助地区）というのは、今思い返すとかなり印象深い回であり、信大生２名の参加の他、根羽村森林組合からいつもの今村豊参事以外に、合宿にも協力いただいた山本英介さん、green maman の宇角佳笑さん、安城市民の太田真智子さんらも参加という新鮮な顔ぶれ、そして話題提供者として「**自給家族**」の鈴木辰吉さんも参加している。この後の「学生よ 森へ行こう！」展開を踏まえると、とても興味深い。これが山部会の魅力でもあろうか。



2022.11月 第65回山部会（足助）WGに参加する多様な人びと

さて、2022年度をもって地域の未来への企業助成が打ち切られたため、2023年度から三ツ松さんは「中部リサイクル運動市民の会」へ転籍となるも、「未来創造」は継続していく。2019年から、おいでん・さんそんセンターが運営していた「豊森なりわい塾」も終了し、2023年度からは「**山里ひとなる塾**」が開講した。この頃がまた、一つの時代の転機でもある。

2023.9月 学生合宿 根羽村へ！Ⅱ



2023年9月、第2回根羽村「森へ行こう！」合宿が開催され、試行含め通算3回目にして初めて人間環境大学学生の参加が叶う。岐大生と共に前年の流れから、やはり信大生が、新しいメンバーも加わり躍動した。　森林組合協力の下での林業・伐木体験も約30名程の規模で行われ、中々の壮観である。

学生たちの希望もあって、今回特にテーマとしたのは「**山村の暮らしを学ぶ、村民の方々と交流する**」ことであり、山本英介さん、地域おこし協力隊の西川彩花さん、そして村役場職員の方々も巻込みながら、あたかも村全体との交流を果したようだ。二日目は、公民館（しゃくなげ）にて古老・片桐亀十さんの根羽村の歴史のお話を聞いた後、いくつかの班に分かれて村民宅を訪れ各々思い思いにお話を伺った。これを実施するにあたっては、役場から村内へと大々的に募集をかけていただいたようだ。今思えば、であるが、私たちはとんでもなく大それたことをしてしまったのではないだろうか。この結果については再度集まり、皆で共有した。（次頁）










信州大学


人間環境大学


岐阜大学も加わり学生たちで　「月瀬の大杉」前にて

私が学生たちと共に訪れたのは、実に「可愛いおばあちゃん」の家だった。美味しい地のものを食べさせていただきながら話を伺ったが、学生たちは一瞬でファンとなってしまい、後日「また会いに来るね」と言って、実際に再訪した女子たちもいたという。この頃はまだ「**関係人口**」という言葉にも私は馴染みがなかったのであるが、思い返せばこういうことなのだろう。

ほとんど初めて会ったであろう他大学の学生たちとも、二日間の交流で瞬く間に馴染んだようで、これが一番大きな成果なのかもしれない。初日夜の学生同士の懇親会では果てしなく語りが続いており、二日目も「月瀬の大杉」にて解散したのであるが、誰も中々帰ろうとしなかったという状況が、実に印象的な光景として私の脳裏に焼き付いている。写真の笑顔をよくご覧あれ。

村民への声かけ



次回に向けて推進役に手を挙げたのは、この時初めて参加した信州大学の渡邊美里さんと牧野純怜さんである。佐竹君、川崎君も全面的に協力するとのこと。実際彼ら（石原龍太君含め）は、その後の山部会や**中部のいい川WS 矢作川大会**（2024.1月開催）での根羽村合宿プレゼンなども積極的に発信していく。なお、地域の未来では、この学生合宿とは別に岐阜県高山市で「こわれない道づくり」研修（協力;長瀬土建）というのを2022～2023年にかけて3回程実施しているが、これに学生たち（岐大、信大）と根羽村森林組合が参加している（現在は未実施）。

2024.1月 中部いい川WSでの発表（豊田市能楽堂にて）



2022～2023 こわれない道づくり研修（高山市）



2023.10月 答志島合宿へも参加・交流



さて私が、「**ここで起こっていることは他人ごとじゃねえ！**」と叫んだのは、この根羽村合宿翌月の答志島でのこと。この時にも信大からは牧野さん、佐竹君、川崎君をはじめ5名ほど来てくれており、山と海が繋がっていくという明るい希望が見えていた。それにしても、何というフットワークなのだろう。

2024.3月 三重県鳥羽市「海の博物館」取材する信大生たち



2023流域圏事例集Ⅴ「伊勢湾・三河湾の豊かさを考える」取材は、2024.3月頃まで続けられており、これにも信大学生やOBとなった米田紗歩さんなど、積極的に関わってもらっていた。流域圏事例集としては初めて本格的に海の問題を主題とした試みでもあり、単に海域だけを取り上げるのでなく流域圏全体の課題として捉えようとした。発刊した後の「事例集交流会」は、2017年初回以降これが第5回目となり、当然ながら初めて愛知県以外の海域・鳥羽市にて開催、これに愛知・三重・長野県などから実に多くの多様なメンバーが参集する。とりわけ、この事例集の中で蔵治光一郎山部会座長が「伊勢湾・三河湾と流域の森林」問題を提起していることの意義はとても大きい。だから、林学を学ぶ信大生たちも参加してくれているのだろう。

2024.7月 三重県鳥羽市にて「事例集交流会」



水循環基本法を理念として　～ 流域総合水管理を意識する ～

2024年度からは、「未来創造」も新しいステージに突入したような感覚がある。5月の山部会(豊田)において、蔵治座長より「**流域治水から流域総合水管理への深化**」するよう国の指示があったと聞き、そのベースでもある「水循環基本法」自体が私たちの未来、あるいは流域圏懇談会の理念そのものではないか、との思いに至った。7月山部会で続報を聞くころには、この思いは確信へと強まり、以降少なくとも私は、この考えを基本に様々な課題を考えていく。よくよく考えてみたら至極当たり前のことなのかもしれない。これによって前回事例集(公開講座)、今回事例集「流域圏大学」へと繋がっていくわけでもある。

懇談会運営上での大きな変化もあった。9年間事務局補佐を担ったアジア航測(株)が撤退、単なる委託先というより同志という感覚でもあったため、インパクトは大きいが仕方ない。本稿では特に若手リーダーとして筒井さんを紹介したが、活躍は彼女だけではない。「担い手づくり」として敢えて紹介させていただくと、2021年長良川WSを盛り上げてくれた星剛介さん、2023事例集「伊勢湾」を共に取り組んだ向井雄紀さん、筒井千遥さんの後輩でやはり信大OBの嵐裕介さんなどの若手は数えきれず、今までの学生たちへの影響は計り知れない。まさに戦友たちである。

学生たちの「森へ行こう！」に話を戻そう。信大渡邊美里さんは、2024年6月山部会/(矢森協20年)「森づくりシンポジウム」、7月山部会(岩村）にも参加しながら、牧野さんと共に着々と9月の根羽村合宿Ⅲへ向け準備を進めていた。この頃は上級生の佐竹寅次郎さん、石原龍太さんが大学院へ進学、川崎海斗さんは何と山部会の縁もあり、信州中川村「ふじくぼ林産」（齋藤真吾代表）へ就職する。齋藤氏も山部会によく来てくれるようになった。なお岐阜大の川野純也さんは、この年に林野庁へ入庁している。



気がつけば、「未来創造」学生部会を引っ張ってきた諸先輩方はほぼ社会人となっており、県庁や学校の先生、建設コンサルタントや廃棄物・農業・食品関連企業など、様々な世界へと旅立って行った。既に転職した者もいる。大学専攻に直結する者、しない者、それぞれではあろうが、それらはある意味どうでも良い。あらゆる機会を通じて得た「本質的な学び」から、私たちの「真に豊かな生き方」を探求するため、不断の努力が出来るのかどうか、しかも楽しく、である。偉そうに言ってはいるが、これを一番伝えたいのは古希近い自分自身（近藤）に向けて、なお「自戒の言葉」でもある。



2024.4月 答志島へ 事例集交流会準備



2024.4月 岩村HYAKKEIへ

嵐、向井さん

星剛介さん

石原淳さん



2024.7月 岩村 山部会へ

渡邊美里さん



2024.8月 根羽村へ



2024.9月 学生合宿 根羽村へ！Ⅲ

2024.9月 学生合宿 根羽村へ！Ⅲ

2024年9月1日～2日にかけて第3回目となる根羽村合宿が開催された。折しも台風が列島を長期間迷走するというタイミングと重なったものの、ギリギリまで雨雲の状況を見ながら決行、根羽村では晴れていたが、当初彼女たちが思い描いていたプログラムのいくつかは中止を余儀なくされた。仕方がない、それも人生さ。この状況の中で、関係者と連絡をとりながら、次々と計画を修正していかなければならない。彼女たちは柔軟に対応し、よく乗り切ったと思う。一番残念だったのは、最も多くの学生が参加する予定であった人間環境大学が全員不参加となったことだが、大学行事としての参加形態であり仕方ない。今回も江口先生は来てくれた。また、2年ぶり山地酪農・幸山さん協力の下、ハッピーマウンテンプログラムは催行することは出来た。









今回最大のミッションは、今までどちらかと言えば森林組合に頼り切り合宿を実施してきた面があり、これを持続可能な取り組みとするためには、直接村役場と繋がる必要があるのではないか、ということで学生たちと大久保村長とが語り合う場を設けるとしたチャレンジにある。まず彼女たちは町長への思いを手紙を書き、それを渡すことで懇談の場が実現した。根羽のトータル林業のこと、「流域産材」の意義を考え、根羽杉を県境を越えた愛知県でも使ってほしいことなど語ってもらい、当初予定時間をはるかに越えて交流いただいた。良かったね！






＊通常行政では「地域産材」として木材の県内利用が優先されることが多い

翌日は二手に分かれ、渡邊・牧野班は流域を越え、飯田市（天竜川流域）へと向かう。20年程前から根羽杉を使った家づくりを進めている建築家・新井優さんを訪ねてのことで、彼は2002年「**伊那谷の森で家をつくる会**」を設立されている。南信州では当時、根羽村森林組合に古い製材機があるのみだったそうで、その頃から根羽杉のブランド化、さらには南信州全体での地域材の価値を見直す取組みが始められたとのこと。現在では、飯田市にも（**飯伊**）**森林組合**が存在するとのこと。



実は、新井さんのことを紹介したのは、根羽村森林組合の大久保裕貴総務課長であり、今村豊さん後任の石原稔明参事共々、親身に対応いただいた。お話を伺ったCafe「Cider Barn ＆ more」も素敵な場所であり、新井さんの建築作品、しかも森の中。シードルの美味しかったこと。さて、前日大久保村長の話も含め地域材、流域材を使うことが、何故良いことなのか、それを考える研修ともなった。

根羽合宿が終わって、「今年度もう一回やらないか？」という声があがった。4年生で来年就職、天龍村への移住も決まっている渡邊さん、「やりきった！」はずの彼女にとっては酷な言葉にも聞こえる。江口先生はじめ皆の頭には今回参加できなかった人環大生たちのことがあったと思う。昨年あんなに楽しんでくれたのに、である。年々更新されていく学生メンバーにとって１年間の中断が大きいというのは、経験上知っている。2016年奈佐の浜・学生交流会が海ごみサミット開催の都合で一旦リセットされたと、下田さんから報告も受けており、またコロナ禍の関係で岐阜大学サークルESDクオリアの新入生勧誘が出来ず、それが原因か否かは別として現在は解散したことなどが、頭をよぎる。

再チャレンジしなければという皆の思いを、彼女らは受入れてくれた。そして、2025年3月「旭・足助合宿」へと向かう。



旭・足助から天龍村へ　～ 「関係人口」を意識する ～

テーマは、しきしまの家（2023.4月オープン） 自給家族での取組みにおいて「関係人口・関係自治の創出」を掲げる**鈴木辰吉**さんのお話が起点となった。その言葉は恥ずかしながら、それまであまり意識していなかった。上流域はどこも、人口減少や村の存続という現実と向き合いながら新しい時代を模索する、ある意味日本の先進地、パイオニアであることを痛切に教えられた。旭地区では「健全なお米づくり」あるいは「流域としての森林管理」をツールとした関係人口創出をめざしており、その拠点となるのが「しきしまの家」だ。少なくとも、ここのランチと空間がとても魅力的であることは、是非都市の方々にもお伝えしたい。



この他、足助地区で獣害対策に取り組む猟師・**清水潤子**さん、山部会でお馴染みの**洲崎燈子**さん、**山本薫久**さんにも参加いただき、実際 矢作川流域圏懇談会とこれほど深く繋がったのは、初めてのことではないか。何せ愛知県内では初開催ともなる。



次回2025年度に向けての合宿は、人間環境大学の渡邉昭政さん、中西弥紗さんが担当してくれることも決まった。このあたりをきちんと確認しておくところが、三ツ松さんの抜け目ない所である。もちろん褒めている。







2025年の企画を進めるにあたって、人間環境大学の学生が運営を担うのは初めてのことであり、渡邉さんや中西さんなどとは何度か打合せの場を持った。何も焦ることはない。2024年度をもって河川基金5年間の助成期間を終えたばかりで新規の手もあげていない。地域の未来も既に企業財団助成が打切られていたが、逆に言えば縛られるものは何もない。基金的なものがわずかながら、いくつかストックしてあり何とかなるだろう。学生たちが自らやりたいことを見つけた時、それが夏であれ冬であれ実現していけば良い。

確か中西さんが、造園や緑化に興味があり、そんな仕事もしたいと呟いたので、5月下旬に**愛知・川の会**で予定していた豊田市の近自然公園「児ノ口公園」や籠川・広沢川の川づくりを巡るエクスカーションへとお誘いしたら来てくれた。藤前干潟ガタレンジャー（本事例集37頁参照）も経験しているという三宅清音さんが、「海上の森」にとても興味があるというので早速、6月にワンデー・スタディツアーというのを企画してみた。案内に協力いただいた曽我部行子さん、日本トンボ学会・松沢孝晋さんには深く感謝する。里山環境、湿地環境の劣化という課題は、2005愛知万博以降深刻化しており、矢作川上流部とは若干性格が異なるものの考えておくべき課題である。「営み」のない県有林だという事情もあろうか。私自身が万博瀬戸会場造成で関わって以降、疎遠となってしまった海上の森を再訪したかった、というわがままでもある。


2025.2月 学生合宿 旭地区押井町普賢院（森林施業を計画）


2025.5月 愛知・川の会 籠川エクスカーションへ 中西、渡邉さん



2025.6月 人環大生 海上の森へ





昨年まで学生たちを引っ張ってきた信州大学の渡邊美里さんは、卒業後に地域おこし協力隊として天龍村へと移住、先発移住していた於保樹先輩とも晴れて結婚し「森の民」として生きる覚悟を決めているようだ。この風の便りを元に「まずは、美里先輩の話を聞こうか。ついでに天龍村がどんなところなのか見に行ってこようか」などと割と軽いノリで南信州に向かったのが、初夏の暑い暑い6月のこと。しかしながら、私たちは一瞬で、この地の空気と人に魅了されてしまう。





2025.6月 長野県天龍村へ

結果的に、もう合宿はここでやろうと決めた。もはや今回は下見かと思いきや、とんでもない。日帰りではあったものの、この日の経験は既に研修そのものである。美里さんからこの日紹介いただいた方々と現場を目の当たりにし、驚きの連続でもあった。入念に準備いただいたのだろう。

南信州の伝統野菜を、肥料すら地産資源を活用し栽培する板倉貴樹さんと、美里さん同様 地域おこし協力隊出身で農業を始めた望月ひとみさん、そして向方地区では何やら「舞い」の練習をしている怪しげ、いや神秘的な方々を紹介いただく。その中に於保先輩もいた。

この舞いは、国の重要無形民俗文化財にも指定されている「**向方のお潔めまつり**」神楽の一つだそうであり、神々しくもある。練習していた人々も地元の方々ではなく、愛知や関東などから通いで来ているとのこと。太鼓や笛を奏でるのが、地元の村松久一さん、村松英文さんである。


2025.6月 長野県天龍村へ（結果的に合宿下見に）









練習の合間に、私たちと彼らで語り合いの場を持たせていただいた。何故こんな遠方まで舞いを習いに来ているのか、その魅力は何なのか。村松さんらは「本来は地元だけで執り仕切る祭りであったが、天龍村も人口減少が進み、祭りどころか村の存続自体が危ぶまれている。遠方から来てくれる方々がいるのは、非常にありがたい」と言う。そうか、祭りや舞いといった文化を使っての「関係人口創出」というのもあるんだ。

於保先輩も信州大学生時代、そんな天龍村に魅せられた一人だったろうが、彼に移住を決意した経緯などを根掘り葉掘り聞いてみた。親には頑なに反対されたらしい。村松さんたちも、ここでの生計は保証できないし、「やめとけ」と伝えたそうな。勘当されたとしても「俺はブレない」と決意・移住し、美里さんが１年後にやってきたわけだ。決意した夜、酒の飲めない先輩も村松久一さんも共に一晩語り合い、飲み明かしたという。


2025.9月 学生合宿 天龍村へ！



先輩は移住後も苦労されたそうであるが、向方という地にやっと自分が受け入れられた、馴染んだと感じられるようになったのは、この祭りと舞いの練習を通してのことだったらしい。

これらの話は、人それぞれではあろうが、これから自ら生き方を模索していかなければならない学生たちに、すなわち合宿本番でも語ってもらいたいなと思ったが、於保樹先輩はどう見ても、とてもシャイな方、無理だろうな。したがって本稿で記しておきたい。

2025年9月、通算6回目となる「森のミライ合宿」が初めて矢作川流域を越え、長野県天龍村で開催される。特筆しておきたいのは、この回に米田紗歩さん（建設コンサル）、川野純也さん（林野庁）、佐竹寅次郎さん（信大院）、於保美里さん（地域おこし協力隊）、牧野純怜さん（信大学生）が全員揃い踏みして、そして今回初めて運営を担った人間環境大学の渡邉昭政さん、中西弥紗さんへと継承されていった、何だろう、たった3年半のことなのだけれど、歴史そのもののようだった。心なしかいつもクールな佐竹君の様子が、感慨に浸り高ぶっているような気もしたが、まあ気のせいだろう。

プログラム自体は6月訪問時のものを踏襲、地元の同じ方々に協力をお願いし、当然ながら於保夫妻にも同行いただくことに。加えて今回、今年度限りで豊田市矢作川研究所を早期退職・結婚し、来春岐阜県美濃市へと転居される**洲崎燈子**さんをお迎えし、婚約者の高橋啓さんにもオンラインにてお話を聞く場も設けた。いずれにせよ、学生同士も含めて十分語り合い、交流する場と時間を大事にした。3年前、**根羽村の小野**さんから啓示を受けた「森の時間」というものを、凄く意識してしまう。

2025.9月 学生合宿 天龍村へ！



地産伝統野菜「ていざなす」







これは「都市(まち)の時間」







「森の時間」




ミライ合宿 2025
in 天龍村

伊那谷からその先を見つめる
～ 新たなIVUSAとの交流を経て ～

IVUSA 国際ボランティア学生協会という存在を知ってはいたが、中部には支部もなく、私たちとの関わりは薄い。全国川ごみネットワーク代表の金子博氏は、パートナーシップオフィス（PO;山形県酒田市）として2015年より、IVUSAと連携し飛島での海岸清掃活動に取組んでいる（PO 清掃活動は2001年～）。そんな金子さんから招待を受け、地域の未来・三ツ松さんが2025年8月夏のIVUSA活動に参加すべく山形へと向かった。

IVUSA自体は、全国の学生が数千人規模で所属する組織であるが、登録には入会金と年会費１万円程が必要らしい（2026年度時点）。学生にとってはそこそこの負担とも思うが、それでもなお自主的にこれに参加し、意欲を持つ彼らにその動機などよく聞いておいてねと伝え、送り出した。この時は、それほど強く興味があったわけではない。


IVUSA HPより

そんな三ツ松さんから一報が届く。聞けば、中部支部はないけれど活動の拠点はあるらしい。それが天竜川伊那谷(飯田市)での竹林整備活動であり、メンマも作っているとのこと。地元で協働する人たちがいる、というのはすぐにピンときた。「**天竜川鵞流峡復活プロジェクト**」の**曽根原宗夫**さんに、違いない。案の定である。ここから急にIVUSAへの関心が高まっていく。懇談会山部会で訪問（2017.9月）したこともあり、事例集取材に飯田市まで伺った一人は、私である。


2019.3月発刊 事例集より

全国川ごみネットワークでは、2025.9～11月にかけてオンラインによる「全世代リレーミーティング」が企画され、その第１回目の登壇者が三ツ松さんと「魚と子ども」新玉拓也さん、そして第2回にIVUSAの方々が登壇される。信州大学 MAGESの学生たち登場（第3回）を経た後、12月に川ごみサミット開催した訳であるが、この貴重な対面と交流により、年明け2026年3月「未来創造」学生たちを引き連れ、伊那谷へと向かうこととなった。しかもMAGESの学生たちまで巻き込んで、である。

伊那谷には、地区担当外ではありながらサミットで出会ったIVUSA 箭野純貴さんまで来られ、関西事務局の深山恭介さんや多くの学生を繋いでいただき、実に濃密な時間となった。


IVUSA HPより2025.8月 飛島2025 ／ 三ツ松さん参加


2025.12月 川ごみサミット（東京）IVUSA／三ツ松


2026.3月 飯田市へ！





2026.3月 伊那谷2025竹林整備
／ 未来創造プログラムの合流



















曽根原さんとは、2019年2月の取材以来なので実に7年ぶりの再会となり、「その後いかがお過ごしですか？」と新たな展開などを聞いてみる。**鷲流峡プロジェクト**からどんどん広がっていき、NPOいなだに竹Links、全国展開する純国産メンマプロジェクトなど大活躍のようである。IVUSAとの「**伊那谷環境保全活動（竹林整備）**」連携については、2019年に構想されていたもののコロナ禍で実現できず、2022年になってようやく始められた。きっかけはIVUSA学生だった方が、飯田市役所職員となり、彼が提案したことのようだ。経験と学びが地域デザインへと繋がったということであり、素晴らしい。

私も三ツ松さんも、わが学生たちも、実に多くのIVUSA学生たちと話をすることが出来た。私たち世代は学生、若者たちを一括りにしたがるのであるが、そうではない。IVUSAを介してボランティア活動に関わる動機も目的もそれぞれであり、それは私たち「未来創造」も同様である。自分たちが学生だった時代もそうだったはずであり、実は何も変わりはない。社会自体は、この50年程で随分と変ってしまった。その責任の一端は、われら世代にも大きくあり、この間に見失ってしまったものが何なのか「**豊森**」**澁澤寿一**塾長が仰っていた様に（88頁参照）探り、再構築すべきということか。

それは、単に若者世代に押し付けるものではなく、私ら含めあらゆる世代が共に進めていくことになろう。今回の彼ら彼女らの笑顔を見ていると、それが出来そうな気がしてくる。

学生たちの「森へ行こう！」は、矢作川流域圏懇談会・山部会と深く連動しながら進めてきたような気がする。そもそもこのスタイル自体、意識したわけではないが、山部会ワーキングそのものだ。議論し夜も徹して語り合う、当然現場での体験は不可欠となり学び、気づき、認識も深まっていく。

さて、9月天龍村での合宿を終えた後、次年度（2026年度）に向けた学生リーダーは、引続き人間環境大学が担ってくれることとなり、新たに照井友菜、服部大輔、可兒日和さんらが、既に始動、この伊那谷研修会だけでなく、本事例集取材にも関わってもらっている。まさに「**流域圏大学**」と言えよう。



2026.3月 飯田市へ！







おわりに

次へと繋げる

流域圏大学の創造へ



愛知・川の会　近藤 朗

妄想の共有と実現　～流域圏大学の核とは～

ニワケンが言っているように「流域圏大学とは作るものではない」のだろう。危機感とそれを解決するための妄想を共有しながら、みんなでやればいい。しかしながら、何か流域圏大学のコアとなるものは必要なのではないか。まずポリシー、理念としては「**水循環基本法**」をベースに置けば良いと思う。それを実現させる方策としては、流域総合水管理という考え方も提唱されているが、これを完全なものとして捉えるのでなく、さらに熟成、昇華させていく私たちの相当な覚悟と努力も求められようか。ただし持続可能であることが大事なので、ワクワクしながらね。

冒頭対談で、萱場先生が「確固たる拠点が必要だ」と語っているが、それは大学キャンパスそのものというよりも（もちろんあれば良いのだけれども）、精神的支柱である「人」であったり、居場所というような意味合いかもしれない。蔵治先生は、「既にある学びの場みたいなものをネットワーク化する段階もあり」と仰られている。



矢作川流域圏懇談会10年誌座談会（2020年）でもその議論はしていて、「流域のセンター機能」をどうしていくのかをテーマにした。矢作川流域で言えば、山においでん・さんそんセンターがあるけれども、川・海ではどうか。その中で豊田市矢作川研究所は一部でその役割を果していたと思っている。そして矢作川流域圏懇談会自体がどのような役割を担い、どこまで広げていこうかというような話し合いをした。その時は、「流域圏大学」という言葉を使っていないのだけれども、何だか繋がっている。

拠点＝居場所だとすれば、私の中ではニワケンの「HYAKKEI」がまず思い浮かぶ。元々田舎では、「誰かの家と縁側」が拠点だったのではないか。しかもキーパーソンとセットになっている。

このような居場所が都市にも必要ではないだろうか。もしも名古屋駅のすぐ近くに HYAKKEI があれば、愛知・岐阜・三重に広がる奈佐の浜プロジェクトの学生たちが大学の帰りそこに集まり、夜な夜な企画会議が出来たはずであり、そんな場所があれば、そこでコロナ禍中に「ミライ会議」も生まれていたかもしれない。それに近い場所が錦二丁目まちの縁側育くみ隊・名畑恵さんの「七番」であり、三ツ松さんの地域の未来・志援センター事務所であった。これで裏庭があれば言うことはないのだけれど。



錦二丁目「七番」



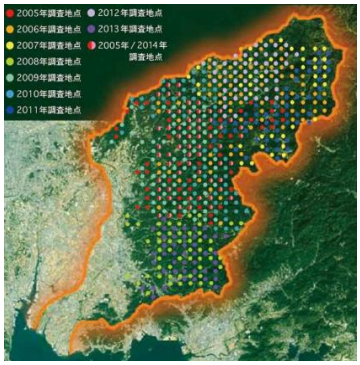
地域の未来・志援センター

伊勢湾流域圏の中の各流域　～矢作川を始め～

日本全国で河川管理者も参加する矢作川流域圏懇談会のような場が存在するのは、他に多摩川流域のみであり、しかも海まで取り扱っているものは矢作川の懇談会しかない。これは極めて重要、かつとても先進的なことである。だから「流域総合水管理のあり方について」審議会答申（2025.6月）の中で一体的な取組みとして紹介されたのであろうし、さらに発展させていきたい。そのための流域圏大学なのであろう。

第1章「川、海から繋ぐ」では、矢作川流域、（矢作川水系）乙川、鈴鹿川流域、庄内川流域での事例を紹介させていただいたが、流域ごとに随分と状況が異なることにお気づきだろう。

人口減少時代を見据えた一つの指標として、人口密度の視点から見た流域、自治体のデータを右に示す。また前回事例集で100年程度の人口推移・予測を掲載したが、もっと長いスパンでの人口推移について下の表に示した。これは西暦800年から2100年までのもので、これは2008年以降に国が策定した「国土形成計画」による。将来予測の部分については当然推定値であり、変動するだろうが減少していくことは間違いなかろう。



豊田市矢作川研究所（矢作川流域）の豊田市においては、2005年の大規模合併が大きな意味を持つ。矢作川流域のおおよそ半分にあたる上流域を管轄することとなり、その合併のタイミングで「森の健康診断」を展開したことの意義は大きい。

岡崎市は、2006年合併により乙川流域（258㎢）をほぼ全域含むという自治体となった。乙川流域圏という面では、行政も市民も流域を意識した社会を構築しやすいというコンパクトな地域となるが、一方で矢作川本川流域との関わりは、やや薄いのであろうか。そういった意味では岡崎市を越えて、森の立場から幸田町や海上の森（瀬戸市）にまで関わっている奏林舎の唐澤晋平さんの動向を見守っていきたい。今回彼に改めての取材はしていないが、次回くらいにでも「その後いかがお過ごしですか？」と訪ねてみようか。



流域･自治体の人口密度

流域	流域 自治体	面積(㎢)	人口 千人	人口密度 (人/㎢)
伊勢湾流域圏（陸域）		18,135	約1,100万人	約600人
矢作川	矢作川	1,830	763	417
	根羽村	90	0.9	10
	平谷村	77	0.4	5
	豊田市	918	418	455
	岡崎市	387	385	993
庄内川	庄内川	1,010	2,611	2,585
	名古屋市	326	2,332	7,144
木曽川		9,100	1,928	212
鈴鹿川		323	124	384
【参考】多摩川流域		1,240	4,069	3,282
【参考】球磨川流域		1,880	120	64

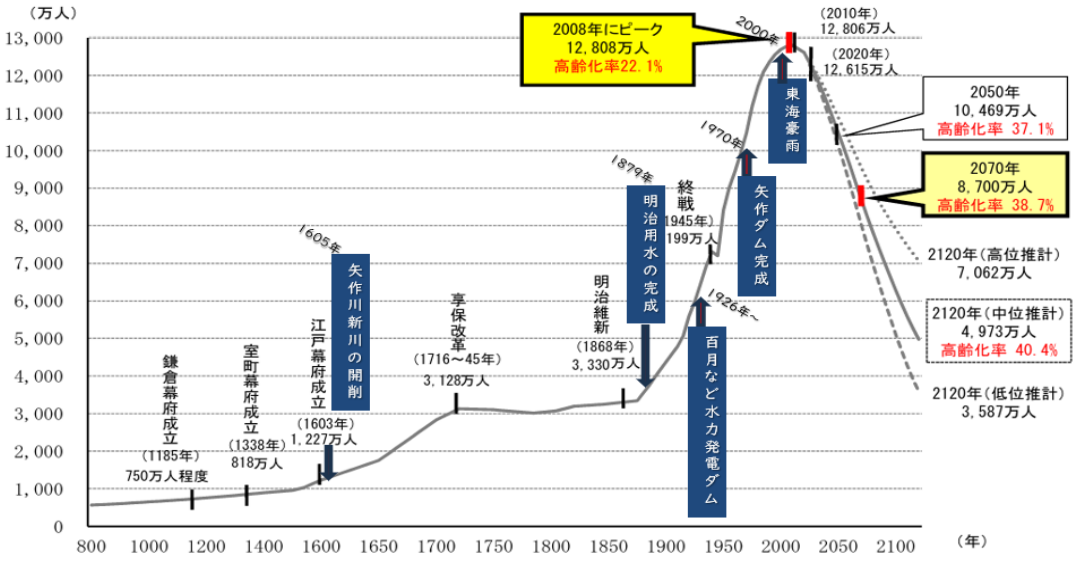
- 伊勢湾流域圏のデータは2017伊勢湾再生行動計画から
- 河川流域データは2010年に国交省がまとめたもの
- 自治体データは2020年総務省データ

＊ それぞれタイムラグがあり、あくまで目安とされたい
＊ 豊田市、名古屋市など＝その流域面積ではない

- 豊田市人口密度は455人／㎢であるが、
  この内旧豊田市域は 1,300人／㎢ 程度であるが
  その他地域は20～300人／㎢ 程度と大きな差がある

我が国の総人口の長期的推移

国土形成計画データに矢作川イベントを示した



（出典）国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」（1974年）。
（注）ただし、1920年からは、総務省「国勢調査」、「人口推計年報」、「平成17年及び22年国勢調査結果による補間補正人口」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（令和5年推計）」により追加。値は日本の総人口（外国人含む）。

「魚と子どものネットワーク」が活躍する鈴鹿川流域（三重県）も非常にコンパクトな流域である。彼ら最大の特徴は、同じ河川で活動する三世代に及ぶ異なる団体を最も若い世代がまとめあげたことにある。今まで数多くの河川団体と関わってきた私から見ても、これは極めて稀有な事例であり、だからこそ「日本自然保護大賞」を受賞したのだろう。代表の新玉拓也さんが、単なる自然好きというだけでなく、社会学まで学んでいたというのも頷ける。



2019.3月 日本自然保護大賞受賞式「魚と子ども」峯さん、新玉代表

私が伊勢湾圏域で最も「流域圏大学」を構築するのが大変だと思っているのが庄内川流域である。大都市名古屋を抱え人口が多すぎるし、人口減少という危機感もいずれやってこようが、まだない。流域という視点では、河口部の藤前干潟での埋め立て問題、上流域の海上の森における万博開発で環境問題としての大きな議論がされたこともあるが、既に四半世紀前のことであり、その後もあまり名古屋市民に意識はされていないように感じる。ごみ問題は解決されたわけではなく、いまだ名古屋市のごみ最終処分場は庄内川上流の多治見市に頼っており（愛岐処分場）、このことも踏まえ流域圏全体を考えていく必要があろう。この流域の自然環境・生態系サービスに資するものとしては、東部丘陵要素という特徴的な資源もあるが、営みはあまり感じられない。藤前干潟を守る会の辻淳夫代表がかつて、干潟だけでなく流域全体をラムサール条約登録したいとの夢を描いていたが、それを実現させるためには一部の人たちだけでなく、都市市民の多くもその意味・意義を十分に理解しなければならないだろうと思う。



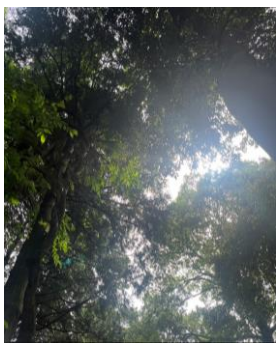
藤前干潟

「自分ごと」とするために

様々なデータが蓄積された現代では、ネット上でも驚くほどの知識や情報量が溢れかえっている。学校では、地球温暖化や気候変動、マイクロプラスチック問題、人口減少社会についても学んでいるという。しかしながら「知っている」ことと「それを自分ごととして捉える」ことは、実は全くの別物である。

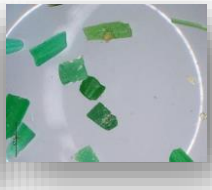
例えば、私のような名古屋市民は、ラムサール条約湿地に登録された藤前干潟のことは知っているが、ここが本来はアナジャコなどの棲む泥干潟であること、それが最近では砂っぽくなっており、これを理解するためには流域全体でのシステムが変化しているのでは、と思いを巡らせなければならない。また、庄内川・新川河口部には大量の生活系ごみが流れ着き、干潟には回収不能なマイクロプラスチックが蓄積していることも、実はそれほど自分ごととは認識していない。

また知識のみで得た情報はアップデートされないことも多く、「山は緑に覆われていなければいけないので市民は植林しにいくべきだ」と思っていないだろうか。今や日本の森林は著しく巨木化が進み「森林飽和」とも呼ばれる時代となった。果たしてこれが決して望ましい状態であるのかどうか。林野行政も「間伐から皆伐へ」と方向転換したようだが、皆伐後の植林に際し、そこに立ちはだかるのはシカなどの獣害対策である。



ごみ問題に関して言えば、随分と多くの市民が藤前干潟や答志島・奈佐の浜へと来てくれるようになった。現場で学ぶことがとても重要ではあるが、その見方についても常にアップデートしていく必要がある。ごみ拾いのみを目的とすれば、発生源対策に目がいかなくなる。ごみを拾っている自分たちは当然ポイ捨てなどしないから、加害者ではないと思っているが、実はそうではない。事例集Ⅴでふれたように、マイクロプラスチックが深刻な問題となっていることを踏まえ、人工芝や徐放性肥料プラスチック（カプセル）、ブルーシートなど建設資材にまで目を向けると、もう他人ごとではいられない。さまざまな生活系ごみの回収管理も完璧なものではないだろうし、私を含め全ての市民が生きて暮らしているだけで、マイクロプラスチックを排出しているのだと認識すべきではないだろうか。





左;徐放性肥料プラスチック
右;人工芝片（千葉賢提供）
＊マイクロプラスチックとは、5ミリ以下のプラスチック片をさす
＊事例集Ⅴより再掲載

海でもう一つ問題となっているのが栄養塩不足の問題で、これも事例集Ⅴで述べた通り。私たちはきれいであることばかりを求めたがるが、真の豊かさについても今一度現場を見ながら、よく考えてみたい。

さて、答志島で「ここで起こっていることは他人ごとではない」と叫んだのは私だが、重要なのは若者たちが「今までは他人ごとでした！」と気づき、認識したことの方である。彼ら若者、学生たちは遂に2026年5月に答志島・奈佐の浜海岸においてアマモ場保全に取り組むべく、花穂採取することから行動を起こしたのである（下写真参照）。ご覧あれ。

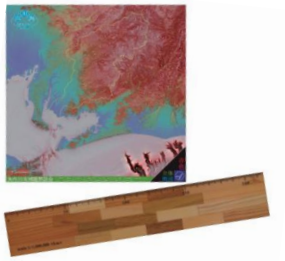
百姓のススメ

～それぞれの「時間」と「モノサシ」～

戦後成長期から現在まで私たちが信じてきた価値観（モノサシ）とは何だったのだろう。高度な専門化を目指し、効率化を求めるあまりどんどんと分業化が進んでいったのではないか。よく縦割り社会とも言われたが、最近では階層ごと世代ごとの分断も進んでいて、三次元、四次元的にも何だかとても窮屈そうだ。何より楽しそうでもなく、事例集Ⅳ「都市の木質化」名古屋大学の佐々木先生が「たこつぼ」と称していたこととも通じるような気がする。

これは人口が集中する「都市のモノサシ」でもあったのだろう。そこが日本のスタンダードだったのだ。では、人口減少時代を迎えて、私たちは新たなモノサシを探していく必要があるのではないか。それは無論、地方と都市では一律なものではないのだろうな。

流域圏事例集Ⅲから今回までの取材を通して、とても意識させられたのは、「森の時間」と「都市の時間」、そして「海の時間」や「田んぼの時間」もあるのだろうということ。そこにそれぞれのモノサシがある。全く違うものではあるが、それぞれが完全に分離され、独立していて良いのか？ 特に大半の人口が集中する都市においては、経済力はあるものの、蔵治先生が重要だと言われた「衣食住」などの面（資源）において自立できているわけではない。ここで都市にも流域という視点（モノサシ）をあてて、かなり補正していく必要はないだろうか。



流域ふろしき、モノサシ







2026.5/30～5/31にかけて実施した答志島桃取アマモ保全会の会議場において、お二人の方と実に興味深い話をした。これからの社会のあり方について、四日市大学の千葉教授からは「**ワクワクする**社会が必要」、前鳥羽市長の中村欣一郎さんから「**百姓のススメ**」を伺った。



「**ワクワクせなあかん！**」というのが、わが人生の師・故延藤安弘先生の口癖でもあり大いに共感するが、ここでハタと考え込んでしまった。まず、今までの私たちは「右肩上がり時代」のワクワク感に染まりすぎていて、今なお、例えばリニア新幹線とか、愛知県が強く進めるカーボンニュートラルであるとかの新技術に目が向きがちなのであるが果たしてそうなのか。持続可能性やソーラーパネル立地上の問題などを考えると、どうも私は前のめりになれない。よく考えてみたいのが、そもそも私たちは今まで、人口増加を前提にした社会システムの技術しか構築していない。すなわち人口減少を念頭に置いた社会基盤の構築は、今まで誰もやったことのない新技術であるということ。これって本当にワクワクしないか？これをあらゆる世代が共に学びながら創造していくことになろうか。



中村欣一郎さん

千葉先生

2026.5/30 答志島桃取アマモ場保全会議で語り合う漁師さんと学生たち

中村欣一郎さん「百姓のススメ」は、別に農業をしろと言っているわけではない。鳥羽市ですら人口減少という課題を抱え、これからは分業化してる場合ではなくて、市民が可能な限り数多くの役割を果さなければということであり、彼はこのことをむしろ前向きに捉えていた。人一人の価値と多様性が高まるのだと。懇談会山部会では、旭地区つくラッセル戸田友介さんのようにすでに実践している山の民も知っており、こちらの方は無条件でワクワクする。関係人口や関係自治にも話は及び、自給家族の鈴木辰吉さんなどへも思いが及んだ。



このことは「森の大学」での大きなテーマとなろう。本事例集で紹介した根羽村では「木づかい」や「山地酪農」、平谷村では観光によって実に大きな関係人口を創出している。これを単なる観光客だと思ってはいけない。もっと深いのである。三河の山里サポートデスク（スズキ広務店）鈴木孝典さんは観光という切り口も使ってはいるが、山里の中で人と人そのものを繋げるコーディネーターの役割を果していることが重要なのであり、これから間違いなく貴重な存在となってくる。

伊勢湾から眺める矢作川流域圏

未来創造プログラムは、その成り立ち（奈佐の浜プロジェクトとの連携）からも、伊勢湾流域圏全体をさらに広げようと視野に入れているのであるが、ここまで広げないと主体的に動く市民や学生たちがこれほど多く集まらないというのも、現状にはある。今回取材で最も嬉しかったことは、「女子森」宇角佳笑さんから「私は伊勢湾流域という視点に立っていたい」と言われたこと。思わず「わが同志よ！」と叫びたくなった。



「未来創造」も伊勢湾と言いながら、矢作川との関わりを持たなければ、これほど広がることは出来なかったであろう。懇談会の存在、担い手づくり事例集を中心としたネットワークがあったからこそ、「森の大学」を活用し多くの学びを得た。

さて、われらが洲崎燈子女史もこの春、矢作川研究所を退職し木曽川流域へと旅立った。同じ伊勢湾流域である。ワクワクしながら「森の時間」を堪能し、百姓人生を謳歌するに違いない。

最後に　「流域の恵みで生きる」の共有

重要なことこそ、いつの間にか忘れ去られることも多いので、ことあるごとに書いておこうと思う。

どうして河川管理者が「矢作川流域圏懇談会」を設立したのか。2000年東海豪雨を契機として国交省が「矢作川水系河川整備（方針に基づく）計画」策定作業に着手した。「矢作川の環境を考える懇談会(2001～2002)」「流域委員会(2003～2009)」そして住民アンケートなどで出された課題の多くは、流域基盤に関わり河川管理者のみでは解決できないものばかりであった。そこで、2009年に策定された河川整備計画では、あらゆる人たちが意見交換し、課題解決を模索する場としての「矢作川流域圏懇談会」という場を計画上で位置付け、2010年に発足したのである。

中部地方整備局「矢作川水系河川整備計画」ホームページより



さらに国は、2020年より河道拡幅のみに頼らない「流域治水対策の推進」方針を掲げ、加えて2025年にはこれを「流域総合水管理」へと深化（審議会答申）させたばかりである。これらにより「矢作川流域圏懇談会」の存在意義は、今まで以上に高まったとも言える。

ただし、これほど多くのセクター、メンバーが参加する懇談会ではあっても、全ての流域圏民が情報共有しているわけではない。そこで懇談会から外部への発信と巻込みが重要となるのであり、そのためのツールとして2013年から「担い手づくり事例集」、2021年から「公開講座」を実施するなど、様々な手法を展開してきたのである。「流域圏大学」という概念の重要性もそこにあろう。

「流域圏大学」で何を共有すべきか。まずは、「**流域の恵みで生きる**」ことの再確認だと思っている。これは懇談会山部会のテーマ「矢作川の恵みで生きる」の共有からきているが、決して山に限る話ではない。私たちが何十年にわたって失ってしまった感覚ではないだろうか。担い手づくり事例集とは、それを改めて掘り下げ、探る旅だったような気がする。今回事例集で取り上げた過去の事例については、次頁に示したのでご覧いただきたい。

根羽村の風景



最後に、「土木學會誌」最新号（2026.6月）に「砂防・治山を知る」が特集され、その中でわが山部会座長蔵治光一郎先生の興味深い発言が掲載されていたので紹介したい。「水循環（基本法）全体デザインの下、河川法、砂防法、森林法が展開されるべき」主旨だと捉えたが、これは治水三法成立（1896～1897年）後の、ある意味分業体制が確立された下でそれぞれがプライドを持ち事業推進してきた時代、すなわち人口増加（開発）時代であったならば、反感を招く発言なのかもしれない。しかしながら今は違う。人口減少時代だ。

私自身は大いに共感したのであるが、社会基盤にかかる未来デザインは現在、大きな岐路に立たされており、ワクワクしながら流域全体、そして国民全体で考えていきたいと思った。ちなみに私自身は、河川屋と砂防屋をやっていた身である。

矢作川流域圏懇談会 担い手づくり事例集 2013-2025

緑色は本事例集に関わる団体・人

年度	事例集	取材対象（敬省略）　＊太字は今回事例集と関連する	取材者など
2013	山村再生Ⅰ （2014.3月発刊）	根羽村森林組合（今村豊）、恵南森林組合（大島徳雄）、串原林業（三宅大輔）、 NPO奥矢作森林塾（大島光利）、矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協 丹羽健司）、 とよた森林学校（北岡明彦）、とよた都市農山村交流ネットワーク（山本薫久）、 豊森なりわい塾（地域の未来・志援センター／中川恵子）、M-easy（戸田友介）、おむすび通貨、 旭木の駅プロジェクト（高山治朗）、千年持続学校（高野雅夫）、green maman（宇角佳笑ら）、 農業再生法人 みどりの里（野中慎吾）、岡崎森林組合（眞木宏哉）など　全21団体	18名 **洲崎燈子、近藤朗** **浜口美穂**（全回） ／ **蔵治光一郎**、 安藤里恵、西原均、 鈴木啓佑、**沖章枝**、 長澤壮平ら
2014	山村再生Ⅱ （2015.3月発刊）	木の駅ねばりん実行委員会（南木一美）、たけうち牧場（竹内通王）、アンティマキ（村田牧子）、 てくてく農園（横江克也ら）、あさひ若者会（鈴木啓佑、戸田友介ら）、新盛里山耕流塾（鈴木智）、 こいけやクリエイト（西村新）、アグロ・プエルタ（藤本浩幸）、 とよたプレーパークの会（小黒敦子）、NPO矢作川森林塾（裕伸夫）、矢作川水族館（阿部夏丸）、 じさんじょの会（荻野昌彦）、宮ザキ園（梅村篤志）、額田林業クラブ（山本恵一）、 東幡豆漁業協同組合（石川金男）、佐久島 Oyaoya Cafeもんぺまるけ（神谷芝保）など　全21団体	20名 ／ **唐澤晋平・萌**、 **大島光利、山本薫久、** **今村豊、丹羽健司、** CWP 田中五月、 國村恵子、**高橋伸夫**
2015	山村再生Ⅲ （2016.3月発刊）	飯伊森林組合平台事務所（鈴木元）、天下杉（石原明子ら6名）、NPO夕立山森林塾（佐藤大輔ら）、 おいでん・さんそんセンター（鈴木辰吉）、あさひ森の健康診断（鈴木辰吉）、 あさひ薪づくり研究会（安藤征夫）、有間竹林愛護会（原田茂男）、first-hand（松島周平ら）、 額田木の駅プロジェクト（唐澤晋平）、岡森フォレスターズ（南條清二ら）、 蒲郡市漁場環境保全協議会（伊藤幸昌）、島を美しくつくる会（鈴木喜代司ら）など　全22団体	20名 ／**清水雅子、石原淳**、 大森正昭、宇野利幸、 井上崇也、溝口裕太、 **吉橋久美子**ら
2016	山村再生Ⅳ その後いかが お過ごしですか？ （2017.3月発刊）	2013山村再生担い手づくり事例集Ⅰのフォローアップ調査（21団体の内 **17団体** の再取材） 根羽村森林組合（今村豊）、農事組合法人 杉っ子（石原みちゑら）、根羽村猟友会（西尾竹司）、 NPO奥矢作森林塾（小林太朗ら）、NPO福寿の里自然倶楽部（渡会三治ら）、矢森協（西川早人ら）、 とよた森林学校OB会（山本薫久ら）、M-easy（戸田友介）、green maman（宇角佳笑ら）、 みどりの里（野中慎吾）／農福連携へ、NPO中部猟踊会（日浅一）など	13名 ／ 蜂須賀功、斎藤 大佑、眞木宏哉、 **丹羽健司**、 BESS江口佳志ら
2017	流域圏１ （2018.3月発刊）	なつかしい未来の会（堀賢次ら郎）、農家民宿 ちんちゃん亭（鈴木啓佑・桂子）、 敷島自治区（鈴木正晴）、合同会社 木かんしゃ（庄司知生）、小渡セイゴ水辺愛護会（鵜居利行）、 足助きこり塾（丹羽健司ら）、山恵（鈴木良秋）、めぇープルファーム（鈴木光明ら）、 里楽暮住しもやま会（倉知雅博）、矢作川天然アユ調査会（新見克也）、 古鼡水辺公園愛護会（村山志郎）、橋の下世界音楽祭実行委員会（永山愛樹）、NPOりた（天野裕）、 NPO森を再生する会（神谷輝幸）、環境ボランティアサークル亀の子隊（鈴木吉春）など　全19団体	24名 ／ **三ツ松由有子**、 中田慎、**曽我部行子**、 服部朋悦、内田雅之、 庄司知生、小島徳文、 大重隆太郎ら
2018	流域圏担い手Ⅱ （2019.3月発刊）	天竜川鵞流峡復活プロジェクト（曽根原宗夫）、根羽川漁業協同組合（西尾竹司）、 愛知・川の会（近藤朗）、つくラッセル（戸田友介）、正晴会（鈴木正晴）、 伊熊営農クラブ（後藤京一）、NPOマルベリークラブ中部（藤澤秀樹）、すぎん工房（渡邊さとみ ら）、 畦道（今枝美恵子）、岩本川創遊会（小野内康伊）、豊田土地改良区資料室（逢志保）、（豊田市森林 課）故原田裕保さんを偲んで、奏林舎（唐澤晋平）、ウッドデザインパーク株式会社（杉浦寮子ら）、 有限会社オフィス・マッチング・モウル（内藤美和、池田ちか）、岡崎市ぬかたブランド協議会 （眞木宏哉ら）、矢作川沿岸水質保全対策協議会 内藤連三　など　全19団体	20名 ／ **清水雅子**、 **瀬川貴之**、神本崇、 **野田賢司**、筒井信之、 安井雅彦、 **吉橋久美子**ら
2019 ～ 2020	**懇談会10年誌** （2020.12月発刊） （2023.10月 第2版）	**懇談会10年誌【パイロット版】**（2020.3月発刊） **懇談会10年誌**　矢作川がつなぐ人びと、未来へのキセキ ／キーパーソン取材【流域圏大学】講師陣 ／ 担い手づくり事例集座談会　「岩本川ふるさとの川づくり」CWP 瀬川貴之 「に・な・い・て・は・ぐ・く・む」名畑恵	
2021	流域圏担い手Ⅲ 学童保育木造化 プロジェクト （2022.3月発刊）	学童保育木造化プロジェクト　**「妄想の共有と実現」** ／ 昭和区山里学童、同松栄第一・第二学童、緑区あおぞら学童、尾張旭市はくほう学童保育クラブ 森と子ども未来会議（鈴木建一、東海林修）、季の野の台所、桑山工務店（桑山久）、 奏林舎（唐澤晋平）、小原木材（小原淳）、(株)しらい（白井仁士）、安井工務店（安井健） ＊川上・川下双方向の関係性交流／未来創造プログラム「森へ行こう」合宿　全11団体(施設)	9名 ／ **今村豊**、辻康子 （南都留森林組合）
2022	流域圏担い手Ⅳ 錦二丁目都市の木質化 プロジェクト （2023.3月発刊）	錦二丁目 都市の木質化プロジェクト　**「タコつぼからの脱却」「都市のいいとこどりをやめよう」** まちの緑側育くみ隊（故延藤安弘）、錦二丁目エリアマネジメント(株)（名畑恵）、 錦二丁目まちづくり協議会（滝一之、船橋浩三）、(株)竹中工務店名古屋支店（河崎泰了）、 再生空間合同会社（大橋俊夫）、浅井さんご一家（浅井雅弘はじめ4名）、 名古屋大学環境学研究科（高野雅夫）、生命農学研究科（佐々木康寿「たこつぼ脱却」、山﨑真理子） 豊田森林組合（山田政和）、旭木の駅プロジェクト（高山次朗）、同事務局（西川早人、戸田友介）、 愛知県森林保全課（鍋田拓哉）、同林務課（木材活用促進／高嶋修ら）　全13団体 ＊豊森なりわい塾 澁澤寿一 塾長との語り合い「SDGｓのいいとこどりをやめよう」	12名 ／ **筒井千遥**、 **佐竹寅次郎**、 **川崎海斗**、 **金井亮介**ら
2023	流域圏担い手Ⅴ 伊勢湾・三河湾 の豊かさを考える （2024.3月発刊）	伊勢湾・三河湾の豊かさを考える 鳥羽市立海の博物館（平賀大蔵）、島の旅社推進協議会（濱口幸子、濱口浩代、山本嗣代）、 伊勢湾・三河湾と流域の森林（藏治）、22世紀奈佐の浜プロジェクト（近藤朗、小浦嘉門、千葉賢）、 未来創造プログラム「海へ行こう」チーム、鳥羽市長・中村欣一郎、 オフィス・マッチング・モウル（内藤美和）／島を美しくつくる会（西尾市 三矢由紀子）、 鳥羽市水産研究所（岩尾豊紀）、三重大学水産実験所（松田浩一）、 愛知県栄養塩管理検討会議（**鈴木輝明**、愛知県水産課 松村貴晴）、 愛知県水産試験場（石田俊朗）、三重県水産研究所 鈴鹿水産研究室（岡田誠）　全13団体	23名 ／ 蔵治、**青木伸一**、 鈴木輝明、**小浦嘉門**、 榎並万里子、 **未来創造Pチーム** **渡邊美里、石原龍太、** **平野智也、向井雄紀、** **星剛介、米田紗歩**ら
2024	流域圏担い手Ⅵ-1 流域総合水管理 （2025.3月発刊）	流域の視点から見た治水・環境と総合水管理 2024.12月開催 矢作川流域圏懇談会「公開講座」記録（藏治光一郎、萱場祐一、森照貴 ／ 洲崎燈子） 「総合治水から流域治水、そして流域総合水管理へ」（近藤朗）	6名 ／ 萱場祐一、蔵治、 土木研究所・森照貴
2025	流域圏担い手Ⅵ-2 流域圏大学 （2026.6月発刊）	流域総合水管理～ 流域圏大学の構築に向けて 本事例集参照 全16団体 累計 155団体	25名 **累計 190名**

おわりに

洲崎燈子
（豊田市矢作川研究所
主任研究員）



過去最多のページ数となったこの事例集では、はじめて豊田市矢作川研究所が取材対象になった。私はここに28年間、森林生態学の研究員として在籍していたが、2026年３月末をもって退職した。これまで職場の紹介をする際、地方自治体が研究機関を持っている例は少なく、川の研究所というのはここだけなんですよと得意げに話していたが、そこにどんな意義があるのか、実は私自身がよくわかっていなかったのではないかと気付いた。一つの組織に長くいると、客観的な全体像が見えにくく、またネガティブな側面に目が行きがちになる。近藤さんは、長期間にわたり矢作研を「推し」と言って伴走してくださっていた立場ならではの分析、評価をしてくださった。このレポートを読んで、矢作研が設立当初から多くの人の思いを乗せ、その思いで運営されてきた場所なのだと認識することができて、とても嬉しく思い感謝している。

研究というものは、その成果に信頼性がなければならない。一方で、学問的な精度を高めるために重箱の隅を削るような作業を続けすぎると、そもそもの研究目的が見失われてしまう危険性もある。研究者はその折り合いを付けていくバランス感覚と、自身の研究が社会を、世界をどのように良くしていけるか自問し続けること、研究者以外の人々の思いや期待にどのように応えていけるのかを考え続けることが必要だと思う。また、その分野では専門家の共通認識になっており、世の中をより良くするために役立つのに一般には知られていない情報や技術がたくさんある。それらをわかりやすく紹介し、広めることも、研究者の重要な役割である。流域圏大学は、そのようなスタンスの研究者が集い、視野を広め育っていく場にしていきたい。みんなの知りたい、つながりたいという思いが流域を、世界を少しずつ変えていく。また、序章の対談でも語られていたように、関係者がフラットな立場で、互いを否定せず自由に話し合う場をつくり、守り続けることもとても重要である。

本事例集で取材対象者となった丹羽健司さん（ニワケン）が、流域圏大学は勝手に名乗って後から定義がついてくるくらいでいいと言っていたが、私も同感である。これは、序章の対談で蔵治さんや萱場さんが言っているスタイルとかなり違うようにも感じられるが、持続可能な流域をつくるために必要な研究を進めその成果を生かし、人を育てるという目的は一緒なので、折り合いは付けられると思う。私たちが住む場所が幸せな形で続くためにできることを気負わずに楽しく、ゆるゆるとやっていきたい。そして、流域圏大学も矢作研のように、たくさんの人が思いをこめて「あれをつくったのは自分だ」と語る場所になってほしい。

第１章で紹介された乙川をめぐる取組は、川の魅力をまちづくりに活かすアイディアと手腕が秀逸である。写真を見ると、懇談会のフィールドワークで訪れた現地の美しい風景と、楽しい時間が蘇る。新玉さんのような人と人のつなぎ役、コーディネーターは重要で、こういう役割を果たせる人を増やす意味は大きい。

自身が暮らす地域の自然を知ることには確かな魅力がある。それを子どもの頃に五感で教えてもらった人が長じて、教えてくれたグループの運営に関わるようになる。魚と子どものネットワークでも藤前干潟でもそのような流れができたことは、本当に意義深いと思う。

第2章で取り上げた矢作川源流の根羽村は山部会でもおなじみの場所で、身体知や人が自然につながれる仕組みづくりの大切さが語られた。最源流の平谷村は長野で人口最少だが、それを逆手に取った子どもの自主性を育てる小学校の運営や、ウェルビーイングの実践事例が紹介された。三河の山里サポートデスクは、地域の人が気付けない地域の魅力を掘り起こし、それを観光資源にして関係人口を増やす取組である。第３章のニワケンと宇角さんの女子森プロジェクト、若者たちの未来創造プログラムは、まさに流域圏大学そのものである。

取材者、書き手も個性豊かで、曽我部さんは庄内川流域への思い、海上の森での活動の反省、これからも関わり続けていくという意思を表明されていた。事務局の小池さんは根羽村の活動への眼差しが良かった。近藤さんのレポートはどれも渾身の力作だが、ちょっと重い（失礼！）。浜口さん、三ツ松さんのレポートも良い。この事例集は話し手だけでなく、書き手の思いが伝わってくるのが魅力だと思っている。

私は矢作川流域から離れ、木曽川水系長良川の住人になったが、伊勢湾流域圏に住み続けるということに変わりはなく、これからも、たくさんの素晴らしい気付きを与えてくれた矢作川流域圏懇談会に関わり続けていくつもりである。さらに、矢作川流域を含む伊勢湾流域圏内で、多様な人の出会いとコラボレーション、その一環として流域圏大学づくりのお手伝いをできればという思いを新たにしている。

取材者・寄稿者・登壇者名

宇角佳笑（女子よ　森へ行こうプロジェクト）
大嶋謙介（中央コンサルタンツ株式会社）
可兒日和（人間環境大学）
萱場祐一（名古屋工業大学）
川野純也（22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会）
北澤　丞（信州大学）
蔵治光一郎（東京大学大学院）
小池　天（信州大学）
小池時広（豊橋河川事務所）
近藤　朗（愛知・川の会／地域の未来・志援センター）
洲崎燈子（元・豊田市矢作川研究所）
鈴木建一（森と子ども未来会議）
曽我部行子（海上の森モニタリングサイト1000調査の会）
照井友菜（人間環境大学）
丹羽健司（シェアカフェHYAKKEI非常勤店主）
野田賢司（郷土・水環境研究家）
服部大輔（人間環境大学）
浜口美穂（ライター）
原田竜作（中央コンサルタンツ株式会社）
平塚玲美子（信州大学）
松沢孝晋（日本トンボ学会）
水谷　圭（名古屋大学）
三ツ松由有子（地域の未来・志援センター）
山中祐樹（NPO法人鈴鹿循環共生パーティー）
米田紗歩（魚と子どもネットワーク）

（五十音順）

表紙・扉 デザイン：大嶋明日香